

NO. 53
SPRING
1976

英語展望

ELEC BULLETIN

特集：異文化間

コミュニケーション(1)

祖父江孝男・亀井俊介・石井敏/D. Klopf

(対談) 日本文化を語る

Donald Keene・國弘正雄



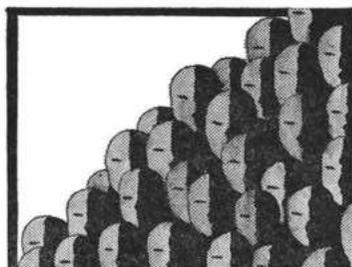
ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL

英語展望

NO. 53
SPRING
1976

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima
The English Language Education Council, Inc.
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo



【国際展望】

Verify Your Quotations	真崎秀樹	2
他山の石	諏訪 優	4
【特集】 異文化間コミュニケーション (1)		
日本文化を語る	Donald Keene・國弘正雄	6
国際コミュニケーションと日本人の意識構造	祖父江孝男	15
辺境文化の意識	亀井俊介	18
A Comparison of Communication Activities of Japanese and American Adults	Satoshi Ishii・Donald Klopff	22
疑問文 (II)	太田 朗	27
バラッドの世界 (その4)	平野敬一	32
海外における日本人駐在員の動態と英語ショック	小池生夫	36
英語の諺 (その2)	戸田 豊	42
Challenge and Response	國弘正雄・上田明子・若林俊輔	45
「国際英語」と学校教育の英語/日本人の英語について		
【Forum】 英語教育界の保守性	海江田進	49
【新刊書評】 『新コンサイス和英辞典』	金子 稔	51
新刊紹介		53
新刊案内		55
展望通信		56

表紙デザイン

太田英男

VERIFY YOUR QUOTATIONS

MASAKI HIDEKI

真崎秀樹

I am reminded of the professor who in his declining hours was asked by his devoted pupils for his final counsel. He replied, 'Verify your quotations.'

これはチャーチルが、第二次世界戦争回想録(第八巻)の中で、自分が記憶違いから不正確な話をしたことを思い出して書いている言葉である。私は老教授の言葉をもじって、verify your information と言いたい。事実の確認が国際的な視野とか感覚とかを養う第一歩と思うからである。国際間の mutual understanding ということがよく言われている。殊に外務官僚(私も数年前までその一人であったが)の起草する文章には、ふた言目には mutual understanding と謳っている。しかし mutual understanding の前に mutual knowledge が必要であろう。そして knowledge は事実の確認から出発すべきものと思う。

昨年両陛下御訪米中のことであった。10月6日、ニューヨーク市長夫妻の午餐が終わって、市長公舎 Gracie Mansion の玄関で自動車にお乗りになるとき、皇后様はふと外套をお忘れになったことに気がおつきになったが、例の通り誠にゆったりとして、にこやかに「誰かが持ってるんでしょ」とおっしゃって自動車にお乗りになり、motorcade はすぐ動き出した。外套は北白川女官長が持っていたことがあとで分った。ただこれだけのことであり、何の騒ぎもなかった。

その日の夕方、私がホテルの部屋でテレビを見ていたら、この午餐のことを放送して、Somebody stole the Empress's coat. と言っている。翌朝の新聞もこのことを報道し、外套は女官が持っていたが、彼女は英語を知らないなので、何の騒ぎか全然分らないでいた、と書いた。騒ぎがなかったのだから騒ぎに気がつく訳はない。しかも北白川女官長は戦前の名門校お茶の水高女の出身で、学校の授業のほかに英語のレッスンをとっておられたので、英語は聞くことも話すことも立派にお出来になる。

それでもこの位の間違いなら、日本を含めて世界各国のジャーナリズムによくある不注意(先入観で勝手に結

論を出す不注意というか怠慢というか)で、気にとめる必要もあるまい。

ところがその後 Boston Globe (米国東都では有名な新聞)に両陛下のご訪米についての某コラムニストの論評が掲載されたが、彼はこの取るにも足りないエピソードに尤もらしい意義を与えて次のように書いている。(これは10月28日の *Mainichi Daily News* に転載されている。)

And there was something magnificently appropriate to the whole East-West experience when the Empress Nagako's coat was believed stolen in New York because a Japanese attendant had picked it up and couldn't understand what all the frantic, English-speaking coat carriers were searching for.

この論評が的をはずれていることは上述の通り。Frantic になった人間なんて、すくなくとも日本側の関する限り、一人としていなかったのである。

しかしこの的はずれの論評が、論者の趣旨とは違った意味で、magnificently appropriate to the whole East-West experience ではないか。外国人は日本および日本人について随分誤った先入観を持っているし、今日でも彼らは我々や我々の国のことを、事実を確かめもしないで、或はある事実の rationale を調べもしないで、性急な推論によって結論を下していることがしばしばある。我々もまた外国や外国人について同様の誤を犯しているのではないか。

Information を verify しないで推論するとその後の一連の事実についての判断を誤まり、ひいては大きな誤解をひき起すことになる。我々は皆こういう弱点を持っているのであろう。この弱点を利用する悪者がいたり、利用される純情な人がいたりすると、Othello の悲劇になる。

私に「アメリカ」というものをよく教えて下さった故 Dr. James A. B. Scherer は、日本人は too polite で外国人の間違いを直してくれないから、かえって困ると言っておられた。もちろん交際の程度やそれぞれの場合

に応じて、物の言い様は色々あろうが、外国人の誤、特に事実に関する誤は、丁重に然も明確に正してあげる方が親切である。殊に日本および日本人に対する外国人の批評については、我々がこれに同意を表明する明確な根拠が無い限り同調を避けるべきであり、反対すべき理由があるなら、遠慮なくこれを説明すべきである。残念なことに、日本人には今でも外国人に対して何かコンプレックスがあるのか、彼らの誤った批評に対する反駁が足りないように思う。私が数十ヶ国の人々と交際した経験によれば、日本人程外国人の批評に手軽に同調して自分の国の批評をする国民は無い。これでは却って国際的な相互理解を妨げることになる。

私はここで私自身が経験したこのような例を書こうと思っていたが、たまたま1月25日の『朝日新聞』朝刊第5頁に、私の尊敬する外務省の先輩、元駐フランス大使萩原徹氏の寄稿が外国人の性急な推論とこれに対する日本人の反応の適例を示していると思うので、これを拝借することにする。

寄稿は「パリの景観と日本大使館」という題で、「改築には私の基準を十分尊重」という副題がつけてある。

氏は大使として6年間パリにいた間に、大使館事務所と大使公邸の双方を建て替えることになり、パリのいろいろな建築規則を知る機会を得たこと、大使館事務所の方はフランス外務省推薦のフランス人建築家に設計を依頼し、すべてフランスの規則に従い各般の審査を受けたこと、出来あがった建物はガラスと金属の表壁の建物で、気に入った人も気に入らない人もあったろうが、それが現代フランスの標準から、パリの風光を損わないものと、認められたと確信していること、を述べた上で、次のとおり書いておられる。

「この点について私が気になったのは、本紙昨年12月23日朝刊にのった木原啓吉編集委員の「歴史的環境を訪ねて」と題する連載の「配慮を欠く日本大使館」という記事だった。それによれば大使館の建物の外観が、周囲の街並みと調和していないとして、同氏がインタビューされたフランス人は「いくら治外法権の大使館だといってもあんな建物を…」といったという。そのとき氏が、以上のような手続をとって建てられたことを知っておられたら、そのフランス人に反ばくしていただけたはずである。これはその一人のフランス人にあの建物が気に入ったか否かよりも、はるかに重要な問題である…」

(ついでながら、大使館や外交官は、現地の法令を尊重すべきことが、外交関係に関するウィーン条約に規定してある。)

さて我々の方ではどうしたら外国についての正しい知識を得られるのか。私は ELEC のみならず各方面の諸先輩から教えていただきたいと思っている。私が今日まで心得て来たことは、一にも二にも三にも「問う」ことである。書経に謂う「問を好めば裕かなり」である。但し、私は「問い」を最も広い意味に考え、然るべき人に物を尋ねることばかりでなく、物を読むこと、話を聞くこと、人や物を観察すること、その他 information を求める一切の活動を含めることにしている。そして、ある situation において彼らはこういうことを「言う」、「言わない」、「する」、「しない」の積極面、消極面を学びとって、彼らの thought pattern や mores を知ろうと努めている。

外国の人でも、先生とか親しい友人とかのほかは、我々の誤を一々指摘してはくれない。普通の交際では人の誤りを正すことはやはり遠慮する。だからこちらの方から問を好む態度、謙虚に何事も学びとろうとする態度、を示すよりほかはない。

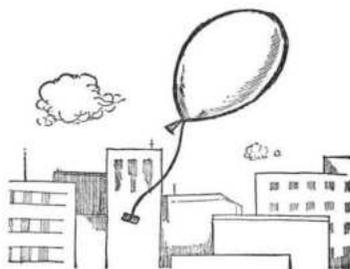
しかし物を聞くことも、そう単純ではない。聞き方と聞く相手をよく考えなければならないが、これは我々自身の知識、経験、教養の反映でもある。

これについての誠に良い教えが、ドイツ語の真鍋良一先生の名著「真鍋ドイツ語の世界」にのっている。真鍋先生は「ドイツ人が言いました」という題目で、「ドイツ人がこう言いました」といってがんばる人があるが、相手のドイツ人の年齢、経歴、趣味、専門、性質なども知らないと、その答えも文句なく信用するわけにゆかないこと、ドイツの商人にきいたのと、大使館員にきいたのと、語学者にきいたのでは、答えが違うことがあるなど、軽妙な筆致で然も懇切に注意しておられる。

これはドイツ語ばかりでなく、すべての語学の勉強について、また語学ばかりでなく、すべての外国の文物の勉強について、言えることである。

Verify your information !

(外務省参与、元特命全権大使)



他山の石

—Black Mountain College のことなど—

SUWA

YŪ

諏訪

優

ノース・カロライナの田舎町ブラック・マウンテンにあった(1933~56) Black Mountain College にわたしに興味を持ちはじめたのは詩の方からであった。

廃校になった当時の学長 Charles Olson (1910~70) の詩論“Projective Verse”(1950)が第二次大戦後のアメリカ詩に与えた絶大な影響を探る中で、Black Mountain College の革新的な教育と、そこで教え、あるいは育った詩人グループの存在が浮かびあがってきた。

加えて、いま art と education と life style という3方向から再評価の動きがいちじるしい Black Mountain College の衣鉢を継ごうと張り切っている同じノース・カロライナの小さなカレッジ St. Andrews に短期間だけいたことがあり、そこで *Black Mountain Review* (B. M. C で詩人 Robert Creeley 編集で発行されていた文学雑誌で、現在活躍中の詩人たちの多くがこれに寄稿していた) 同様の *St. Andrews Review* が年2回発行されていて、わたしがその Tokyo editor であったりする関係で、ますます係わりが深まり、詩の問題と並行して大学教育の問題をもすこしずつだが探りは始めているところなのである。

こういう研究はとうていひとりではできないことではないから、若い仲間とチームを作って仕事を分担し、成果を持ち寄っては討論することになっている。全体像をとらえ、我々なりの評価をくださにはまだ時間がかかりそうだが、そのときがきたらわが国の大学教育にとっても他山の石として多少は役立つにちがいないと思っている。

学長の Charles Olson をはじめ各分野のすぐれた教職員たち、たとえば John Cage, Robert Creeley, Robert Duncan, Merce Cunningham, Franz Kline と学生たちは、ともに学びともに創る、というような生活をしたらしい。

学生の数も多くなく、最も多いときですら200人を大きく越えることはなかったらしい。学年はじめには学生とカリキュラムを作成したというし、法律の学習にはワシントンに出かけて行くなど、とにかく自在な活動を展開したという。

音楽その他の創作活動もさかんで、詩に限っていえば、学生たちの中から Joel Oppenheimer その他、すぐれた新詩人の輩出を見た。

現在アメリカでこの Black Mountain College を experimental community としてとらえ、教育の原点をそこに見出そうとしているのは、文字どおりこの小カレッジが community として機能していたからにはほかならないだろう。

先にもふれたように、人間形成の重要なある時期を art と education と life style の理想的なカタチの中ですごした若者たちは、卒業後も各界に出て非常に優秀だったという。

ところで、Black Mountain College はその理想のたかさゆえに廃校の憂き目に逢ったのである。

もちろん他の理由も加わってのことだが、理想を貫きとおすには当時は多くの困難となによりも周囲の無理解があったようだ。

廃校になった1956年は Allen Ginsberg が衝撃的な長詩“*Howl*”を発表した年であり、その詩がどのような扱いを受け、いわゆる冷戦のさ中にあった当時のアメリカがどのようなかきを想起すればよいだろう。

その点仮りに現在だったら事情は違っていたと思う。

死んだ子供の年をかぞえるようなものかもしれないが、いまならば非常にいい姿と内容の教育の場として成り立っていたのではなかろうか。

当時だからこそ、その理想と実験的な営みに意味と重量があったのだともいえるが、周知のとおり、1970年代にかけての学園の荒廃とアメリカの没落の中であって Black Mountain College の理想が問い直されたということは決して理由のないことではない。

アメリカの没落などという言葉を使ったが、そこからの復元力の強さも強調したい。たまたま建国200年という節目をいま迎えているとはいえ、アメリカが本気で建て直しにかかっている様子ははた目にもうらやましい。

An experimental community としての Black Mountain College が大きく問題にされているのもその

ひとつのあらわれであろう。

マンモス化した大学と中味の空洞化が若者たちに何をもたらしたかはいうまでもないし、ことはアメリカや日本だけの問題ではない。

先日ある学生に Black Mountain College のはなしをしたら——そういう学校はたしかにほしい、でもエリートの中のエリートを純粹培養するみたいになりませんか——といわれた。

なるほど、と考えこまざるを得ない、問題は大きく実に複雑である。

であるから Black Mountain College について調べてみるに当たっても、理想と現実がどんなに食いちがったか、しかし原点としての教育の理念はどうあるべきか、そして Black Mountain College ではどうであったか、それらを資料の正確な把握とともに押えてゆかなければなるまいと思う。

さて、たまたまいま読んでいる Allen Ginsberg の *Allen Verbatim* (edited by Gordon Ball, 1974, McGraw-Hill) は Ginsberg が1970年にアメリカ各地の大学を詩の朗読と自由討論をして歩いた際の記録だが、これまでに書いてきた問題に即して興味ぶかい発言がかなりある。

ユダヤ系のアメリカ詩人 Ginsberg は、またヒンズー教の導師としても若者たちに絶大な支持を受け——これまでいかなるキリスト教の聖職者も彼ほどに若者たちを集めることはできなかった——(Theodore Roszak)といわれるほどなのであるが、彼が大学や学生たち、というより現在の若者たちを見る目はきびしい。

ということは、そういう状況を作り出した国家や管理社会やこと無かれ主義で逃げ腰の親や教師をにくむわけなのだが、東部からはじまってカリフォルニア沿岸で終わる朗読旅行のおわりちかく、州立大学 Davis 分校での討論で、Ginsberg は現在の若者たちと大学について以下のようにいっている。

「基本的にいってアメリカの学生諸君は非常に特殊化した人生を楽しんでいるといえると思う。若者たちがそうすることは実に簡単で——そうでしょう、彼らはこういった巨大な休憩室(この日の会場)を持ち、彼らに魅力のあるもの、ほしいものすべてがまわりのどこでも手にはいる。食べものはカフェテリアで食べられるし、大きな赤ん坊のように際限もなくミルクを供給され、その上、育ちすぎたテレビの若いタレントよろしく大きなピーナッツ・バターの壘を手にして、ほしい本は全部そろろう。ケント大学などでの例外もあるが、ほとんどが非常に隠微的で閉鎖的で、過保護で、あらゆるチャーミン

グな甘やかしの中でアメリカの若者たちはそれをむさぼっているのだと思う。

際限なく供給されるミルクや、小型自動車でガソリンもあまり使わずに走りまわったり、自転車に乗ってデイトしたり、すてきな学生寮があったり——それなのに学生寮の部屋はだんだん小型化し、大学の建物だけが大きくなっていくんだ。」

長い引用になってしまったがおゆるし頂きたい。

アメリカの、特に地方の大学町でののんびりした生活と風景とわが国のそれではかなりのちがいがあがるが、それにしても痛烈な言葉ではないだろうか。

——際限もなくミルクを供給されつづける大きな赤ん坊——とは、もちろん比喩ではあるが、真実でもあり、その意味ではわれわれの子弟、わが国の若者たちに当てはめてもそう遠いことではない。

そのようにいう Ginsberg は若者たちにどのようにしてみよと何をすすめているのだろうか。

1973年度の National Book Award を受けた詩集 *Fall of America* (1972, City Lights Books) でアメリカの荒廃を鋭く突いた Ginsberg は、その余勢をかるようにして1974年に一篇の長詩から成る詩集 *Iron Horse* (City Lights Books) を出し、その中で若者たちに以下のようにいうのである。

「アトム化した文明社会から身を引いて、愛の園を求め、木の下で瞑想した方がいいのだ。そして、やさしいアメリカの若者たちよ、都市を捨てて文明を捨てて田園や森へ行き、そこで真の文明を見つめたまえ。」と。

愛の園だとか瞑想だとか、ひどく現実ばなれしたもののようにも受けとれるが、このくらい強い、ある意味では極端なメッセージによる意識変革が必要だったのではないだろうか。

アメリカとアメリカ人とが急に変わるといようなことはあり得ない。しかし、どこかで、あえていえば若者たちの一部や大学から、新しいアメリカが胎動しはじめているのをわたしは感じる。

Black Mountain College の理想といい Ginsberg の提唱といい、それらをいかにもアメリカ的だということは簡単だが、理想に向かって現実に行動してゆくアメリカとアメリカ人の精神の新鮮さは敬服にあたいする。

振りかえって、わたしたちにそのような理想があるだろうか。また、詩の書き手のひとりとしての自省をこめていえば、若者たちの意識にはげしく迫るメッセージが書かれているだろうか。

年齢を越えて、われわれは緊急にチャンネルを切り変える必要がありそうである。 (詩人)



日本文化を語る

対談

國弘 皆さんこんにちは。きょうは Donald Keene 教授をお招きして私が皆さんになりかわってご質問する、ご意見をちょうだいする、こういうつもりにしております。Keene 先生は皆さんにとってもすでにご案内の方でありますからあらためてご紹介する必要はあまりないかと思いますが、私の知る限りの、また私を感じておる Donald Keene というすぐれた一人の日本研究家について若干申し上げることをお許しいただきたいと思っております。

先ほど、Keene 先生とお話ししておりましたら、つい先ごろテレビの番組にお出になった。もちろん日本語でお話しになったにちがいないのですけれども、そのテレビの番組で、あなたは納豆が食べられますかとか、刺身は何ともありませんかというような質問に多く接せられる。あるいはまた、先生の日本語はたいへんにおじょうずですねなどということがよく言われる。人もあろうに Keene 先生に対して、納豆が食えるか、刺身が食べられるか、あるいは日本語がたいへんにおじょうずですね、などと言うこと自体がたいへんにおそれ多いことであると思えます。と申しますのは、Keene 先生はいまや世界における日本研究、特に日本文学の専門家としてまさに高名隠れもない方です。われわれ日本人よりも日本文学のこと、あるいは文明としての日本のことについてはよく知っておられる。Keene 先生の書かれたものや、あるいはお話を承っておりますと、私などは、どうしてこういう変な外人が出てきてしまったんだろうか、あまりこういうような人がたくさん出てくれるのはわれわれ日本人にとってはた迷惑な話だとすら思うわけです。と申しますのは、たとえば私がアメリカなら、アメリカというものを対象にして若干勉強する際に、どう逆立ちをしてみても Keene さんが日本について非常に幅の広いしかも深い知識を身につけられた、あるいは日本に対するこまやかな愛情を身につけられた、そこまでは到達できないという悪い予感のようなものがする

Donald Keene (Columbia 大学教授)

國弘 正雄 (国際商科大学教授)

からであります。いま Keene 先生は日本文学史をまとめておられる、古代から始まりまして近世を経て現代に至るまでの日本文学の鳥瞰図を3巻にまとめて、来年ですか、英語と日本語との両方で出版されようとしておられる。日本文学について広いレパートリーをお持ちでありまして、たしか学位論文は近松門左衛門の『国性爺合戦』という芝居についてお書きになった。ところが芭蕉についてもたいへんお詳しいし、あるいは『青い目の太郎冠者』という著書に見られるように、狂言をご自分で演じられたりする。また新しいところでは、たとえば谷崎潤一郎、太宰治、三島由紀夫、あるいは安部公房というような人々の作品を次々に翻訳してこられた。先ほど、たくさんの翻訳をお出しになったけれども、何に一番愛着を覚えておられますか、とおたずねしましたら、『徒然草』だとおっしゃいました。そういう先生の日本文学に関する知識と愛情とがどれほど奥行きのあるものであるかが考えられると思うわけです。

いま一つ、Keene 先生のような方が日本に出会って下さり、日本が Keene 先生に出会ったこと、そして日本が Keene 氏を発見し、Keene 氏が日本を発見してくれたということ、われわれにとってたいへんにしあわせであったと思えます。つまり学識があるだけではなくて、こまやかな愛情と、ふところの深い人間理解をしておられる方が、日本と縁あって結ばれたということに非常な喜びを感じるものであります。

現に先生は、ただ単にアメリカで日本文学なり、日本の紹介をしておられるだけではなくて、たとえばアフリカの象牙海岸であるとか、ガーナ、ナイジェリアというようなところまでお出かけになって、日本文学の紹介をして下さっている。その際はどうかフランス語でおやりになるようでして、先生の日本語の確かさもさることながら、フランス語、さらには中国語などにも通じておられる。またこの間永井道雄文部大臣などとご一緒しておりましたときに、永井さんが、Keene さんは日本文

学をソ連に紹介することに懸命になっている第一人者であると言われておられました。したがって先生の橋渡しとしての役割は、単に日米間にとどまらずに、日本とアフリカ、ソ連というようなところにも文学を通じて架橋の作業をして下さる。感謝にたえないところであります。

最後にいま一つだけ申し上げておきたいのは、先生には『日本との出会い』というご著書がありまして、篠田（一士）さんがこれまたすばらしい日本語に訳しておられるのですが、若かりし日の先生の日本との接触・邂逅を描いた一節の中で、たいへんな平和主義者

であられることを示すくだりがございます。人間の命をいとおむという、そういうものを原点として持っておられ、人間が人間を傷つけ合い、殺し合うことに耐えられないという魂の非常にやわらかな方でいらっしゃる。そしておそらくは日本を発見して下さったこと、日本に対して大きな愛情を持ちつづけて下さるといふことは、人の命や生きざまに対する愛が底にあればこそではないか。そしてその人間に対する愛情がたまたま人類の一員としての日本に向けられ、日本の文字や文学に向けられてきた。そこに私は Donald Keene という人が単に一介の日本研究家である以上に、人間のあり方、文明・文化に対する幅の広い観察者であられるという点がひそんでいるように思うわけでありませう。

以上、たいへんに行き届かないご紹介ではありましたが、Donald Keene という方がどういう方であるかをやや広い文脈でご理解いただければと思ってお紹介したわけでありませう。それでは先生にバトンタッチして、ご意見をちょうだいしたいと存じます。ご清聴をたまわりたく存じます。

アメリカにおける日本研究の現状

Keene ありがとうございます。私はやはり非常に恵まれた人間だといつも思っております。というのは私が一番好きな仕事、つまり日本文学の研究をやれるし、そして私の国の人だけではなくて、日本人にも見えてきたことを何よりもうれしく存じます。そういうことは普通の世界にあまりないことでせう。私はいまのところ大体毎年7か月を日本で過ごし、あとの5か月は New York の Columbia 大学で日本文学の講義をし



國弘正雄氏（左）、Donald Keene 氏（右）

ているのですが、もちろんのことですけれども、私は学生たちといろいろつき合いがありまして、どうしてアメリカ人の学生が日本という遠い国に興味を持ちだして、しかも日本語というような非常にむずかしいことを勉強するようになるかというようなことをよく聞かれるのです。人にもよるでしょうけれども、やはりアメリカ人は、最近まで何となくいつもヨーロッパのほうに向かって、ヨーロッパの文化を求めてきたのです。

私が小学生とか中学生のころに、ごく普通の学校でしたけれども、日本のことはまず教科書に出てなかったです。日本文学のことはもちろん全然触れられていなかったわけです。私は何となく日本に文学がないような気がしたのです。つまりあるのだとすると、きっとどっかの教科書にそういうことを書いてあったはずだと思っていたのです。そして長い間、私は、アメリカ文化は英国やほかのヨーロッパの諸国の文化を引き継いだものだと思っていたのです。それはまちがいでないのですけれども、案外日本、東洋の影響も強いのです。

現在日本語をやっている学生の数は非常に多くなっているのです。絶対的な数字を申しますと、もちろんフランス語に及ばないのですけれども、私の大学では、博士課程の学生の数からいうと、ドイツ語よりも日本語のほうが多いのです。それは戦前には絶対想像もできなかったことです。つまりアメリカ人にドイツ系の人も多いし、ドイツに特別な関心を持つような人が何人もいるでしょうが、しかし私の大学で、ドイツ文学よりも日本文学に人気があることは、一種の奇跡だと私は思います。それだけではないのです。いまアメリカの一番貧乏な子供のいるような、貧民窟というようなところで俳句を教えているんです。そういう学生たち、恵まれていないよ

うな生徒たちが、英語で俳句を書くようになってい
ます。おそらく（現在日本に負けないほど、アメリカで
俳句を詠んでいる人が多いです。というのは、普通の子
供では、もちろん叙事詩とかそういうようなむずかしい
詩を書くことはできませんけれども、わずか17字の文
字だったらやろうと思ったらやれないこともないです。
そしてその日本独特の詩型が、アメリカの国民に深く根
をおろしたことになったのです。

私は戦争が終わってからしばらくイギリスにおりまし
たし、アメリカでも教えるようになりましたが、初めの
うちはたいへんやりにくい仕事だったのです。というの
は、多くの人は日本に関心がなかったのです。まず日本
の文学の翻訳はなかった。一番新しい翻訳は二葉亭四迷
あたりだったのです。それ以外に日本文学があるという
ことは一般の外国人に知られていなかったのです。戦時
中いろいろアメリカ人は陸海軍の学校で日本語を勉強
して、そういうことで日本の現代文学や古典文学を翻訳
できるようになりました。それは非常にぜいたくな教育
だったのです。というのは、私は海軍におりましたけれ
ども、その海軍学校に、全部合わせたら、学生が2000人
ほどいたはずですが、その中から15人か20人だけすぐ
れた日本の研究者になったのです。あとの人は、戦争終
りましたら、弁護士になったり医者になったりして、日
本語を完全に忘れてしまった人が圧倒的に多いのです。
しかしその15名を育てるために、2000人が日本語を覚
えたのです。そしてその15名ないし20名の仕事のおか
げで、現在外国では、日本の文化、日本の文学を無視で
きなくなったわけです。

これは非常に極端な話なんですけれども、私は初めて
日本文学を Columbia 大学で教えるようになったこ
ろに、学生たちによく理解できるように、いつもヨーロ
ッパ文学との比較をしておりました。つまり、こういう
日本の小説は、19世紀のこういうイギリスの小説に似
てい
るんじゃないかと、それとも、たとえば『源氏物語』
の終わりのほうが、André Gide の小説に似ているの
ではないかと、そういう話をよくしておりましたが、現
在学生たちの多くは、英語で書かれた19世紀文学をあ
まり読んでない。むしろ日本文学のほうを知るようにな
ったのです。そういうことで、きっと英文学の教室で先
生たちが、これは日本の文学にあるように、英米文学にも
あるというふうにいうのではないかと思います。やはり、
長い間欧米人が東洋を無視したか、それとも、自分た
ちの異国趣味の対象にしたか、そういうふうな、非常に
表面的なつき合いしかなかったのですが、20年ほど前
から初めてほんとうの出会いができたわけです。初めて日本

の文化はどんなものか、日本の文学とか、美術とか、思
想というものが外国でも勉強できるようになりました。
私はそういう啓蒙的な仕事に参加できたことは非常にし
あわせに思います。もし私に、たとえば40年前に全く同
じ知識があっても、全く日本に対する同じような愛情が
あっても、きっとアメリカで就職できなかったと思うの
です。つまりアメリカの大学でそういうような教師を雇
う余裕はなかったはずで、しかしちょうど一番いいと
きに私があらわれたからとても恵まれたと思います。

國弘 いま Keene 先生、自分は恵まれていた、しあ
わせだったというおっしゃり方をなさったわけですね。そ
してまた、たとえば Columbia 大学の大学院ではドイ
ツ語よりも日本語を勉強している学生の数のほうが多い
のだということ、おそらく皆さんもびっくりなさったで
しょう。

そこで先生にうかがいたいのは一体何が西ヨーロッパ
とは異質な世界に対する関心の高まりをもたらしたので
あろうか、そのあたり、アメリカの若者の意識変化と関
連させてお話ししたいと思うのです。というのは、一つ
には先生を筆頭とする、15人、20人のすぐれた日本
専門家のお働きがあった、それが大きく寄与したとい
うことはわかります。しかし同時におそらく先生も『日本
との出会い』で書いておられたように、現代というの
は、必ずしも西ヨーロッパあるいは欧米の専売特許では
ないのだという点もあるように思います。そしていまや
アメリカの若い人々が、欧米史イコール世界史という
ままでの図式から解き放たれて、より広い、空間的、時
間的な視野で人類とか、世界とか、国際社会とかをみる
ようになったその一つの結果ではないのか、あらわれ
てはないのかと考えられますし、そのあたりについてさら
にご見解をお聞かせいただければと存じます。

変わりゆく世界と日本研究の特質

Keene たしかに戦後のアメリカ人は——欧米人たち
一般入れますけれども——初めて日本を発見したとい
っていいのです。もっと前に、50年ほど前から日本文
学の翻訳はあった。『源氏物語』のたいへんすぐれた翻
訳も出たし、謡曲の翻訳もあったし、いろいろありまし
たけれども、ごくわずかの人がそれを読んでいたのです。
多くの方は、やっぱり文明はヨーロッパにあるという
ような確信を持っていたのです。そしてそれはまだ尾を引
いているわけで、自分でいうことは悪いですが、ヨー
ロッパ人にむしろ多いんです。ヨーロッパでは文学
という話をするとまず日本のことに触れないのです。そ

ういうことで、『世界の文学』という本がありましたら、日本のことが出ても1ページか2ページあたりのものです。それと世界の歴史の場合でも日本のことはまず出てこないです。しかし、太平洋戦争、朝鮮戦争、ベトナム戦争、その3つの非常に悲しむべき事件で、アメリカ人の大部分が日本のことを意識するようになりました。日本の土を踏んだアメリカ人は、戦前と比べると何万倍、何十万倍も多くなったでしょう。

もちろんそういう外国人に、ただ日本で2、3週間ずつしておみやげを買って帰るといふ人がいるのですけれども、しかしその中にも、日本のことに相当の関心を持ちだして、日本のことを勉強したり、日本人の経験を世界人の経験の一部分であると認識するような人はかなり多くなったと思うのです。アメリカ人がアメリカからヨーロッパを見る場合は、ヨーロッパは疲れたとか、ヨーロッパ文明は古くなったというような感じもかなりあるのです。特に若い人たちの間に、ということで、学生で外国語をやる必要何にもないとか、そういうことを言い出すような学生がいるんです。私はそういう意見に大いに反対しています。ところがその意見が生まれたことは変わったことだと思います。

戦前に外国語を覚える必要ないというような学生は一人もいなかったと思うのです。そのかわり、どうしても外国語をやると思ったなら、もっと発見のできるような文化を勉強したらいいと思うらしいです。また一番悪い例からいいますと、たとえばColumbia大学で、大学院の学生になって英文学の研究をすることになりましたら、もうほとんどの研究が別の人にやられたということになるわけです。そうすると、何か非常に変わった研究をしなれば、博士論文を書けないのです。たとえば、中世のスペインにおけるChaucerの研究とか、まあそういう研究をやりましたら、あるいは何か新しい発見できるかもしれないですけども、どう考えてもささいなものにちがいないです。そのかわり日本の研究をやりましたら、西洋の歴史ではだれひとり研究したことのない、相当重大な研究ができるということがわかったのです。私もそういうような経験あったのです。日本語を勉強するような外国人の学生に共通の経験でしょうが、一生懸命やっても絶望することもあります。何年やってもだめじゃないかと、いくら日本語勉強しても全然ためにならないのではないかと、非常に不安を感じて、やめてもいいのではないかと思ったこともたびたびあるのです。

ある日私はColumbia大学の図書室におりましたけれども、一種の自虐症といいますか、Masochismの現象として、手当たり次第本棚から1冊の本をおろして、こ

れ読めないだろうと思って自分をいじめていたのです。いくら日本語を勉強しても、これ読めないだろうと思ってその一冊をとったのです。あけてみると読めたんです。びっくりしました。やはり読めるものがあるということがわかったんです。そして、その本はずいぶん変わった本でした。平田篤胤全集の1冊だったのです。そして私、おそらく西洋の歴史では、平田篤胤全集の第7巻を読んだことのある西洋人は一人もいないだろうと思って、とてもすばらしい優越感を持ったのです。(笑)そういうほほえましいようなことは、外国人の日本研究者にあることはあるんです。そしてほかの文学の場合は、なかなかそういう楽しみがないのです。場合によって全然知られていないものを知っても、大したこともないということもあるのです。しかし日本文学の場合はいくら長くやっても、いくら時間をかけて古代から現代まで読もうとしても、全部を読めないということがわかっているんです。ということで、自分の一生を支えるような勉強であるというような実感もしています。それは私の体験ですけれども、きっと、私の学生たちの間でも、似たような経験もあると思うのです。

國弘 ありがとうございます。いま平田篤胤という古い人の名前が出ました。先生たしか「平田篤胤と洋学」という論文を書いておられたと記憶いたしますし、平田篤胤だけではなくて『日本人の西洋発見』(中央公論社)の中に、本多利明とか司馬江漢とか、普通の日本の大学生にとってはちょっと耳なれない固有名詞を出しておられる。これをお書きになったころはたいへんにお若かったはずですけども、イギリスで研究をやられた『日本人の西洋発見』というのはほんとうに名著中の名著だと思いますが、いま平田篤胤という名前が出ましたので関連して申し上げておきます。とにかく、いまのアメリカの若い人たちの間に、日本人の経験もまた人類全体の経験の重要な一部なんだという認識が生まれている、こういうご発言がありました。それを私たいへんにうれしいことに思います。

そこで先生にもう一つうかがいたいのは、これは非常にささいな問題かもしれませんが、先生がアメリカの学生に日本語をお教える際、特に日本語のごく初歩のレベルの勉強をする人たちに、日本語さえ勉強すれば、世界のほとんどありとあらゆる文学作品、ないしは主要な書きものに接触することができるよと、なんとすれば日本人というのは知的にどん欲で、世界のありとあらゆるものを日本語に翻訳して、それを取り入れようとしている、だから日本語を物にすれば世界のすべてに触れることができるから、こういうようなおっしゃり方をなさ

ると聞いていますが、ほんとうですか。

Keene 特に、東洋の研究でしたらどうしても日本語を知らなければならぬし、私の大学で中国のことを勉強しようと思っている学生は、みんな義務的に日本語を覚えなければならない。というのは中国文学を勉強しようと思ったら、どうしても、たとえば吉川幸次郎先生のご本とかを参考にしなければならない、日本の学者の仕事を見捨てることはできないのです。そして朝鮮のことを勉強する学生の場合はいくらでもないことですが、どうしても日本語を覚えなければならない。現在学生の中で日本語ばかりやるとか、そういう人もいますけれども、中国語、朝鮮語をやって日本語をやらないという学生は一人もいない、みんな一応日本語を覚えています。西洋文学の場合は日本語をやっても、私はいいと思います。いま國弘さんがおっしゃったとおりですが、翻訳からいっても、日本人がわずか100年ほど前から翻訳をいたしましたけれども、もう翻訳の数からいうとヨーロッパ文学の英訳よりも多いのではないかと思うのです。奇跡的なことです。そして自然科学の場合でも、いろいろな学問の場合でも、日本語知らないと不便を感じることがあります。ということで自然科学者でも日本語を勉強する人がかなり多くなったのです。

日本語学習の困難点

Keene もちろんのことですけれども西洋人にとっては日本語の勉強きわめてむずかしいのです。それは漢字とかなの問題だけではなくて、ものの考え方といましようか、ものの表現の方法は西洋のものとはずいぶんちがうのです。そしていくら勉強しても、いくら日本語を読んでも、なかなか日本語を書けないという人が多いのです。要するに自然な日本語を書くことは外国人にとっては非常にむずかしい。ちょっと頭のいいアメリカ人だったら、フランス語を覚えようと思ったら2年間で相当覚えられます。読めない文献はまずないと思います。ともかく3、4年フランス語を勉強したら、何でも読めるという人は非常に多いのですが、しかし日本語の場合は3年間やっても4年間やっても、まだ読めない本がかなり残っているのです。そしてたいへん失礼な言い方ですけれども、日本の大学の国文学の先生にも読めないような本があるのではないかと思うのです。自分の専門外の本だったらなかなか読めない、平安朝の文学の専門家なら、西鶴はともかく、あまり知られていないような小説家の作品読めるかどうか、近松のあまり知られていない「時代もの」を読めるかどうか、非常な疑問になるの

です。私はもちろん国文学者の悪口言おうと思っていない。私は日本語のむずかしさの話をしています。

もう一つは、中国語をやる場合は写本を見ることはまずないのです。中国語で書かれたものは全部活字になっているといってもいいと思います。しかし日本の場合には写本もあるし、活字本になっていても近世文学の場合には木版本が多いのです。木版本に変体仮名というやっかいなものがあるのです。学生はいくら自信を持っていても、変体仮名にあうととても弱るんです。そして一所懸命に変体仮名を覚えていても、1年それを使わないと忘れてしまうんです。そういうようなたいへんややこしい問題が、日本語の勉強にからまっているのですが、それでも学生たちががんばって日本語をやりたがるのは、やはり日本研究にほんとうに値打ちがあると思っているからだだと思います。

國弘 Keene先生のようにわれわれ以上に日本語を究められた方がなお、日本語というのにはほんとうにむずかしいんだと音を立てておられるのに、私どもはむしろ先生の謙虚さのようなものを覚えて、たいへん好ましい感じを持つわけですが、先生は日本語をきわめておられるだけではなくて、先ほど申し上げたように、フランス語でアフリカで講演をなさったということとか、日本とオランダとの文化的な交流を調べるためにちょっとオランダに飛んで、オランダ語をそうめんを飲み込むようにスルスルと身につけられたとか、そういう Keene先生なんです。ことばの問題について2つほどいかがなっておりますか。

一つは、私の印象では最近のアメリカの若者は昔ほどことばに対する信頼感をもっていないのではないかと。特にベトナム戦争にしても、ウォーターゲートにしても、権力の側からする言語の悪用、乱用、操作、そういうことも影響していると思うのですが、どうも言語あるいは言語的なコミュニケーションに対して、伝統的な欧米人ほど強い信頼を持っていないという感じがするのです。そのあたりについていかがなんでしょうか。

いま一つは、きょうここに集まっておられる方々の多くは、英語の勉強に精を出しておられる方々だと思いますので、たくさん外国語に通じておられるお一人として、英語の勉強についてのご意見なり、suggestionなりをちょうだいできればと思います。

Keene たしかにおっしゃるとおりですが、学生たちが——私もそうですが——ことばにだまされたという実感は強いです。つまり、アメリカの大統領がうそをついたということがわかったときに、非常に打撃を受けたのです。常識的に考えますと打撃を受けるはずはなかったの

です。要するに大統領は人間であるし、人間はみんな、多かれ少なかれうそついているんです。そういう常識ですけれども、やはりウォーターゲート事件などの場合はあまりにもひどすぎまして、学生たちも私も非常に信頼感をなくした。アメリカの理想とか、そういうことばを口にする人たちを信用しないほうがいい、むしろ黙って自分の仕事をやっているような人を信用したほうがいい、それともアメリカのことを批判しながら、アメリカのことを愛しているというような人のほうが、より信用できると思うようになりました。口でアメリカのすばらしい伝統などという人たちは、あまり信用できなくなったことは事実です。そしてそういう人たちが使った言葉、一番好きなことば使いは、私たちいま非常にあと味が悪いです。もうああいうことばにだまされたくないというような気が非常に強くなりました。

英語学習者へのアドバイス

Keene もう一つのご質問の英語の勉強について、私は辛い英語のことをそれほど苦勞しないで覚えたのですが、(笑)私は、一番やりたくない仕事と聞かれたらやはり英語の先生です。日本人の友だちに、ここはどういうふうに説明するかと聞かれる場合は、いつものことですが、閉口します。「そういうふうになっています」としか答えられない。合理的な説明なかなかできないのです。というのは英語もたいへんむずかしいことばです。しかしいまの話は学問的な英語の話です。

アメリカへ移民するような人たちの多くは、そういうふうに英語を覚えるわけにいかないんです。要するに、同じ職場でアメリカ人とつき合って英語を覚える人が圧倒的に多いです。そしてその人たちが覚える英語は、決してきれいな英語じゃないんです。文法的にいうと誤りだらけです。しかしけっこう通ずるんです。そしてこれはまたいけない話ですが、場合によって日本の大学の英文学の教授よりも、ヨーロッパ人の労働者の英語が通ずることがあるんです。なぜなら、やはり日本人の多くは英語を使うときでも、完ぺきな英語でなければ満足できない。そして初めからむずかしい話をしたがるんです。しかし初めからむずかしい話をしようと思ったら、あるいは相手が、アメリカ人が頭が悪くてわからないこともあり得るんです。それは日本人の英語がへただという意味ではなくて、ただアメリカ人はそんなむずかしい話理解できない、ということも考えられるんです。その場合、日本人はそれに気がつかないで自信をなくして声を小さくするんです。そうするとますます相手がわからな

くなるんです。もし一つだけ言うことがありましたら、やはり大きな声で話すことが大切だと思うのです。

つまり自信なく、不安な声で小さくものをいうと、相手は耳が遠くなくてもなかなか聞き取れないんです。もっと自信を持ってしゃべったほうが一番いいと思うのです。私はときどき、日本の英語をやっている学生たちのためにできた本を見るのですけれども、たとえば should と would との区別について、そういう本がある。しかし英米人で正しく would と should の区別できる人は1万人に1人ぐらいでしょう。(笑)そして1万人に1人に負けないために、日本人が非常に苦勞して、いろいろむずかしい規則を覚えることは全く時間の浪費だと思うのです。それよりも、もっと楽しい会話のことばを、たくさん覚えたほうがいいんです。私の大学で日本語を教える場合は、最初の半年ぐらいは会話ばかりです。教科書使わないんです。それは日本人がやっておりますけれども、その半年で会話を覚えたら、初めて日本のかなを覚えるようになりまして、しまいには漢字も覚えます。それは必ずしも一番いい方法ではないと認めますけれども、やはりほんとうにある国を知ろうと思ったら、その国の人と接触しなければならぬんです。接触する場合は、どうしてもその国の人のことばも話さなければならぬんです。いくら読めても話せない場合は、非常に大切なことを最後まで知らないようになると思うのです。それを私は何か英語を勉強している学生さんたちにいうことがありましたら、やはり会話に力を入れて、なるべく外国人とつき合って、そしてつき合うとき大きな声で話すということです。

國弘 ありがとうございます。いま皆さんがおそらく大きな関心を持っておられるであろう英語の勉強について、ご自身は専門家ではないというふうにおっしゃいましたけれども、英語を母国語とするすぐれた知識人ということでご意見をうかがったわけで、先生のアドバイスをひとつ皆さんも拳々服膺していただければと思います。

そこでまた問題をちょっと前に戻しまして、Keene先生にうかがいたいのは、ベトナムというようなことがありまして、世界の警察官という意識を捨てたこと、そして時計の針を無理天理に元へ戻そうという意識からかなり自由になった、これはアメリカにとって非常によかったと思うのです。ただ他方、日本人の中には、アメリカがいろいろな意味で世界のこと、国際社会のことなどは知ったことではないんだという意味での文化・思想を含めての孤立主義にまたぞろ戻っていくのではないかと、こういう懸念をもちます向きもあるわけです。

お聞きしたいのは、アメリカのいまの若者が、果たしてそういう孤立主義に戻っていかうとするのか、それとも世界の警察官という悪しき国際主義ではなく啓蒙され、開明され、地球の問題を自分の問題として考え、国際社会の問題をわが事として受けとめるというような、そういう好ましい形での globalism に向かおうとしているのか、そのあたり最後にひとつ結論としてお出しただければと思います。

若い世代への期待

Keene 私が大学生のころはアメリカ人に孤立主義者非常に多かったです。実を申しますと私の父はその一人で、ヨーロッパの戦争は、ヨーロッパ人にまかせようというふうなことをよく言っておりました。私はある程度まで父の影響を受けたにちがいないんです。そして私はその孤立主義というものは、悪い面ばかりではないと思うのです。まず外国の国内問題に干渉しないということはいえます。しかしやはり私はアメリカ人としての外国文学・日本文学やっているものとして、どうしてもアメリカ人にそういう古い孤立主義に戻っていただきたくないんです。もしそういうことがありましたら、たいへんな悲劇だと思うのです。しかし私はそういうような心配は別にないんです。

一つは、特に若い人たちの間に、いままでとちがって非常に共通の面が多くなったのではないかと思うのです。私の好きな音楽は、20歳前後の若者たちとちがう音楽なんですけれども、しかしその20歳前後の若者たちの好きな音楽は、世界共通だといっていると思うのです。つまり東ヨーロッパへ行っても同じ音楽喜んでるし、同じような服装したりして、アメリカ人や日本人などに似ている面は非常に多くなったのです。昔はそうじゃなかったです。ということで、だんだん国家というような存在に、もうがまんができなくなったような若者が多くなったのではないかと思うのです。国家のために死ぬという昔からの理想があったのです。私は戦争に反対してますから、そういうような理想をあまり感じないのですが、しかしいまの私の知っている若い人たちの多くは、国家のため死ぬというふうな考え方はあまりないのです。むしろ何かのことで、敵の国といわれている国の若者たちと握手したりして、なるべく仲よくしたいというような希望が非常に強いと思います。私が観察した限り、アメリカの若い人たちはもう孤立主義に戻らないし、むしろ私の時代の若者よりも外国に関心があって、外国人と友だちとしてつき合いたがるのではないかと思うのです。

日本人の場合でもそうです。

つまり私の年齢または私より年上の日本人は、いつまでも私のことを外人だと思っているのです。そしてたとえば、昔からよくつき合っていた家族のおじょうさんに子供ができて私に言わないんです。外国人に言わなくてもいいというふうな考えはあることはあるんです。いうまでもなく、私の親しい友だちの話ではないのですが、そういう人はかなりいるのです。もっと若い人たちに私そう感じません。やはり私のいうことはだめだと思っている人がいるし、賛成する人も少しいるのです。しかし外人であるからとか、われわれとちがうというようなことはあまり聞かないんです。私の親しい友だちの一人のおじょうちゃん、5つになった子供は、私にとって非常にいいことを言いました。いつも私と遊んでいるし、もちろんのこと日本語でしゃべっているんですけども、そのおじょうちゃんが言ったのは、「Keene さんは目だけ英語です」。(笑)

國弘 どうもありがとうございました。そのおじょうちゃんの、Keeneさんは目だけが英語だという、これはもうたいへんにすばらしい詩のようなことばだと思えますけれども、そういうことで先生結論を出して下すった。人間という原点を大事にし合うもの同士にとっては、一人の人間と、国籍や文化を異にする他の人間との間に、万里の長城などはあり得ないのだと、こういうことだろうと思います。さまざまな問題について率直におっしゃって下すったことに感謝いたしますし、こんなこと申しあげるとたいへんに失礼ですけれども、先生の日本語の的確にしてかつ明快なのに、改めて感銘を受けたことを申し上げたいと思います。

それではお約束のとおり質疑応答の時間をとっておりますから、どうぞ Keene 先生に、せっかくの機会でありませう、遠慮ないご質問をお出しただければと思います。

質問 まず第1点目は、Keene 先生が最初に東洋の一国である日本という国を選び、また日本の文学に興味を持たれた最初のきっかけをおうかがいしたいと思います。第2点目は、私ども日本人が外国の文化を学ぶとき一番大切なものは、その国の民族と同じように考え、同じよう行動しないと、彼らの蓄積した文化なり文学なりというものは理解できない、あるいは文学作品読んでもその感銘がないと思うわけです。その2点質問したいのですけれども。

日本研究の動機

Keene 初めて日本の文化に興味を持ち出しましたの

は、いつのころかはっきり覚えてないのです。覚えていたのは、私は大学2年生のころでしたが、源氏物語の英訳を特価で売っている本屋を見つけまして、そして特別に源氏物語に興味がなかったのですが、あんな安い値段で、あんなにたくさんのページのある本買えると得だと思いました。(笑)そして私は英訳を読んで夢中になりました、とてもすばらしい本だと思ったのです。そこからほかの翻訳された文学の作品を読むようになりました。ほかに美術などは、たぶん一番最初に私の視野の中に入ったのは浮世絵だったでしょう。大抵の外国人はそうでしょう。広重とか北斎とか、そのあたりの浮世絵を知るようになりまして、だんだんもっと古い浮世絵、師宣とかあの時代のもので、おしまいにもっと古い日本の美術とか、そういうものに関心を持つようになりました。日本文化全般に興味を持ち出したのは、どっちかというと私が初めて日本語を勉強するようになってからでした。私が最初に勉強するようになりしたのは、全く偶然でした。私はあのころ大学3年生でしたが、大学の近くに中華料理屋があったのです。あそこは一番安くおいしかったのです。そして私は毎日毎日昼ご飯そこで食べる習慣がありました。ある日私の知らない人がやってきて、あなたは毎日ここで食べているんですねといいました。私がそうですと答えると、その人は2年ほど台湾で英語を教えたことのある人で、日本のことにも詳しくて、友だちになった上でいろいろその人から日本のことを聞いて、日本の文学・文化などに相当深い関心を持つようになりまして。そして戦時中海軍の日本語学校に入ってますます日本語知りたくなったのです。

異文化理解への視点

Keene もう一つのご質問ですが、たしかにその国の人と同じように、その国の文化を味わう必要はあるでしょうと私は思いますけれども、しかし私は現在日本文学通史を書いております。非常に長い間の文学、つまり古事記から1968年、つまり明治100年までずっと書くつもりですが、どの時代の文学についても、私より詳しい日本人は何人もいるだろうと思うのです。たとえば明治初期の政治小説のことについて書きましたけれども、そればかりやっている日本人がいるわけです。そうすると私はどんなに丁寧に書こうと思っても、きっとその人は待機していて、私の本が出ますとすぐ攻撃を発表するにちがない。(笑)しかしそのかわり私は日本人じゃないから、あるいは日本人がまだ気がつかないようなことも書くかもしれません。そして日本人の場合でも、外国文

化を勉強する場合は、なるべくその国の人と同じように理解しようと思ったほうが良いと思いますけれども、それと同時に日本人であることを利用したほうが良いです。つまり自分はその国の人とちがう面もあるということで、あるいはその国の人たちよりも、文学に隠れているような要素がわかるかもしれないのです。日本人の独特なセンスで、外国文学を読む場合は発見することもできます。これは美術ですが、一応美術書を買う場合はどんな美術でもそうですけれども、大きな油絵の複製があって、そして一部分を拡張して発表することがありますが、初めてその部分だけを写真にしたり発表したのは日本人でした。それは矢代幸雄先生で、Botticelli についての本でした。日本人が Botticelli についてものを書くことは、歴史以来初めてのことだったでしょう。しかも彼はそのときまで、だれ一人イタリア人が気がつかなかったことをよく知っていて、Botticelli の絵のよさをほんとうに知ろうと思ったら、やはり部分を丁寧に見なければならぬということがわかったのです。そしてそれはきっと日本の伝統と関係があるのではないかと思うのです。ということで、なるべくその国の人たちと同じように、その国の芸術を鑑賞したほうが良いように思いますけれども、日本人であることを生かすべきだと私は思います。

翻訳のむずかしさ

質問 Donald Keene 先生も國弘先生も翻訳書を出されていると思うのですが、翻訳を先生方がされるときに、どういうところで苦勞されるか、そういう苦勞話があれば述べてもらいたいのですが。

Keene 翻訳の苦勞の話でしたら、私は1週間しゃべってもまだ残るだろうと思います。(笑)まず日本語の場合は、ご存じでしょうけれども、主語がない場合がかなり多いのです。その場合は、果たしてこの文句の主語はだれであるかとか、単純なことがわからない場合があります。

いろいろ考えてから敬語の程度とか、そういうものをしんしゃくして、やっぱりこの場合は義経がしゃべっているようですねとか、ここは静御前じゃないかとか、そういうふうに思われることがあるのです。特に古典文学の場合大きな問題になります。だれが何を言っているかという根本的な問題が非常にあいまいです。たとえば「心中天の網島」の一番最後のところですけども、心中の場面、小春と治兵衛がそこで死のうと思って、そして一人が早くしろというのです。もう一人はあわてる

なというのです。だれが話しているかどこにも書いてありません。早くしろというのはたぶん小春、早く私を殺して下さい。しかし日本語の現代語訳があるのですけれども、それは全部小春の発言として解釈されております。初めのほうは小春で、あとのほうは治兵衛とかそういうようなものもありますけれども。ヨーロッパの戯曲の場合は、はっきりとだれが話しているということがわかっています。そしてそれは一つの大きい問題です。古典文学は特にそうですが、しかしたとえば現代文学の場合でも苦勞するところは非常に多いのです。

たとえば私は三島(由紀夫)さんの『宴のあと』の翻訳やったところでしたが、その小説の中に3回もたいへんぜいたくな料理屋の献立が出ています。献立見てもわからないのです。要するに鮪の刺身と書いてありません、何かしゃれた名前が書いてあるのです。そして私は三島さんに電話かけて、どういう意味ですかと聞いたのです。三島さんは自分もわからないという。(笑)要するにどこか東京の一流の料理屋に頼んで、最高級のごちそうのメニュー1つ送ってくれと、そしてまた同じ小説の中に着物の柄の話があったのです。そしてまた三島さんのお宅まで行っているいろいろ聞いたのですが、三島さんまた笑って、ちょっと母を呼びますといったのです。そして三島さんのお母さんが来て説明しました。同じ本ですけれども、主人公が旅行に出かけるときに、奈良に行くのですけれども、旅によい帯選んだと、旅にいい帯はどんな帯かということわからない。あるいは簡単なよごれない帯かもしれない。それともかさばらないものとかいろいろ考えたのですけれども、意味は全然ちがってました。意味は、一人で締められる帯です。要するに、普通自分のうちにいたら、女中さんが手伝ってくれるのですけれども、旅のときに一人になるから一人で結ぶようなものでなければだめだと、そういうところはやはり普通の翻訳者にちょっとわからない。

最後の例はもっと簡単ですけれども、私は現在安部公房さんの『幽霊はここにいる』という戯曲の翻訳やっておりますけれども、戯曲の中によく“幽霊さん”ということばが出ます。その“さん”の翻訳ほんとうに困るのです。(笑)もし翻訳の機械に入れたら Mr. というふうになってしまうでしょうけれども、英語で Mr. Ghost という呼び方あまり聞かないし、どういうふうに翻訳したらいいか、現在私はまだ何も名案が浮かんでこないから何か名案がありましたらぜひ聞かせて下さい。

読むことの重要性

國弘 翻訳のむずかしさということについて、私も英語から日本語への翻訳は、特に社会科学のものです、10冊ほど手がけました。日本語から英語というのも、Keene 先生がおられるのにたいへん恥ずかしいのですけれども1冊だけやりました。これは貝原益軒の『養生訓』というとてもないものを一応横にしたので、とても恥ずかしくて先生にご批判いただくようなできばえではないのです。けれども、翻訳は手がけてきた。何が一番むずかしいか、私がみるところ、辞書的にイコールであってもそれが社会的、文化的、背景的に必ずしもイコールとはいえないという点がたとえば日本語と英語との間にずいぶんあると思うのです。社会的、文化的ないしは背景の面において等価値のものをどのようにさがしていくかということ、そこに私個人としては一番むずかしさを感じてきたということをお願いしたいと思います。いずれにしても、それからさっきのどうやって英語を勉強するかというお話にも関連すると思いますが、きょう Keene 先生の日本語を皆さんお聞きになっておられて、その的確さというか、表現力にびっくりなさったと思うのです。先生にとっては外国語でしかない日本語で、あんなにまで見事に、ご自分のお考えを過不足なく即席でお述べになれる、日本語の勉強がどれだけたいへんであったかということが、私なんかにも想像できるわけですけれども、おそらく先生の日本語があそこまでの確であることの一つの大きな理由は、先生が日本語でたくさんものを読まれたことに起因すると思うのです。英語をやっている皆さんに申し上げたいのは、英語でたくさん読まないで英語は本物にならないということです。ものを読まないでその国のことばに上達することなどあり得ないということを特に強く申し上げておきたいのです。いずれにせよ非常に率直なご意見お漏らしいただいたことに聴衆とともにお礼を申し上げ、拍手をもって先生のご苦勞に感謝したいと思います。ありがとうございました。(拍手) (速記：上山采子)

(1950年11月2日大阪関電ホールにおいて行なわれた対談の速記から)

☆ ☆ ☆ ☆

国際コミュニケーションと日本人の意識構造



SOFUE TAKAO

祖父江 孝 男

欧米人に対する都市型対農村型反応

私の専攻している文化人類学という学問の分野では、日本の社会や文化、特に日本の農村について研究している学者がアメリカやヨーロッパから訪ねてくることが多い。私など、そういった人たちをよくあちらこちらへ案内して連れていくことがあるのだが、こうした欧米からの訪問客に対する日本人の反応のしかたというものを観察しているといろいろ考えさせられることがある。

まず東京など都市のインテリで、英語は大体読めるけれども、しゃべれないといったまあ普通の平均的タイプの人たちの反応は大がいに決まっています、欧米人の前に出れば顔の筋肉がたちまち緊張し、それと同時にアイン笑いが伴ってペコペコ頭を下げながらギゴチなく握手をする。そしてもし、この外国人がかりに日本語をうまくしゃべったりすると（日本の研究にくる外国人は大抵、日本語が相当にうまいのだが）、すっかりびっくりしておおぎょうに感心してみせ、それからあとはどうやら急にリラックスした感じとなる。因みに作家の野坂昭如は、かつて『朝日新聞』の「私のなかの日本人」というシリーズに次のように書いていたのだが、これなど平均的日本人インテリの心のなかを実に正直に告白しているものではあるまいか？

「彼ら（アメリカ人）の巨大な体格、血色のいい肌、言葉にふれると、心がざわつき、情緒不安定な状態になる。むやみにおごってみたり、いやしくへつらいの笑いを浮かべ、かと思えばたかぶり、その鼻面ひきまわしたくなり、ピヤホールのテーブルに相席となっただけで、たちまち平常心を失う…」『朝日新聞』1969.3.13)

ところが…である。同じ外国人を農村へ案内してみると、そこでの反応は全然違う。農村のひとは外国人をみてもなんら特別の反応を示さない。へーえ、ずいぶん大きくて鼻が高い人だね。さあさあ、入んなせえとまことに気楽な応待だ。そしてたといその外国人が日本語をしゃべろうとも、およそ人間なら日本語をしゃべるのは当然だとでも思っているらしく、彼らは少しも驚ろかない。

特に都会のインテリなら外国人がくれば自分の家のトイレの汚なさを恥じ、食物を出すにも、こんなもので口に合うかしらと気にしてオズオズするのだが、農村では自分らのトイレが汚ないとも思っていないらしいから平気だし、また何のためらいも持たずにモチでもなんでも出してすすめることになる。なお同じく東京あたりの人といってもどちらかといえば非インテリ階層に属する商店街や下町のオカミさんなどとなると農村と全く同じ反応で、全く屈託のないつきあいだ。

日本に似たエスキモーの反応 2 型

こうした2つの反応様式をみるとすぐ思い出すのはアラスカ北極圏のツンドラ地帯に住むエスキモーの場合なのだ。彼らは極めて開放的で外からやってきたわれわれ人類学者に対してはニコニコと微笑をうかべながら何でも話し、何のためらいもなく、むしろ誇らしげに自分の小屋のなかも見せてくれ、自分らの食物をすすめてくれる。そのパターンはまさに日本の農村の場合と同じように思われる。

ところが同じエスキモーでもアラスカ奥地のツンドラ地帯から離れて、はるばる南へ下り都市に出て工場労働者その他として白人にまざって暮している者の反応となるとまったく違って来る。彼らはわれわれの如く、彼らの伝統文化や生活のことを調査に来た者に対しては極度に警戒的だ。表情は緊張してニコリともしない。つまり日本の都市インテリ型と酷似しているのである。

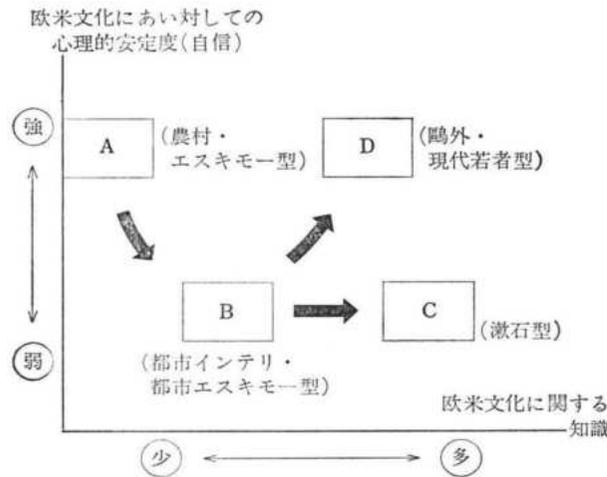
こうして比べてみると、おのずから、事情がはっきりしてくるように思う。日本の農村の場合はエスキモーと同じで、他文化についてはあまり知らないから、世界のすべての民族の生活は自分らと同じようであり、自分たちの慣習はそのまま相手にも通用するという甚だナイーブな状況にあるわけだ。日本の農村から外国へ大挙して旅行に出た人たちの団体がすなわち“ノーキョー”であり、ヨーロッパのレストランで「ネエチャン、早くしてくれ」とウエイトレスにどなったり、ホテルのロビーで車座になってのめやうたえの大きさわがしをしたりしている

が、これも日本での慣習やことばがそのまま外国でも通ずるものと素朴に考えているからに他ならない。

ところが同じ人間が自分たちの文化と欧米文明との格差の存在をさとることになると、今度はたちまち劣等感にさいなまれ、文字通り尻ごみするようになってしまう。都市に出たエスキモーの場合は正にこれだが、日本の農村の人が海外旅行に行ったときは、いちおう欧米文明に接してはいるのだが、この場合は団体の一員として接しているのだから彼我の慣習と考え方の違いに気づくまでには到らない。しかし都会のインテリともなれば知識としての欧米文明は理くつをぬきにして威圧感を以て迫り、英会話が出来なければ、それすなわち劣等感となり、すっかり尻ごみするのである。

日本人における4つのタイプ：AからDまで

さて以上述べてきたところを図示すれば別掲の通りであって、日本の農村とエスキモーは「欧米文化に対する知識」も少なく、そのためにこそ「心理的安定度」（すなわち自信）は大へん強い（図のA型）。しかし「知識」のほうになまじらかな形で入ってくると、心理的安定性はくずれ自信は失なわれて劣等感が強くなる。（図のB型）



以上の2型は日本人の大多数を占める、いわば一般の人びとのパターンなのだがこういったB型の人びとが海外に長く生活するなどして他文化をジックリよく知るに到ったときは2つの型に分れるようだ。ひとつは欧米文明を知れば知るほど彼我の差を意識して劣等感のますます強くなる場合（図のC型）で、これは外国に留学した人のなかでも文科系の人にとどうも見られるように思う。明治時代に英国へ留学してノイローゼにかかった夏目漱石などはこの典型ではないかと思うので別表にもその名

をつけて書いたのだが、漱石のごとく英文学とかあるいは西洋史など、当然と言えば当然のことながら欧米のほうで研究のずっと進んでいる分野の人に多いように思われる。

これに対して同じく欧米に留学しても劣等感を抱かずにとんどんよく適応していくタイプがすなわち図のD型だ。このグループの多くを占めるのはむしろ理科系の人たちで、彼らは文化的背景の違いによるハンディがないものだからこうした結果になるわけだ。同じく明治時代にドイツへ留学した森鷗外のほうは漱石とは対照的にこのタイプだった。そして最近では日本の数学者、物理学者のなかには劣等感どころか、むしろ欧米を凌駕する優位の位置に立つ者も多く出て、頭脳流出も続くわけである。とにかくこうしたD型が最も望ましい健全な形だと思ふ。

若者の間にふえていく新しいタイプ

しかしこういったD型は殊に70年代に入ってからますます増えていきつつある。若者たちの間でこのD型の者が極めて多くなってきたからだ。ご承知の如く夏ともなれば、ジープにリュック姿の若者の姿は日本国中いたるところに見られるのだが、日本の中だけのことではなく、世界各国到るところの現象で、いろいろな肌の色の若者（主に学生だが）は同じようなジープ姿で歩いている。このなかに日本の青年たちも大ぜいまざっているわけなのだが、アメリカからカナダにかけて歩きまわっていたN君はこう述べている。

「ぼくたちはバスのなかでも道路でも、同じような旅の若者どうしとみれば、外国人だろうと日本人だろうと、すぐ互いにニコリ挨拶し、情報を交換して助け合ふんです。相手が日本人とか外国人というよりは、同じ若者だという意識で、その目印になるのがジープとザックなんです。だけど中年以上の日本人は外国で挨拶しなくても全然だめですねえ。プスとしていて、プイと横を向いてしまうんです」

これで見ると、彼ら若者にとっては、日本人であるとか欧米人であるとかということより、なによりもまず共通の若者だという意識のほうが強いらしい。まさに新しい「若者文化」のひろがりというもの存在に感じ入ってしまうのだ。

私の教えていた学生の一人は1年近くもアラブの地において回教徒となって帰ってきたし、最近卒業した一人は現在インドにいる。他の一人はアフリカにしばらくいてからドイツで長くアルバイトをして暮していたが、アメリカを経て現在はメキシコで海外生活5年目を迎えてい

る。そしていま一人はアメリカで大学院に在学中だが、最近、白人女性と結婚した。明らかに70年代に入ってから、今迄にない新しい型の意識をもった日本人が生まれつつあるといつてよいだろう。

もちろん彼らの行動を将来計画欠除型とか利那主義型とかいろいろ非難する声もあり、そうした眼でみることができのかもしれない。しかし欧米人に対する接しかたというところから言つて、過去の日本人にはない新しいタイプとして賞賛することができると思う。少なくとも現在の中年以上の日本人にはおいそれと真似のできな型に違いない。

非ガイジンの外国人に対する意識

ところで今までのところ、ずっと「欧米文化」に対する心理的安定度について述べてきたのだが、欧米文化以外の外国文化に対する日本人の意識のもちかたはどうかという点と、それに加えて同じ欧米文化を担っているものであつても、白人と黒人に対する意識の相違点はどうかについて考えてみる必要がある。ここで思い出して頂きたいのは「ガイジン」と4字のカタカナで書いたことばの存在だ。これと「外国人」ということばの相違については、どちらのことばも日本人自身はなれこになつてしまつているため案外気づいていないのだが、よくよく分析してみれば「外国人」は *foreigner* で、日本人以外の人びとすべてをさすのに対し、「ガイジン」のほうは欧米人だけをさすようだ。しかもこのことばの意味する範囲について東京の男女学生やOLなどを対象に調査した知人のなしでは、多くの人びとが「ガイジン」というときは普通、白人だけを頭にうかべるし、黒人はガイジンのなかには入らない」という答えをしているといふことだつた。

これは大へん面白い事実であつて、さっそく私の思い出すのは米国人の友人から聞いた次のような話である。アメリカ各地の大学から選ばれた20名ほどの学生を毎年数か月東京で過ごさせるプロジェクトが何年も前から続いていて、東京ではひとりひとり、普通の家庭へ下宿し、毎日いろいろの施設や機関を見学したり、引率してきた教授や日本人学者たちの日本に関する講義を聞きながら日本文化を学ぼうというプロジェクトだ。ところが毎年問題になるのがそのような下宿を提供してくれる家庭を探すことで、白人の場合はなんとかさまざまなボランティアを見つけられるからよいのだが、グループのなかには毎年必ず黒人が必ず1人ないし2人まぜるようになつてあるから、その黒人の下宿を探すのが大へんなことなのだそうである。

たまたま数年前の年には黒人の女子学生が1名まざつていたのだが、彼女の下宿を引き受けることになつたある家庭からは、彼女が住み始めてから数日後に事務局へ電話がかかつてきた。「アメリカ人だといふから白人だと思つて引き受けたのだ。それなのに黒人ではないか、なんといふことだ！」という抗議で結局彼女だけは失意のうちにホテルズまいといふことになつたのである。かくてアメリカの学生一同は、日本における人種偏見はアメリカよりもずっと強いことをまざまざと体験して帰国して行つたといふことだ。

こうしてみると、つまり日本では「ガイジン」に対する意識と「ガイジン以外の外国人」（あるいは「非ガイジンの外国人」）に対する意識とが、まるっきり違つていることに充分注意して考える必要があると思ふ。後者に属するのは今あげた黒人をはじめとして、韓国、東南アジア、その他開発途上国の人びとすべてであるらしい。そして私が先にあげた如く、日本の一般的インテリが劣等感と緊張感を抱いてしまうのはつまり「ガイジン」に対してなのであり、「非ガイジンの外国人」に対してはろくな知識もないのかかわらず、めっぽう強い優越感を抱いて相手を見下すのである。こうした相手の文化や生活についての知識をしないで持つようになった結果として相手を正しく評価し敬愛するようになる人といふのは極めて少数の例外ではあるまいか？この点についても今の若者のほうにむしる望みがもつてそんな気がする。

(国立民族学博物館教授・文化人類学専攻)

(p. 35 よりつづき)

まの形で現在も歌いつがれていることを知っている。私は前稿で「酷き母」や「ロード・ランダル」に関連して、こういう伝承バラッドがたとえばなわ跳び唄となつて現在も生きている例を挙げた。バラッドの多数が今なお伝承され、その生命力の豊かさを誇っていることを私たちは知っているのだから、このチャイルド79番についても、19世紀はじめのスコットの *Minstrelsy* による A version をその最終形態と決めこんで安心してゐるわけにいかないのである。その後どういふ形で伝承されていったのか。現代文化といふ文脈の中でどう生きているのか。こういう観点を抜きにして伝承文化を考えても、あまり意味がないように思われる。

(この項続く)

(東京大学教授)

辺境文化の意識

—日本とアメリカ—

KAMEI SHUNSUKE

亀井俊介



(1) 日本論の氾濫

この頃、日本における日本論の氾濫ぶりには目を見張られる。日本起源の考察や日本経済の高度成長（またはその急速な終焉）の分析の形をとったり、日本語論や比較文化論の形をとったりして、多岐にわたる内容ではあるが、とにかく日本人や日本文化の基本構造に迫ろうとするたぐいの著作が、ぞくぞくと現われている。

日本論の流行は、なにもいまに始まったことではない。徳川時代の儒者や国学者たちも、熱心に日本論を行っていた。それ以前にも、日本論の歴史はずっとさかのぼることができる。私に比較的なじみのある明治時代を例にとると、その20年代にも日本論は大層はやった。これには、西洋志向の文明開化運動が一応の成果を収めて反省期に入ったことが関係しているかもしれない。三宅雪嶺の『真善美日本人』と『偽悪醜日本人』（1891年）、志賀重昂の『日本風景論』（1894年）、内村鑑三の英文『日本および日本人』（1894年、後に改題して『代表的日本人』）などは、当時の日本論で今日も古典として残っているものの一部である。そしてそのどれにも、ナショナリズムの感情があふれている。

内村鑑三の名前が出たついでにいうと、明治時代の日本人の英文著作の代表的なものは、多くが日本論であった。内村の『余は如何にして基督信徒となりし乎』（1895年）も一種の日本精神論であるが、明治30年代に入ると、新渡戸稲造の『武士道——日本の魂』（1900年）や、岡倉天心の三部作『東洋の理想』（1902年）、『日本の覚醒』（1904年）、『茶の本』（1906年）なども出た。これらは、それまで文化的に受身に立たされてきた日本人が、西洋に対して積極的に日本文化の根源を説こうとしたものだといえるであろう。

日本論は、なにもナショナリズムによるものばかりではない。純粋な知的興味にひかれたものも多い。しかしともあれ、日本の日本たるゆえん、つまり、日本のナショナリティは、日本の知識人のあいだに、れんめんとして続いてきた関心事であった。そしてそういう関心

が、第二次大戦後30年たって、産業国家への日本の連二無二な努力が一つの転機にさしかかったいま、またもや日本論の流行という現象を生み出したのであろう。

時代の変わり目に自己をふり返り、自分の本質を考慮することは、程度の違いこそあれ、どの国の人も行なうことかもしれない。ところが、日本における日本論の流行には、その程度が度はずれているということのほかにも、もう一つ特異な現象がある。それは、外国人による日本論が、この国では大変な注目を集めていることである。まるで、自分で自分の特質を考えるだけでは不満、不安だといわんばかりに、外国人の日本論を氾濫させ、しかもそれを日本人の日本論以上に尊重する風潮さえあるのだ。徳川時代まで、外国人の中心をなしたのはシナ人であった。明治以後は、西洋人がその権威の座についてきている。

(2) 西洋人の日本論

たとえば、明治時代をふり返ってみるとき、日本人に重んじられて当然な西洋人の日本論は少なくない。バジル・ホール・チェンバレンの『日本事物誌』（初版、1890年）はそのよい例だろう。われわれが単なる「日本事典」と思いがちなこの本を、新田義之氏は外国人の日本論の最良の見本として、あざやかに論じている（『比較文学研究』16号所載「『日本事物誌』の邦訳を読みみて」参照）。

『神国日本』という題でも知られるラフカディオ・ハーンの『日本——一つの解明』（1904年）は、ハーンの記事としては最も固苦しいものの一つだが、それでも日本人の心の秘密をさまざまにさぐっている。日本の西洋化を促進する使命をにない、したがってハーンとは対立的立場にあったウィリアム・エリオット・グリフィスの『ミカド——日本の内なる力』（1915年）も、私自身が拙訳を試みたものなので偏愛があるとはしても、やはり示唆に富むと思う。またずっと後の出版になるが、ハーンと並び称されるヴェンセスラオ・デ・モラエスの『日本精神』（1926年）なども、民衆の生活を通して日本精神の本質に迫ろうとした本として価値がある。こういう

それぞれの意味で真剣な日本論を結集するような形で、やがて、第二次大戦直後に、ルース・ベネディクト著『菊と刀』(1946年)が現われた。これは日本人の思考習慣と行動習慣との「型」を文化人類学の方法で分析して興味深い本だが、ここに著者の独創を、あまり多く見るのは誤りであろう。これはむしろ、従来の研究の総合といった面が大きい本である。

われわれが、外国人によるこういう日本論の伝統を正しく評価し、開かれた心をもってそれに耳を傾けるべきことは、いうまでもない。しかし、私が「特異な現象」といったのは、それとほとんど無縁の、西洋人の日本論をまるで不見転に歓迎して尊ぶ態度である。たとえば、ハーマン・カーンの『超大国日本の挑戦』(1970年)や、それへの反論たるスピグナフ・ブレジンスキーの『ひよわな花日本』(1972年)といった、かなりキワモノ的な日本論がともに、アメリカと日本で同時出版されるという現象、しかもそれがともに日本でたちまち権威としてもてはやされる現象——これはやはり異常ではないだろうか。

それからまた、私は英語教師だからもっと身近なところに例をとれば、大学の英語教科書における英米人の日本論の氾濫ぶりなども、異常なものに思われる。もちろん、その中には本当によいものもある。しかし、日本に住んだ外人さんなら誰でも日本論が書けるとでもいわんばかりの、いい気な文章がぞくぞく教科書にされている。教科書だから、教師も学生も辞書をひきひき、内容をとにかく尊重しながら読むのだろうが、その情景を想像すると、一種さむざむとした感じにさえ襲われる。

私はまだ実物を繙いていないが、いま手もとにある新聞の広告に、在日フランス人ポール・ボネ著『不思議の国ニッポン』という本の広告がのっている。「『日本国民への見事な啓蒙の書』と読者の声殺到」という宣伝文句がついている。この本の題の真意を私は知らないし、宣伝文句が事実であるかどうか私にはわからない。しかしこれはなかなか意味深い広告である。というのは、チェンバレンからベネディクトまで、いやそれからさらにカーンやブレジンスキーにいたるまで、西洋人の日本論のほとんどすべてが日本を「不思議」の国(カーンの言葉を借りれば「奇異」strangeな国)と見てきた。彼らのある者は(たとえばカーンのように)日本の文化を理想化してあこがれ、またある者は(たとえばグリフィスのように)その非近代性を批判して西洋化させようとしてきたが、いずれにしても、彼らが日本に注目したのは、その文化の「奇異」さ、「不思議」さにあった。ところで、このことは逆にいえば、日本人にとっては、彼

ら西洋人の文化こそ「奇異」「不思議」なものに見えて当然ということになる。そして西洋人の日本論も、そういう相対的な距離の上に立つものとしてうけとめられるのが自然であろう。またそういうふううけとめてこそ、意義も生じるように思う。ところが、その西洋人の日本論が、この国ではたちまち、「日本国民への見事な啓蒙の書」とうけとめられている——少なくとも、そう宣伝されている。まるで日本人自身が唯々諾々として、日本の文化を「奇異」「不思議」なものとしているかのようである。

じっさい、こういう態度はかなりひろまっているらしい。ベネディクトの『菊と刀』は、日本人の(西洋人から見た)「異質」性、あるいは「矛盾」ぶりを強調し、その本源をさぐるという形で書かれている。それはそれで結構だと思う。ところが、その邦訳(現代教養文庫、1952年)の「はしがき」でいうように、「米国はどう日本人を理解すべきか」という課題にこたえようとしたこの本を、日本では、「日本はどう日本人を理解すべきか」という意味において手本として読むようになった。つまり、米国ないし西洋の方を基準にして、西洋は首尾一貫、日本は矛盾混乱というような形で、日本人や日本文化を考へることがなされるようになった。そしてこの種の日本論はいまだに氾濫しているのである。

われわれには、どうも2つの心の動きがあるらしい。一つは、日本文化の独自性を強調したい気持である。武士道、茶道、能は、西洋人の理解をこえた心の世界であり、和歌、俳句は、英語なんぞに訳しようのない美的世界だ、といったような気持である。ところが、その独自性が外国(西洋)にどううけとめられるかを途方もなく気にする気持もある。西洋人が能や俳句を論じようものなら、すぐにとびつく。いや、もっと大きなナショナリティの問題でも、カーンがああいった、ドブジンスキーはこういったと、一喜一憂する。そしてこんどは、「エスブリあふれる筆致」のボネさんにおうかがいをたて、「啓蒙」してもらおうというしだいなのである。

(3) アメリカとの共通点

自国文化の独自性に対する誇りと不安がいまじり、外国人による、自国の文化論を氾濫させるという現象は、多分、アジアでいえば中国、ヨーロッパでいえばフランスなどには、あまりないものであろう。これらの国は、それぞれの大陸文化の中心となり、その歴史に支えられて中華思想を発達させてきた。そして外国人による自国の文化論には、大様に耳を傾けることはあっても、意識の根底をゆさぶられるようなことは滅多にない。

私の知る限り、日本人の自国文化意識に多少とも近い現象を見せているのは、アメリカである。アメリカ人もまた、アメリカ文化の独自性を強調してきた。ヨーロッパを十把ひとからげにして旧世界と呼び、アメリカを新世界と称して、その「新」なる文化を追求してきた。アメリカ文化史や文学史の底に流れるのは、ヨーロッパにない独自の文化・文学を作ろうという意識的努力の連続である。ところが、そのくせ、ほとんど無意識的なところで、彼らはヨーロッパによる自国文化の承認、是認を求め続けてきた。そして、ヨーロッパ人のアメリカ論をひどく気にし、また尊重してきたのである。

西洋人が日本に対して時とはいささか程度を異にするけれども、一般に、ヨーロッパ人はアメリカを見て「奇異」さを感じた。そしてさまざまなアメリカ論を書いた。その中で、アレクシス・ド・トクヴィルの『アメリカにおけるデモクラシー』（1835、40年；最初のアメリカ版、1838年）や、ジェームズ・プライスの『アメリカ共和制』（1888年）などは、それぞれ著者の本国よりもむしろアメリカで古典となっている——チェンバレンやハーンやベネディクトの本が日本でそうになっているのと同じである。その他、マシュー・アーノルドの批判（『合衆国の文明』1888年）や D. H. ロレンスの強引な解釈（『アメリカ古典文学研究』1923年）にも、またアンドレ・シエグフリードの分析（『現代のアメリカ』1927年）やジョルジュ・デュアメル の抗議（『未来生活風景』1930年）にも、きまじめに対応してきている。こういう態度は現在も少しも弱まっていない。

ただし、ここで注意しておきたいのは、アメリカ人が本当に気にし、意識の根底までゆさぶられるのは、あくまでヨーロッパ人のアメリカ論であって、それ以外の人のアメリカ論ではない、ということである。日本人のアメリカ論ないしアメリカ観などは、好奇心の対象にはなるかもしれないし、また政治的、社会的、経済的には気になることでもあろうが、それ以上の精神的意味をもつことは滅多にないような気がする。これはなにも、人種的偏見などということのせいではない。文化的なつながりの意識の有無が、根底に働いているのである。

日本はアジアの極東に位置する。それはシナを偉大な中央とする辺境文化の土地だといってよい。

アメリカはヨーロッパの極西に位置する。大西洋は、日本海や東シナ海と比べると余りにも大きいようだが、大航海時代以後の船をもってすれば、遣隋船や遣唐船はたしたような文化の伝播を拒むものではなかった。アメリカはヨーロッパを偉大な中央とする辺境文化だといえるであろう。

文明開化以後、日本はこのヨーロッパ・アメリカの辺境にもなった。交通機関の発達により、太平洋はかつての大西洋よりも小さくなり、日本は従来シナを文化の手本としていたような目で、アメリカ・ヨーロッパを見るようになった。日本の文化的辺境性は、この意味で二重であり、アメリカのそれより複雑である。ただし、せまい島国であり、人種の統一があることなどを考えれば、アメリカと違った単純さもある。

いずれにしても、日本文化とアメリカ文化は、この辺境性という点で一致点をもつようである。そしてこの両国人の文化意識には、辺境コンプレクスとでもいうべきものが共通してあるような気がする。辺境にあるということは、中央の文化から独立を容易にし、じっさいまた文化の独得な展開を可能にしてきた。そしてその国民は、自己の文化的独自性をことあるごとに強調してきた。しかしまた、辺境意識はどこかで中央文化への劣等感をかくしているようだ。自信がない。したがって、みずから自国文化論をさかんにすると同時に、外国人（中央文化人）の自国文化論を大いに歓迎し、それに拝跪するるのである。

（４）辺境文化の意識

辺境文化の意識は、日本の場合、長い歴史を通して培われたように思われる。邪馬台国時代以来、日本はシナに貢献する関係にあった。そして日本の支配者は、何度かシナの天子から封冊をうけてきた。文化的にも、遣隋使や遣唐使が象徴するような、従属関係にあった。しかし、ある程度、政治的統一がなされ、社会が整備されると、独立意識は必ず育つものらしい。遣隋使を派遣した聖徳太子が、「日出処の天子、書を日没処の天子に致す。恙なきや」と書き送ったという話などは、その種の意識のあらわれであろう。ただし、田舎人が都会人に対し背のびして偉ぶっているような感じも、どこかです。文化的にも、シナから学びながらそれと対等に立ちたいという意識は、三教一致、本地垂迹などの説を生み出した。いやさらには、大日本は神国なりなどという信念も生まれ、しかもそれが単に宗教的、倫理的な意味をもつにとどまらず、世界にもそれで通用すると思ひこむような妄想に発展していった。幕末維新以来、日本は西洋文化に接し更めて劣等感をたたきこまれたが、近代国家として西洋列強と伍しはじめるにつれて、この妄想はついに国民的熱気にもさせられた。

あらゆる国民は、それぞれ自国を美化する傾向をもつものであろうが、こんな妄想にかられた国は、西洋近代国家にあったらどうか。もしそれに近いものがあったと

すれば、やはりアメリカであろう。アメリカの歴史は短い、植民地として出発したことは、根強い文化的劣等感をその国民にうえつけた。と同時に、アメリカこそ真のキリスト教の国だという対抗意識も、早くからあった。またアメリカを「新しきエデン」、アメリカ人を「新しきアダム」と見るような考えも、ひろくひろまった。政治的なデモクラシーの勝利さえ、「マニフェスト・デスティニー」というような宗教的色合いをもって説かれた。しかもアメリカ人は、そういう信念が世界に通用すると思ひこんできたのである。

辺境文化の意識は、こうして、劣等感を優越感へと裏返すのであるが、しかし、内部にかかえた不安が消えてしまうわけではない。だから、先に述べたように、中央文化の反応を絶えず気にする。しかも興味深いのは、ほとんど神がかり的な優越感をふりかざしながら、そのじつ、中央文化に強い好奇心と憧憬をもち続け、それを果敢に取り入れもすることである。

日本にもアメリカにも、孤立主義は常にあったし、いまもある。しかしアメリカの場合、最もナショナリスト的なウォルト・ホイットマンにしても、「アメリカは過去をも、また過去が生み出したものをも斥けはしない…その教訓を静かに受け入れる」、「アメリカの詩人は古きものと新しきものを包含しなければならない、なぜならアメリカは多数の種族からなる種族だから」（『草の葉』初版の序）といった宣言をしている。これはまずアメリカ人一般の意識を代弁したものといつてよいであろう。

日本人の意識構造について考えるとき、それを形成した要素として、島国であること、そして、鎖国をしたことなどが、しばしば説かれる。しかし、これが日本人の独善性を促進したのは事実としても、もう一つの面を見落してはならない。島国であることがかえって外国文化の伝播を容易にしたことも、日本の歴史を緋けば一目瞭然であろう。しかも日本人がその外来文化を積極的に摂取したことは、隋唐以後のシナ、南蛮時代のポルトガル、文明開化時代以後の西洋諸国の人々に、無数の証言がある。なるほど、鎖国はした。しかし徳川の鎖国は十分に政治的な理由から止むく行なつたと見るのが正しいであろう。しかも注目したいのは、鎖国中も外国の文物はシナ、オランダを通してかなりよく入ってきており、知識人たちは、厳しい制限のもとでも、西洋の新知識に関心をもち続けていたことである。

このことは、同時代のシナ人の外来文化に対する態度と比較するとき、さらに明かになると思う。シナは文字通り中華であり、地大物博を誇っていた。そしてシナこそが普遍世界なのだから、自分が鎖国していること自体

も、ほとんど気づかずにいた。ヨーロッパの進んだ機械類を見ても、淵源をたどればシナから出ているというわけで、心底から驚嘆することはなかった。これに対して日本人は、はじめはシナ、後には西洋の文化にまことに敏感に反応した。敏感すぎるくらいである。ある観点からすれば、シナの態度こそ大人にふさわしいものであり、日本の態度は猿真似する猿に近いものであろう。しかし別の観点からすれば、その一見軽薄な動搖の中に、文化活動のヴァイタリティがこもっているともいえそうである。

辺境文化の意識は、自己の本性の独自性と普遍性との承認をせっかちに求め続けるものらしい。それは常に中ぶらりんの状態にある。D. H. ロレンスがアメリカ人について、彼らはまだ「真に積極的にそうなりたいと思うもの」をつかんでいない、だから彼らの魂は常に「暗いサスペンス」の状態にある（『アメリカ古典文学研究』）といったのは、結局この中ぶらりんの意識を指摘したものであろう。しかしこういう意識があるからこそ、アメリカではアイデンティティの探求とその表現への努力とが、個人のレベルでもナショナルなレベルでも執拗になされ、それがとりもなおさずアメリカ文化そのものを作ってきた。アメリカ文学の真髓がその探求と努力のすさまじさにあることは、ロレンスの本自体がよく説くところである。

日本人の意識もまた、同様の中ぶらりんさをもっているように思う。よきにつけ悪しきにつけ、というより不幸であることの方が多いのかもしれないが、緊張し続けてきた。卑屈になり、背のびし、偉ぶり、また反省し、あちこち気にしながら、日本人とは何か、日本文化とは何かということを探求し続けてきた。そして中央文化の大人から見れば子供っぽいかもしれないこの努力が、日本文化の展開の原動力になってきたように思われる。

ただし、われわれにいま要求されるのは、この文化的エネルギーを神がかり的な妄想に走らせないだけの落着きと調和であろう。そのためには、日本文化を「奇異」「不思議」と見るばかりでなく、国際世界に関係しあっている日常性においても把握しなければなるまい。私はかつて、明治の思想的先覚者たちがそういう相対的な文化意識をもつことにいかに苦心惨胆したかを述べたことがある（『ナショナリズムの文学——明治の精神の探求』1971年）が、彼我の文化を着実に考量できる「レラティヴィストの目」は、現在ますます必要になっているような気がする。

（東京大学助教授）

A Comparison of Communication Activities of Japanese and American Adults



Satoshi Ishii
and Donald Klopff*

American communication habits have been studied by Rankin,¹⁾ Roethlisberger,²⁾ Bird,³⁾ Brieter,⁴⁾ Goetzinger and Valentine,⁵⁾ and Samovar, Brooks, and Porter,⁶⁾ among others. The studies support the general conclusion that the average American adult spends a large portion of his waking hours in communication activities.

To our knowledge, no surveys of the daily communication habits of Japanese adults have been undertaken, although their television/radio and reading customs have been analyzed

*Ishii is Instructor, Otsuma Women's University, Tokyo; Klopff is Professor and Chairman, Department of Speech, University of Hawaii, Honolulu, U.S.A. The authors acknowledge the assistance of Dr. Roichi Okabe, Nanzan University, Nagoya, and Professor Yasuhiko Murai, Fukuoka University, Fukuoka City, Japan, as well as Gailyn Cho and Gayleen Quirit, University of Hawaii, in compiling the data.

1) Paul T. Rankin, "Listening Ability: Its Importance, Measurement, and Development," *Chicago Schools Journal*, 12: 177-79, 1930.

2) F. J. Roethlisberger, *Management and Morale* (Chambridge, Mass.: 1941).

3) Donald E. Bird, "This is Your Listening Life," *Journal of the American Dietetic Association*, 32: 534-36, 1956.

4) Lila R. Brieter, "Research in Listening and Its Importance to Literature," unpublished Brooklyn College paper, 1957.

5) Charles S. Goetzinger and Milton Valentine, "Communication Channels, Media, Directional Flow and Attitudes in an Academic Community," *Journal of Communication*, 12: 23-26, 1962.

6) Larry A. Samovar, Robert D. Brooks, and Richard E. Porter, "A Survey of Adult Communication Activities," *Journal of Communication*, 19: 301-307, 1969.

periodically. However, we have been unable to locate research comparing the communication practices of Japanese and American adults.

This study is an investigation of the communication activities of general adult populations in Japan and Hawaii. Particular attention is given to university students yet a representative sampling of occupational groups appears, especially in the Hawaii results.

Methodology

Twelve hundred communication logs were distributed to university students in Japan and Hawaii. Each student received a log for himself and one for each parent. The log, quite similar to the one described in Samovar, Brooks and Porter, covered the twenty-four hours of a normal weekday in fifteen-minute segments. The respondents filled in the log at personally convenient intervals throughout the day, designating the communication activities they had engaged in during each fifteen-minute period.

Communication activities studied were: (1) conversation—all speaking and listening taking place in one-to-one and small group situations; (2) speaking—speaking in one-to-many occasions, in other words, public speaking; (3) listening—hearing a one-to-many speech; (4) television viewing/radio listening—watching television and listening to the radio; (5) reading; and (6) writing. Respondents also logged time devoted to sleep as well as periods

of no communication whatsoever.

Returned logs were sorted according to occupational categories, most of which were included in the Samovar, Brooks and Porter report. The categories are; (1) administrative—administrators, business managers, department heads, supervisors of managerial personnel, etc.; (2) clerical—stenographers, typists, file clerks, etc.; (3) engineers; (4) housewives; (5) professional—doctors, lawyers, dentists, teachers, social workers, etc.; (6) sales; (7) skilled—machine operators, cooks, carpenters, plumbers, painters, etc.; (8) students; (9) technical—laboratory technicians, etc.; and (10) unskilled—laborers, taxi-drivers, waitresses, etc.

Two measurements were tabulated for each occupational class. The first measured the average total time each class devoted to communication and the second, the mean time each class spent in the different types of communication.

Results

A total of 785 logs were returned, 65% of the sample.⁷⁾ The high return was a result of the distribution method: the students were given the logs as an assignment, a required class activity. Student responses represent students at the University of Hawaii, Honolulu; Otsuma Women's University, Tokyo; Nanzan University, Nagoya; Fukuoka University, Fukuoka City, Japan. The other Japan occupational categories represented are the administrative and housewife classes. Responses in other categories from Japan were too small to be computed.⁸⁾

The results presented below are indicative of the communication habits of Japanese and

Hawaii adults, within the specific limitations of the methodology used and the sample studied.

1. *How do the Japanese compare with the Americans in time devoted to communication activities?*

Table 1 shows the mean percent of time devoted to communication activities. Two measures of time are noted for both Japan and Hawaii respondents—the 24-hour day and the waking hours. The mean percent for the total returns reveals that the Americans as represented by Hawaii spend more time than the Japanese in communication activities: 24-hour period—Hawaii 48.4%, Japan 33.8%; waking hours—Hawaii 72.6%, Japan 50.7%.

2. *How do the occupational categories rank in terms of time spent in communication activities?*

In Japan, the administrators and students rank first; each with 53.3% of the waking-hour period devoted to communication activi-

Table 1: Mean Percent of Time Devoted to Communication Activities by Occupation

Occupational Category	24-Hour Day		Working Hours	
	Japan	Hawaii	Japan	Hawaii
Administrative	35.6%	56.6%	53.3%	86.6%
Housewife	30.3	43.0	45.5	64.5
Student	35.6	66.8	53.3	98.7
Clerical	*	49.2	*	75.7
Engineer	*	58.0	*	87.5
Professional	*	66.6	*	98.0
Sales	*	52.8	*	79.2
Skilled	*	24.1	*	36.3
Technical	*	45.2	*	66.7
Unskilled	*	21.6	*	32.7
Mean for Total Returns	33.8%	48.4%	50.7%	72.6%

*Insufficient respondents to compute mean.

7) The occupational distribution of returned logs is: administrative=73; clerical=38; engineer=35; housewife=81; professional=40; sales=45; skilled=41; technical=43; students=370; unskilled=20. The logs were distributed in January 1975 in the U.S.A., and in January and June 1975 in Japan.

8) The Japanese occupational representation may reflect the general nature of the student make-up in the Japan universities sampled. The student population may represent more of a "white collar" parental occupational class than typical American universities. The parents of American students as a rule come from all occupational groups.

ties. The housewife group follows with 45.5% for the same period.

In Hawaii, the rank order is: (1) students, 98.7%; (2) professionals, 98%; (3) engineers, 87.5%; (4) administrators, 86.6%; (5) clerks, 75.7%; (6) sales people, 79.2%; (7) technicians, 66.7%; (8) housewives, 64.5%; (9) skilled workers, 36.3%; (10) unskilled workers, 32.7%.

The student groups obviously engage in the most activities as they rank first in Japan and Hawaii.

3. *How do the communication activities rank in terms of mean percent of time devoted to each?*

The mean for total returns in Table 2, Percent of Waking Hours Devoted to Communication Activities, indicates this rank order:

Activity	Rank Order	
	Japan	Hawaii
Conversation.....	1	1
TV/Radio	2	2
Reading	4	3
Writing	3	4
Listening	5	5
Speaking	6	6

Conversation ranks the highest both in

Japan and Hawaii. The television viewing/radio listening category trails in second place in both areas. Reading in Hawaii and writing in Japan rank third followed by the others. Listening (*i.e.*, listening to speeches) and speaking (*i.e.*, giving speeches) are not major communication factors for the persons sampled.

4. *How do the communication activities rank in terms of occupation?*

Table 2 shows that the rank of the activities varies from group to group, as noted below.

Conversation. Ranked first by all groups except the Japan students who rank it second.

TV/Radio. Ranked second by the administrative, housewife, clerical, professional, skilled, technical, and unskilled groups; third by Hawaii students, engineers, and sales; fourth by Japan students.

Reading. Ranked second by Hawaii students, engineers, and sales people; third by the administrative, housewife, clerical, Japan students, professional, skilled, technical, and unskilled groups.

Writing. Ranked first by the Japanese students; fourth by the administrative, housewife, clerical, engineer, professional, sales,

Table 2: Percent of Waking Hours Devoted to Communication Activities

Occupational Category	Communication Activity											
	Conversation		TV/Radio		Reading		Writing		Listening		Speaking	
	Japan	Hawaii	Japan	Hawaii	Japan	Hawaii	Japan	Hawaii	Japan	Hawaii	Japan	Hawaii
Administrative	26.5%	44.9%	8.7%	16.5%	8.0%	10.9%	7.8%	10.8%	2.3%	3.5%	0.001%	0.00%
Housewife	22.0	35.1	12.5	16.5	4.6	7.1	3.1	3.1	3.3	2.7	0.00	0.00
Student	14.7	34.8	7.7	15.1	11.9	28.2	16.9	6.8	2.1	13.7	0.005	0.01
Clerical	*	44.2	*	19.4	*	6.9	*	2.2	*	1.1	*	0.00
Engineer	*	47.4	*	13.1	*	17.1	*	9.9	*	0.00	*	0.00
Professional	*	67.2	*	20.6	*	7.1	*	3.1	*	0.01	*	0.00
Sales	*	51.4	*	10.4	*	11.2	*	3.5	*	2.5	*	0.02
Skilled	*	19.8	*	9.3	*	4.8	*	1.2	*	1.2	*	0.00
Technical	*	38.0	*	17.1	*	6.6	*	3.5	*	1.5	*	0.00
Unskilled	*	18.2	*	7.3	*	3.9	*	2.3	*	0.9	*	0.00
Mean for Total Returns	21.1%	40.1%	9.6%	14.5%	8.2%	10.4%	9.3%	4.6%	3.0%	2.7%	0.002%	0.003%

*Insufficient respondents.

skilled, technical, and unskilled groups; and fifth by the Hawaii students.

Listening. Ranked fourth by the Hawaii students and fifth by all other groups.

Speaking. Ranked sixth by all groups.

5. *How do the orally-related communication activities compare with reading and writing?*

Conversation, television viewing/radio listening, listening and speaking consume 66.0% of the Japan respondents and 78.9% of the Hawaii groups' waking hours devoted to communication. Reading takes 16.1% in Japan, 14.7% in Hawaii, and writing, 18.0% in Japan, 6.4% in Hawaii.

Discussion

The results conclusively demonstrate that the average person sampled engages in Communication activities during a large part of the normal weekday. In terms of actual time, the typical Japanese averages 8 hours and 7 minutes while awake and the American, 11 hours and 37 minutes. For the Japanese sampled, the hours are approximately spent thus: conversation—3 hours and 31 minutes; TV/radio—1 hour and 32 minutes; reading—1 hour and 8 minutes; writing—1 hour and 26 minutes; listening—28 minutes; and speaking—2 minutes. For the Americans: conversation—6 hours and 43 minutes; TV/radio—2 hours and 34 minutes; reading—1 hour and 8 minutes; writing—44 minutes; listening—26 minutes; and speaking—2 minutes.

Clearly, conversation dominates the communication day. Conversation, however, encompasses a variety of forms; it should not be construed to mean solely social chit-chat or gossip. The conversation of a person in the professional category, for instance, would be occupationally related for the most part. The medical doctor, for example, may confer with patients, his staff, hospital personnel, and so on, as well as occasionally gossiping with relatives and friends. The student may

be involved in a variety of conversational activities: small group discussions with classmates and teachers about classroom matters, talking over personal problems with his parents, and gossiping with friends. On the basis of 156 logs on which the respondents clearly identified the forms their conversation took, these principal ones appeared: decision-making or problem-solving—46%; learning or information gathering—38%; therapeutic or counseling and guidance—9%; social—7%. The conversational category, therefore, is broad and includes both purposeful speaking and listening as well as social talk.

The results demonstrate that the typical American sampled devotes more time to communication activities than his Japanese counterpart. The data from the Japan respondents, however, do not uphold the general belief that to the Japanese "silence is golden." The average Japanese spends approximately four hours each day in the oral activities of speaking and listening, although the American almost doubles that time. Nevertheless, the Japanese respondent does frequently communicate orally.

Reports on world-wide television-viewing practices have Japan leading the world in terms of hours spent watching TV. This study shows that the typical American views more television than the Japanese. Japanese housewives, for example, are overshadowed by American housewives—2.6 hours for the Americans to the Japanese' 2 hours. The study does not include children who represent a large viewing population. Also, the study deals with an average weekday, a workday for most of the respondents. If weekend viewing was considered, the results probably would be altered.

An examination of student communication practices reveals more oral communication by the Americans in the classroom. One hundred thirty-one American student respondents noted on their logs how they spent class time. They

indicated much participation in class discussion and in oral communication exercises such as giving reports and speeches in class, and reading aloud. On the other hand, the Japanese students appear to do more note-taking and reading during class hours. Nevertheless, the student groups in both countries devote as much or more time to communication activities than any of the other occupational categories. The American student particularly is speaking, listening, reading or writing practically all of his awake-hours.

Among the other occupational categories, the occupations which usually include the highest paid, best educated, and most highly skilled people involve the greatest amount of communicating. In the professional, the administrative, the engineering, and sales groups, communication consumes a major part of the day. This is not surprising since these jobs do require much contact with other people. In contrast, people in the unskilled group or those with vocations calling for trade skills (*e.g.*, carpentry, plumbing, painting) engage in the least amount of communication activity. Their average day probably requires less contact with other people and is more directly related to dealing with objects or things used in their work.

Additionally, people in these groups do less

television watching and radio listening than in the other occupations. Perhaps home-bound activities do not interest them as much as outdoor activities, community events, movie-going, and athletics.

It may be safe to conclude that students planning to enter people-related professions such as law, medicine, engineering, sales, and teaching, to mention a few, should be well-trained in the communicative arts—speaking, listening, reading and writing.

Conclusion

Recognizing the limitations of this study, two general conclusions, nonetheless, seem supportable by the data gathered. The Samovar, Brooks and Porter study mentioned previously arrived at similar conclusions. First, contemporary society appears to be a verbal one. Almost three-fourths (72.6%) of the Americans' waking time and better than half (50.7%) of the Japanese' is given to communication activities. Second, the communication skills should receive considerable attention in education curricula, especially the speaking and listening skills since all of the persons sampled spend more than two-thirds of their daily communication time in them.

(p. 44 よりつづき)

11. i. 203-7 につきのような部分がある。

I am your spaniel; and, Demetrius,

The more you beat me, I will fawn you:

Use me but as your spaniel, spurn me, strike me,

Neglect me, lose me; only give me leave,

Unworthy as I am, to follow you.

(ディミートリアス、あたしはあなたのスパニエル犬、ぶたればぶたれるほど、尾をふってまつわりつくの。ええ、あなたのスパニエルにさせていただくわ。蹴ってちょうだい、ぶってちょうだい、知らん顔をしよう、忘れてしまおうと構わない。ただ許していただきたいの、なんの値うちもない女だけれど、せめておそばにだけは居させて。——福田恆存訳)

諺にもうひとつ、The spaniel, that fawns when he is beaten, will never forsake his master. (ぶたれても甘えるスパニエル犬はけっして主人を見棄てないものだ) というのがある。打つべきか、それとも打つべきでないか、問題はそれだ。(静岡県立韮山高校教諭)

〔訂正〕本誌前号(No. 52)「疑問文(I)」に次の誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

p. 19 (3か所) 勤→働

p. 19

誤 (9) B: We $\left\{ \begin{array}{l} \text{not} \\ \text{don't we} \\ \text{*shouldn't we} \end{array} \right\}$ destroy Carthage?

(10) A: Why shouldn't destroy Carthage?

正 (9) B: Why $\left\{ \begin{array}{l} \text{not} \\ \text{don't we} \\ \text{*shouldn't we} \end{array} \right\}$ destroy Carthage?

(10) A: We shouldn't destroy Carthage.

疑問文(Ⅱ)

OTA AKIRA

太田 朗



4. ノーマルな疑問文の意味

前号では、まず疑問文形を分類し、次に疑問文形をしているが疑問の意味をあらわさない場合について述べ、最後に疑問ではあるがノーマルでない場合、すなわち、問い返し疑問、指示疑問、クイズ的疑問について述べた。本号では、本題に入って、ノーマルな疑問文のあらわす意味について述べる。

最初にノーマルな疑問文とはどんなものをいうかについて、今迄に述べて来たことをまとめておきたい。ノーマルな疑問文とは、(1)前提条件を満たしている、かつ(2)適切性 (felicity condition) の条件を満たしているものである。(1)の前提条件の中には、平叙文と共有しているものと、疑問文特有のものがある。本誌 No. 45, pp. 32-34 の拙稿「前提」で述べたように、たとえば John has stopped beating his wife という文は、John beat his wife という文のあらわす命題を前提とし、そしてこの前提は、この文が疑問文になって Has John stopped beating his wife? となってもかわらない。もしこの前提が満たされなければ、(すなわち John が妻をなぐったことがなければ)、この疑問にはまともに答えられない。この前提は、疑問文がそれに相当する平叙文と共有しているものである。これに対し Who has stopped beating his wife? という疑問文の前提は、Somebody has stopped beating his wife ということで、もしこの前提が満たされないと、(すなわち Nobody has stopped beating his wife ということであると)、上の疑問文にはまともには答えられない。前号で述べた修辭疑問の第1のケースは、この前提を否定するものであった。所で Who has stopped beating his wife? の前提の Somebody has stopped beating his wife は、疑問文特有の前提である。しかし Somebody has stopped beating his wife に含まれる Somebody beat his wife という前提は平叙文と共有されている前提である。ノーマルな疑問文は、これらの前提条件を満たすものでなくてはならない。

それでは前提条件を満たせばノーマルな疑問文といえ

るかというそうではない。前提条件を満たすということは、ノーマルな疑問文の必要条件であっても、十分条件ではない。ノーマルな疑問文であるためには、前提条件に加えて、適切性の条件を満たさねばならない。適切性の条件とは、平叙文、疑問文、命令文、約束の文など色々な文が、それぞれノーマルに使用されるために満たすべき条件である。たとえば平叙文については、話者とその発言を真と信じているということ、疑問文については、話者が少なくとも聴者が自分より問題になっていることがらについてよく知っていると思っていること、命令文については、聴者がそれを実行できるということ、などである。前提は、話者、聴者を引き合いに出さないでも、ある文が別の文のあらわしていることがらを前提にするというようにいえるが、適切性の条件は上述のように話者、聴者を引き合い出さなければ述べられない。

§ 4 では、以上のような条件を満たすノーマルな場合の疑問文の意味、用法について、特に疑問文のもつ「片寄り」(bias)の問題を中心にして、選択疑問、yes-no 疑問、付加疑問をとりあげることにする。「片寄り」とは、疑問文が肯定、否定いずれの答えをより多く予想するかということで、それぞれ「肯定の片寄り」(positive bias)、「否定の片寄り」(negative bias)をもつという。前号で述べた修辭疑問などは、この片寄りが極端になって、もはや返答を求めているのではなく、平叙文の意味を強調しているだけになっているケースであるといえる。

(a) 選択疑問。

(39) のような選択疑問文の前提は (40) のようなことである。

(39) Does he speak French or Italian?

(40) He speaks either French or Italian.

つまり、彼がフランス語もイタリア語も話せないか両方とも話せるなら、この問いにはまともに答えられない。⁴⁾

4) (39) の音調に注意。(i) のような音調にすると、それは yes-no 疑問文となる。

(i) Does he speak French or Italian?

(39) のような文は (41) のような or で結ばれた 2 つの文の…をつけた部分が削除されたものと考えられる。斜字体の語は対照をなす。

(41) Does he speak *French* or does he speak Italian?

選択疑問文の中には (42) のような形のものがある。これは (43) のような or で結ばれた 2 つの文の同一部分が削除されていると考えられ、その前提は (44) である。

(42) a. Does he speak French or doesn't he?
b. Does he speak French or not?

(43) Does he speak French or doesn't he speak French?

(44) Either he speaks French or he doesn't (speak French).

(44) の or の前の文を S とすると、or の後の文は not S で示せる。(44) は S or not S という形の発言であるが、これは S が前提を満たしている限り、必ず真になる。「彼はフランス語を話すか、話さないか、どちらかだ」というのは、論理上は必ず真になり、従っていても、いわないでも、このことに関するわれわれの知識は同じことである。そして S か not S かどちらか一方が真ならば、他は自動的に偽になるから、その部分は余分である。従って (44) のような問いは、or の後の部分をおとしていても、論理的には事足りる。

(45) のような yes-no 疑問文は (42) のような選択疑問文の or 以下が脱落したものと考えられているが、これは上述のことから理解できよう。yes-no 疑問文の上昇調もこのことから理解できよう。

(45) Does he speak French?

前回 § 1 の文形の分類で、yes-no 疑問文と選択疑問文とをあわせて、ともに「離接的疑問文」(disjunctive question) としたのはそのためである。「離接的」とは、or で結ばれたという意味である。

また (45) のような yes-no 疑問文の答えは、肯定か否定かどちらかの対極に落着くが、(39) のような普通の選択疑問の答えは単なる肯定、否定ではない。前回 § 1 で、離接的を分けて対極的 (=yes-no 疑問) と非対極的 (=選択疑問) としたのは、そのためである。

(42) と (45) は、論理的には同様な意味をもっているが、感情的意味は異なる。(42) は「彼はフランス語を話すのか、話さないのか、どっちなんだ」といったような意味合いで、相手の中途半端な態度にいらいらしな

がらいうような時によく用いられる。たとえば (46) がそうした場合である。

(46) Do you want me to go out and get you some cigarettes or don't you?—Parker

(46) は、前号注 2 で述べた Parker の短篇のはじめの方で、男が女の機嫌をとろうとして、「煙草でも買って来てやろうか」といったのに対し、女が依然としてすねてはっきりした返答をしないのに、ごうを煮やした男がいうせりふである。(45) のような yes-no 疑問文にはそうした特別な感情的色彩はない。自然言語は、論理だけでは片づかない。

後述するように、yes-no 疑問文にも、付加疑問文にも、多くの場合に「片寄り」がある。しかし (42) のようなタイプも含めて、選択疑問は最も片寄りが少ない。(42) のような選択疑問は、返答として肯定の方を予想するか、否定の方を予想するかといった片寄りが無い。どちらか全く予想がつかないから、(46) のようにいらいらした場合に使われるわけである。従って片寄りという点から見ると、yes-no 疑問文と選択疑問文とは異なっている。(42)、(46) のような選択疑問文に片寄りが無いということは、こうした文で否定、もしくは肯定の、どちらかの対極への片寄りを示す語句と一緒に使うと、おかしな文になるということに示される。(47) の yes-no 疑問文は、really, any といった否定的片寄りを示す語があるために否定的片寄りをもっているが、(48) は really, any が選択疑問文で用いられているため、おかしな文になっている。(49) は seldom のために疑問文は肯定的片寄りをもっているが、(50) はそれが選択疑問になっているため、おかしな文になっている。(51) は or 以下がなければよい文である。

(47) Does John really have any money?

(48) ?* Does John really have any money or not?⁵⁾

(49) Does it seldom rain here?

(50) ?* Does it seldom rain here or not?

(51) Didn't he leave your house at all for a week (?* or did he)?

(b) yes-no 疑問。

前節で yes-no 疑問文は、S or not S? という形の選択疑問文の or 以下が脱落したものと考えられるといったが、これは (52) のような肯定の yes-no 疑問文の場合で、(53) のような否定の yes-no 疑問文の場合は、not S or S? の or 以下が脱落したものと考えられる。

5) 文頭の * は非文法的、? は非文法的というほどではないがおかしな文、? * はその中間くらいの逸脱文を示す。

なお (ii) も yes-no question である。

(ii) Does he speak either French or Italian?

つまり (53) は, Aren't you going to George's party (or are you)? の括弧の中の部分が脱落したものと考えられる。

(52) Are you going to George's party?

(53) Aren't you going to George's party?

所が片寄りという点からいうと, (52) のような肯定形のもの, (53) のような否定形のものとの間には差がある。(52) は, 片寄りに関しては中立的で, もし片寄りがあるとすれば, それは否定的であるのに対し,

(53) の方は, 問い返し疑問の類を別として, 肯定的片寄りをもつ。片寄りに関し, (52) は無標 (unmarked), (53) は有標といえる⁶⁾。より複雑な否定疑問文の方が有標となるのは自然なことといえる。

しかし片寄りはまた文中に含まれる肯定または否定の対極表現によっても左右される。否定対極表現は, 前号 § 2 (a) でふれたように否定文で特徴的に使われる any, yet, ever, at all, much, until などであり, 肯定対極表現は, 否定のかからない some, still, already, would rather などである。これらの対極表現が含まれている時は, それが否定対極表現であるか, 肯定対極表現であるかに応じて, 疑問文はそれぞれ否定もしくは肯定の片寄りをもつ。前のパラグラフで述べた否定疑問文のもつ肯定の片寄り, その文で用いられる肯定対極表現による片寄りとが一致する場合 (54, 55) もあるが, 一致しない場合 (56, 57, 58) もある。後者の場合には, 通例対極表現による片寄りの方が優先する。(56) - (58) は否定的片寄りをもつ。

(54) Didn't someone ring the bell?

(55) Haven't I met you somewhere?

(56) Oh, haven't you finished it yet?

(57) Didn't you have very much fun?

(58) Doesn't she ever talk?

等しく対極表現といっても, 力の強いのも弱いのもある。(very) much などは弱い方で, until などは強い方である。強い方の否定対極表現が否定疑問文のもつ肯定の片寄りと不一致を起こす場合には, 時におかしな文になる。(59) はそうした例である。

(59) $\left\{ \begin{array}{l} ? * \text{Isn't} \\ \text{Is} \end{array} \right\}$ Tommy all that bright?

片寄りの程度には, 音調も関与する。(60) のような下降調の場合は, 相手の同意を求めている断言に近い意味合いになり, 従って否定対極 anyone は不適當であるが, (61) のように上昇調になると, a. は, 肯定的片

寄り b. は否定的片寄りをもつ問いとなる。

(60) Didn't $\left\{ \begin{array}{l} \text{someone} \\ * \text{anyone} \end{array} \right\}$ ring the bell? ↘

(61) a. Didn't $\left\{ \begin{array}{l} \text{someone} \\ \text{anyone} \end{array} \right\}$ ring the bell? ↗
b.

until は強い否定対極表現で, (62) のように主語に数量詞を含む否定疑問文のもつ肯定的片寄りとは相容れないが, (63) のような文は ok である。(63) のような文は, 主語の many という数量詞が not を文否定と解するのを妨げ, Many of the fruit flies will not die (i.e. survive) until tomorrow ということに関し, yes か no かを聞く片寄りのない文と解されるからである。つまり否定疑問文で片寄りをおこすのは, 文否定の場合である。

(62) *Won't many of the fruit flies die until tomorrow?

(63) Will many of the fruit flies not die until tomorrow?

(c) 付加疑問。

付加疑問文の統語上の問題点については, D.T. Langendoen, *Essentials of English Grammar* のはじめの方にある調査など有益な記事があるが, ここでは付加疑問の片寄りを中心に, 意味上の問題をとりあげることにする。

付加疑問文は, 「平叙文+付加疑問」という形をもっているが, 平叙文を S, 付加疑問を T で示し, それぞれの否定形を not S, not T で示すと, その組合せには理論上次の 4 通りが考えられる。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{(A) 一致} \left\{ \begin{array}{l} \text{(a) S+not T} \\ \text{(b) not S+T} \end{array} \right. \\ \text{(B) 不一致} \left\{ \begin{array}{l} \text{(c) S+T} \\ \text{(d) not S+not T} \end{array} \right. \end{array} \right.$

(a) は, S と T との肯定, 否定の対極が逆になっている場合であり, (B) はそれが同じ場合である。(a), (b), (c) の存在については疑問の余地はないが, (d) の存在については, 学者の意見は一致していない。それがあるという人とならないという人とある。

所で § 4 の第 3 パラグラフで, 適切性の条件を述べた際, 平叙文の適切性の条件は, 話者がその発言を真と信じているということであるといったが, 付加疑問に平叙文形が含まれているということは, 肯定, 否定いずれにせよ, なんらかの片寄りをもつということを意味する。付加疑問は完全に中立的ではありえない。(a) の S+not T の not T は § 4 (b) で述べたように肯定的片寄りをもつ。一方 S の方は話者が S の真であることを信じているという適切性の条件を満たしているとすれば, S と

6) 有標, 無標については, 太田一棍田『文法論II』(大修館『英語学大系』第 4 巻), pp. 150-1.

not T のもつ片寄りは一一致する。全体として (a) は「S ですね」と念を押したり、同意を求めたりする意味になる。(b) の not S+T の T は片寄りがあるとすれば(そして付加疑問では完全に中立的ということはない)、否定的であるから、not S の否定と一致する。全体として「S ではないですね」と念を押したり、同意を求めたりする意味になる。(a) と (b) をあわせて (A) を「一致」とよぶのは、前半の S の肯定、否定と、後半の T のもつ片寄りとが一致するという意味である。(64) はそうした場合である。ただし音調によって、意味合いに微妙な差が出てくる。大ざっぱにいうと、(64) を a. のような下降調でいうと、自信をもって相手に念を押したり、同意を求めたりする意味合いになり、b. のように上昇調でいうと、それほど自信がなく、さぐりを入れるといった意味合いになってくる。

(64) John likes mushrooms, doesn't he ?

a. 
 b. 

(B) の場合は不一致の場合である。すなわち (c) では、S の肯定と T のもつ否定的片寄りとは相容れないし、(d) では not S という否定と not T のもつ肯定的片寄りとは相容れない。(c) のタイプの付加疑問は、S の部分が前に発言されたこと、もしくは発言されていないでもその場面で暗黙のうちに了解されていることをとりあげ、T の部分でその S に対して「そうかな」といった疑問、否定的コメントを提出するというのが基本的意味である。この疑問コメントの部分は否定的片寄りをもつのだが、文脈によってそれは、前の発言に対する単なる反応といった軽い意味合いから、皮肉、不信、挑戦的、戦闘的といった感情的色彩を帯びるものまで色々のケースが出てくる。(65) は、文脈によって「これがあなたの椅子ですか」といった軽い意味にもなれば、椅子のとりあいでもしていれば、きわめて戦闘的な発言にもなりうる。(66) は息子がいらざる口出しをしたのに親が腹を立てている場面に出て来ており、(67) について Carden は怒りとか挑戦とかいった気持ちを示すといい、! に見られるように、これを疑問とは見ていない。

(65) This is your seat, is it?

(66) Oh, you're there, are you? —R. Bolt, *Flowering Cherry* (Asahi Press, p. 8).

(67) The students seized the building, did they! we'll soon take care of that. (学生が建物を占拠したか、よし!) —G. Carden, *English quantifiers: Logical Structure and*

Linguistic Variation (Taishukan, 1973), p. 53, note 8.

先に (62), (63) のように主語に数量詞のつく否定疑問文で、not が文否定と解せられるか否かにより、文法性に差が出てくる問題にふれたが、(68), (69) の意味解釈にも、同じような原理が働いているようである。

(68) Many men don't like Mary, do they?

(69) Not many men like Mary, do they?

多くの話者にとって (68) は There are many men who don't like (i.e. dislike) Mary という意味で、否定辞は動詞句を否定し、文否定ではない。(69) の S は文否定で There aren't many men who like Mary という意味である。従って (68) は n't を含んでいるが、意味上は S+T の形であり、(69) は not S+T である。従って (69) は一致の場合で、「Mary が好きな男はそういませんね」と同意を求める意味になり、(68) は不一致の場合で「Mary が嫌いな男は多勢いるというが、そうかな」と否定的コメントを加える意味になる。

(70)–(73) の違いは rarely が前にあるか否かによって、文否定になるか、そうでないかの差が生ずることを示す。rarely は否定の意味を内蔵するが、(70) (71) のように rains の前に来る時は、文否定と解せられ、従って (b) タイプの付加疑問としては (70) はよいが、(71) はおかしい文になる。rarely が rains の後に行くと、これは文否定でないとして解せられ、従って (a) タイプの付加疑問としては (72) はよいが、(73) は逸脱文になる。

(70) It rarely rains, does it?

(71) ?? It rarely rains, doesn't it?

(72) It rains rarely, doesn't it?

(73) * It rains rarely, does it?

(74) の文は、一見 S+T という形の不一致のように見える。しかしこれは S+T に特有の意味はなく、むしろ (A) タイプの付加疑問の意味で「ヤンキーズは勝ちそうもないですね」といった意味である。

(74) I don't suppose the Yankees will win, will they?

R. Lakoff, "A syntactic argument for negative transportation," *CLS* 5 (1969), 140–47 は、(74) は (75) から、否定辞繰り上げ変形により生じたとする。(75) は not S+T というタイプの付加疑問で、これにより (74) の意味は説明できる。

(75) I suppose the Yankees won't win, will they?

Lakoff はこの I suppose を遂行的表現⁷⁾ と見なし、(A) タイプの付加疑問の片寄りを I suppose を深層に入

れることにより説明しようとしている。

(d) タイプの not S+not T について, R.A. Hudson, "The meaning of questions," *Language* 51. (1975), 1-31 は, (76) のような例をあげている。

(76) So caterpillars don't have legs, don't they?
(ちゃ毛虫には足がないというのかね(それは
どうかな)—Hudson, p. 25.

しかし(d)タイプの付加疑問文は非文であるとする人も
いる。P.W. Culicover, *Syntactic and Semantic Investigations* (MIT Ph. D dissertation, 1971) は, (d)タイプが
非文であるということをもふまえて, 付加疑問文を派生す
る統語規則を考えている。この点については, なお事実
の調査が必要である。

5. 応答のシステム

最後に yes, no の選択に関する応答のシステムについ
て一言しておこう。英語と日本語とで yes, no の選択
の原則が異なることはよく知られている。英語は, 答え
が肯定であるか, 否定であるかにより yes, no を選択
し, 日本語は, 問いに対し同意するか否かにより, はい
とイエエを選択する。英語のように, 文に否定辞がつけ
られるだけでなく, nothing, nobody, nowhere, no
books, のように名詞(句), 副詞(句)などにも否定辞
がつけられる言語と違って, 日本語は文否定のみしかな
い。Nobody came は, 日本語では「誰も来なかった」
と文否定になる。日本語のように文否定しかない言語
は, 応答の際の yes, no の選択は, 問いに対する同意
か, 不同意かという原則によりなされるといわれている。
これが本当なら面白い事実であるし, 何故そうなるのか
を考えて見る価値がある。それはさておき, yes, no の
選択の原則が異なるため, 日本人が英語を話す際, yes,
no を間違えることがよくある。Would you mind open-
ing the window? と聞いて, 相手が No とにこやかに
答えると, 一瞬ちぐはぐな感じがすることがよくある。

英語では, yes, no の選択が答えが肯定か否定かによ
りなされるといったが, 同意, 不同意ということは, 全
然関与しないかというところでもない。今肯定, 否定を
それぞれ p(positive), N(egative), 同意, 不同意をそれ
ぞれ A(greement), D(isagreement) であらわすと, そ
の組合せは(77)のように4通りになる。

(77) PA	NA	ND	PD
1	3	2	4

7) 遂行的分析, 遂行的表現については, 太田一梶田『文法論
II』(大修館「英語学大系」第4巻, 1974), pp. 620-25, 655 参
照。

この4通りの中で, PA(肯定で同意), ND(否定で不
同意)の場合が無標であり, NA(否定で同意), PD(肯
定で不同意)の場合が有標であるといえる。(有標, 無
標については, 注6)の文献参照)。難易度からいうと,
無標の方が有標より易しく, そして更に(77)に数字で
示したような難易度があり(数字の若い方が易しい),
子供が覚える順序もこの数字に示されたような順序で覚
えるといわれる。

(78) のような問い, すなわち一般的に S? とか S+
not T とかいう形の問いに対する答えは無標(PA, ND)
になる。しかし(79)のような問い, すなわち not S?
とか not S+T の答えは有標(NA, PD)になる。

(78) Q: Did he go?

He went, didn't he?

A: Yes, (he did).

No, (he didn't).

(79) Q: Didn't he go?

He didn't go, did he?

A: Yes, he did./He did $\left\{ \begin{matrix} \text{t}óo \\ \text{s}ó \end{matrix} \right\}$.

No, (he didn't).

(78) のような無標の答えの場合, he did や he
didn't を省いて, Yes, No だけでもよい。しかし(79)
のような有標の答えの場合, No の方は he didn't なし
でもよいが, Yes だけで, 不同意を示すのは不自然なの
で, この場合は he did を省くわけにはいかない。この
場合 Yes だけだと, うっかりすると he didn't go の
意味にとられる。更にはっきりさせるためには, He did
tóo とか He did só とかいう強調表現を用いる。この
ような so, too による強調表現の例は, 前号(28)の例
文にも見られる。そこでは, so と too がご丁寧にも並
んで用いられている。(28)の例文を再録する。

(28) A: Who's got the prettiest hands in the
world? Who's the sweetest girl in the
world?

B: I don't know. Who?

A: You don't know! You do so, too,
know.—Parker.

PD の場合が特殊であることは, ドイツ語ではこの場合
だけ doch, フランス語では si を用いるというようなこ
とにあらわれている。

要するに, 英語では, 肯定, 否定ということが同意,
不同意に優先するが, しかし後者も全然無関係ではな
く, 両者のからみ合いによる文法性の程度の階層が生ず
るということである。(東京教育大学教授)

バラッドの世界(その4)



—“The Wife of Usher’s Well” (チャイルド79番A) をめぐって—

HIRANO KEIICHI

平野 敬一

教室などで伝承バラッドの解説をするときよく使う作品にチャイルド79番の“*The Wife of Usher’s Well*” (アッシュャーズ・ウェルのおかみ) というのがある。これは作品としてもまとまりがよく、比較的分かりやすい上、バラッドというものが内蔵するさまざまな問題を説明するのに便利のように思われるからである。まず作品をあげてみよう。12連からなるチャイルド79番のA version である(出典はスコットの *The Minstrelsy of the Scottish Border* [1802])。

1. There lived a wife at Usher’s Well,
And a wealthy wife was she;
She had three stout and stalwart sons,
And sent them o’er the sea.
2. They hadna been a week from her,
A week but barely ane,
Whan word came to the carline wife
That her three sons were gane.
3. They hadna been a week from her,
A week but barely three,
Whan word came to the carline wife
That her sons she’d never see.
4. ‘I wish the wind may never cease,
Nor fashes in the flood,
Till my three sons come hame to me,
In earthly flesh and blood.’
5. It fell about the Martinmass,
When nights are lang and mirk,
The carlin wife’s three sons came hame,
And their hats were o’ the birk.
6. It neither grew in syke nor ditch,
Nor yet in ony sheugh;
But at the gates o’ Paradise,
That birk grew fair enugh.

- * * *
7. ‘Blow up the fire, my maidens,
Bring water from the well;
For a’ my house shall feast this night,
Since my three sons are well.’
 8. And she has made to them a bed,
She’s made it large and wide,
And she’s ta’en her mantle her about,
She sat down at the bed-side.
* * *
 9. Up then crew the red, red cock,
And up and crew the gray;
The eldest to the youngest said,
‘Tis time we were away.’
 10. The cock he hadna crawd but once,
And clappd his wings at a’,
When the youngest to the eldest said,
‘Brother, we must awa.’
 11. The cock doth craw, the day doth daw,
The channerin’ worm doth chide;
Gin we be mist out o’ our place,
A sair pain we maun bide.
 12. Fare ye weel, my mother dear!
Fareweel to barn and byre!
And fare ye weel, the bonny lass
That kindles my mother’s fire!’

(大意: 1. アッシュャーズ・ウェルという所に金持ちのおかみさんが住んでいたが、3人の丈夫な息子を海外へ出した。2. 船出してほんの1週間しか経たないうちに3人の息子が消息を絶ったという知らせが、年老いたおかみさんのもとへ届いた。/ 3. ほんの3週間しか経たないうちに3人の息子にもう(この世で)会えないという知らせがあった。/ 4. 「ああ、息子たちが血も肉もある生き身で帰ってこないのなら、風が永久に吹きつづけ、

海がいつまでも荒れるがよい」／5. 夜が長く暗くなる聖マルティヌス祭のころ、おかみさんの3人の息子は帰ってきたが、帽子はカバの枝で飾られていた。／6. そのカバは、そこらへんの小川や溝に、あるいは掘割りにあるような種類でなく、天国の入り口にみごとに生い繁るものだった。…／7. 「下女たちよ、火を起こせ！井戸から水を汲んできて！今夜は家中で宴会だ。息子どもが無事帰ってきたんだから。」／8. おかみは息子たちに大きく広いベッドを用意した。自分の身体をマントにくるみ（しばらく）ベッドの側に坐って（見守って）いた…／9. そのとき赤いおんどりが起きてときをつくった。灰色のおんどりも起きてときをつくった。いちばん上の兄がいちばん下の弟にいった。「もう立ち去るときだよ。」／10. おんどりは一度しかときをつくらず、まだ羽ばたきもしないのに弟は兄にいった。「兄さん、行かなくちゃ。」／11. おんどりが鳴き、もう夜明けですよ。うるさい虫どもが文句をいいますよ。もしぼくらが居場所を離れていることが分かったら、痛い目にあわなければなりません。／12. 母上よ、さらば！馬小屋と牛小屋よさらば！母の火をたいてくれる美しい娘よ、さらば！〕

こまかい字句の注釈をすればきりがなが、第4連の fashes に fishes (魚) という読み方もあるが、(cf. *The Oxford Book of Ballads*, p. 94), ここではそのままにして Scott や Child に従って fashes=troubles と解した。(Jean Ritchie が歌うこのバラッドのアメリカ版では troubles と言い換えられてある。) 参考のために、出てくる順にしたがって語句の注を挙げるなら hadna=had not; ane=one; Whan=When; carlin(e)=old woman; gane=gone; fashes=troubles; hame=home; lang=long; mirk=murky, dark; birk=birch; syke=brook; sheugh=ditch; eneugh=enough; a'=all; ta'en=taken; crew=crowed; crawd=crowed; at a'=at all; awa=(go) away; craw=crow; daw=dawn; channerin'=grumbling, fretting; Gin=If; mist=missed; sair=sore; maun=must; bide=bear, endure; weel=well ということになる。

実はこのバラッドにわたくしは思い出がある。十何年前、北米のある大学で、柄にもなく1年生の英語(いわゆる Freshman English)を受け持っていたとき、使用テキストの一つに L. Altenbernd と L.L. Lewis 共編の *Introduction to Literature: Poems* (MacMillan, 1963) というのがあった。教師はその本の中から任意の詩篇を選んで講義をすればいいのだが、だいたい複数の担当教官の間であるていどの進度協定のようなものができてい

た。とにかくテキストの中のバラッドをどうしても取り上げなければならぬ破目になった。日本の大学なら、いちおう英文和訳をすれば最低限の講釈をしたことになるのだろうが、英語しか解さない monolingual (?) な連中が相手ではその手も使えない。英語国の学生に英詩についてもっともらしい講釈をするのに、Brookes と Penn Warren 共著の *Understanding Poetry* (3rd ed., 1960) (以後 UP と略す) が種本としてたいへん便利であることは私の乏しい経験から知っていた。とりわけこの本は“The Wife of Usher's Well”についてかなり綿密な分析を数ページにわたって展開しているのだから、私は Freshman English のバラッド解説のときに、それを遠慮なく利用させてもらい、なんとか当面を糊塗したことをおぼえている。

ところで、その UP の中でこのバラッドはどう解説されているのだろうか。大ざっぱに言えば、こうである。まず UP の著者たちは、このバラッドの内容を次のようにパラフレーズする。すなわち “A woman loses her three sons at sea, and in her grief, expresses the wish that she may see them again in flesh and blood. The three sons return to the woman one night, but since they are only ghosts, they have to leave again before dawn.” (3人の息子を海で失った女が悲しんで生き身でもう一度息子たちに会いたいと願う。ある晩、息子たちは戻ってくるが、亡霊であるため、夜明け前に立ち去らなければならない) と。そこで曰く、この散文のパラフレーズはその明せきさと簡潔さでは原詩にまさるかもしれないが、読者に与える詩的感興ではあきらかに劣る。原詩が散文のパラフレーズにまさるゆえんは、どこにあるのだろうか、というところから著者たちは新批評一流の分析をはじめるのである。

まず、このバラッドは、いくつかの image を読者に与えて情景を鮮やかに浮かび上らせる。たとえば第7連と第8連は、母親の動きを示すことによって読者にその喜びを如実に伝える。けっして母親の喜びは大であったというふうの説明したり語ったりしていない。つまり具体を抽象より好む点、このバラッドはすぐれた詩作品と共通の特性を有する、という。

UP の著者たちによると、このバラッドのもう一つの特色は、その控えめな描写 (understatement) にあるという。夜明けになると、亡霊は恐怖にかられて立ち去るはずだが、ここでは淡々と「立ち去るときだよ」ですませている。ところが、こういう淡々とした控えめな表現がかえって恐怖や悲嘆の叫びよりも読者をとらえるのである。事態の進行にたいして詩人(バラッド作者)は、

いっさいコメントを下さない。顔をも出さない。作品に自らを語らしめているのである。

また、このバラッドは暗示 (suggestion) に富むという。最終連の別れのことは、いちばん下の弟の乙女にたいする慕情を暗示しているようだが、明示されていない。あるのは暗示だけ。しかし詩においては明示より暗示のほうが読者に力強く働きかけるのである。

さらに UP の著者たちは、この作品が suspense を使用しクライマックスへもっていく巧みさを説く。このバラッドのクライマックスとはなにか。それは「死の世界の恐怖と実人生の温かさの対照」にあるのだという。墓の中で死体にたかるうじ虫と地上の美しい乙女、農場が象徴する生の温かさと墓が現わす死の冷めたさ、地上の生命の躍動の合図となる鶏鳴が、実は死の世界への帰還の呼びかけとなっているコントラストの妙、などなど。

だいたい以上のような調子で UP の著者たちは、このバラッドの構成の巧みさを説くのに飽きることを知らないかのように見える。この分析の方法は、いうまでもなく新批評のそれである。私たちは、この分析を拝聴した上でもう一度このバラッドにあたってみると、なるほどと納得させられることが多い。その点、巧みな、要所をおさえた分析と評してさしつかえないと思う。ところが、私はこの分析がたいへん不満なのである。なるほどこのバラッドの読者が作品から受ける感興あるいは詩的效果を、厳密に作品だけから解明しようとすれば、こういう新批評的分析になるのだろうが、そういう自己規制というか枠のはめかた自体に問題があるように思われる。

とにかく私は、この UP の巧みな解説を借用して（もちろんそれだけではすまないが）このチャイルド79番のバラッドを教室で解説したことを覚えているが、なんとなく後味は白々しくて、よくなかった。その後味の悪さがどこから来るのかと考えてみたら、結局「伝承文化」という、文学を内に含みながらも、それをはるかに超える文脈 (context) を無視して、もっぱら「文学」あるいは新批評的作品批評という厳密かもしれないがきわめて狭い尺度だけでこのバラッドに應對しようとしたからである、ということがそのときは漠然と、その後はもっと明確な形で分かってきたのである。つまり “The Wife of Usher's Well” は文学作品として鑑賞することはもちろん可能であり、それに耐えるだけの構成や修辞のみごときを有してはいるが、文学作品という面は、このバラッドにとってはむしろ偶然的あるいは irrelevant な面であって、けっしてその本質ではないのである。バラッドとしての生命は、そういう文学性と直接かかわりはないのである、ということ。十何年前の私には、こういう

至極わかりきったことが、それほど明確な形で自覚されていなかったらしい。

もっと具体的に考えてみよう。かりに読者が “The Wife of Usher's Well” というバラッドにはじめて接したとしたら、どうということが気になるだろうか。読者の感興や関心と、上記の UP にみられるような接近法とが、うまく噛み合うだろうか。私は疑問だと思う。このバラッドでなにが気になるかという点、他人はいさ知らず私の場合だけに即していうなら、まず第一は、このバラッドの provenance つまり出自である。伝承バラッドである以上、作者が anonymous なのはやむをえないとしても、その生まれが気になるのである。いったい、このバラッドは、いつごろ発生したのだろうか。どの時代に伝承されていたのだろうか。文献記録はどこまで遡れるのだろうか、といったことが気になる。こういう作品外のことを徹底的に無視するのが新批評の行きかたであることは知っているが、UP の著者たちは、ほんとうにそういうことが気にならないのだろうか。また、そういう好奇心が作品鑑賞にとって、はたして irrelevant なものと言い切れるのだろうか。

私はたあいまいな伝承童謡や遊び唄に接しても、それがいつごろの発生かということがたえず気になる性なので、当然 “The Wife of Usher's Well” の出自が気になる。チャイルドの A version は前述したようにスコットの *Minstrelsy* (1802) から来ているが、もちろんスコットの創作でなく、スコットランドのウェストロージアン州 Kirkhill の近くに住んでいたある老婆からスコットが聞いて書きとったのだという。スコットの加筆や編集をあるていど想定しないわけにいかないが（特に第12連）、18世紀後半のスコットランドの田舎でこういう形のバラッドが実際に歌われていたことは、ほぼ間違いないさうである。その老婆に至るまでの口承の歴史があるはずだが、いまのところ手がかりとなる文献的資料が存在しない。チャイルドがかかっているもう一つの B version は

The hallow days of Yule are come,
The nights are lang an dark,
An in an came her ain twa sons
Wi' their hats made o' the bark.

（クリスマスの聖なる日々がやってきた。夜は長くて暗い。彼女の2人の息子は次々と入ってきたが、彼らの帽子はカバで作られていた。hallow=holy; lang=long; an=and; An in an=one by one; ain=own; wi'=with; bark=birch)

ではじまる6連である。これは、もともとキンロック写

本 (Kinloch MSS, ハーバード大学所蔵) に収録されている「オックスフォードの書記の2人の息子」(“The Clerk’s Twa Sons of Owsenford”) という全23連のパラッドの終結部をなしていたものである。ロバート・チェインバーズという研究家が最終6連を別個のパラッドとみなして分離したのをチャイルドがそのまま踏襲し、始めの17連を72番 A version, 終わりの6連を79番 B version, と2つのパラッドとしてかかげたのである。キンロック写本によるチャイルド79Bは、スコットによる79Aよりは荒削りで素朴な趣きがあり、伝承史的には、あるいはより古い形ということになるのかもしれないが、キンロック写本自体が1826年以降のものであるため、文献の上ではスコットの *Minstrelsy* の方が古いということになる。ただしキンロック写本にあるこのパラッドは、それを手書きしたジェームズ・チェインバーズの祖母がスコットランドのピーブルズ州出身の老女から70年前に聞いたものということだから、写本自体の年代より古いことはいうまでもない。いずれもその起源は香として分からないがチャイルドの79Aも79Bも、ともに18世紀のスコットランドに口承で伝わっていたものが19世紀初頭の文献に登場したという点で共通している。このようなパラッドの発生とか起源を UP の著者たちは、まったく気にしないのである。

また UP の著者たちは、このパラッドつまりチャイルド79Aの文学作品としての構成や技巧のみごとさに読者の注意を喚起するが、私はもっと素朴にこのパラッドの意味というか内容が気になるのである。

たとえば冒頭の Usher’s Well はたんなる架空の地名なのか、それともこの Well (井戸) になにかフォークロア的な意味があるのか。3人の兄弟が登場するが、3兄弟は「ヘンリー・マーティン」(チャイルド250番)にも例 (“In merry Scotland, in merry Scotland/There lived brothers three...”) があり、なにか意味があるのか (映画好きならここで「女ガンマン・皆殺しのメロディー」に登場する3兄弟を思い出すかもしれない)。聖マルティヌス祭 (11月11日) に死んだ息子たちが戻る意味はなにか。また息子たちの帽子のカバの枝と死界とのつながり、さらにそれとケルト神話のアヴァロン (Avalon) の島とのつながりはなにか (チャイルド69番や162番Bにおいてもカバの木は死と結びついている)。赤いおんどりと灰色おんどりとの関係はなにか。第11連でうじ虫が気になるのだから息子たちの死体は墓地を ‘our place’ としていることが判明するが靈魂の方は天国というふうに分離しているのだろうか。母の前に “in earthly flesh and blood” で現われたのだから、そのあたりの関係は

どうなるのだろうか。またこの第11連で言及している「ひどい苦痛」(sair pain) は具体的にどういうことか。母の家で働いている多くの女中 (maidens) たちの中のだだ1人 (bonny lass) だけに別れのことばをかけるのはなぜか、などなど疑問が付きにくい。UP の著者たちはこの最後の疑問にだけわずかに解答を与えてくれる (いちばん下の弟の生前の恋人だったと推定される、と) が、そうじてこのような作品の構成や形式と無関係な「文学以前」的な問いは眼中にないかのごとくである。そういう幼稚で素朴な疑問は、文学作品としてのこのパラッドと無縁というのであろうか。「文学作品としての」という限定を付するなら、あるいはそうかもしれない。しかし、前にもいったように、文学作品であるかないかということは、なんらパラッドの本質とかけあいがないのである。チャイルド79Aに限らず、どのパラッドも、たんなる文学作品にとどまりえないのである。

上に私が並べたような素朴な問いでも、それを他のパラッド (あるいは民謡や民話) と関連させて解明していくなら、伝承文化の中にほとんど無尽蔵に潜んでいるさまざまなイメージやパターン——人間の想像力の古層を形成しているもの——にぶつかるように思われるのだが、新批評は建てまえとして (英語では “by definition” とでもいうべきか)、そういう豊かさへ通じる道を自ら閉ざさるをえないのである。伝承文化を視野に入れることのできない文学批評は、注意をしないと観念の空転に終わることが多いのでないかという懸念がする。

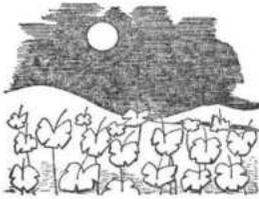
話をもとへ戻そう。幸いにしてパラッドの研究者たち (たとえば碩学 Gunmere からわが原一郎にいたるまで) は、新批評のような狭い窮屈な枠を自らにはめたりしない。彼らは、たとえばチャイルド79番に対してなら、死者に寄せる過度の悲嘆はけっして死者を喜ばせないというテーマの別のパラッド (チャイルド78番の「静かならざる墓」) と関連させて、パラッドにおける生者と死者との関係に照明を与えてくれるのである。死というものにとらえかた、死の相貌——おそらくパラッドの世界における最重要テーマとって過言でないと思われるが——それはまた機会を改めて考察してみることにしたい。

パラッドとして “The Wife of Usher’s Well” を考える場合、上に述べた出自 (起源) と意味 (内容) の問題の他にもう一つ、少なくとも私には大いに気になることがある。それはこのパラッドが現在どうなっているかということである。パラッドとして現在も伝承されているだろうか。伝承されているとしたら、どんな形で伝承されているのだろうか。私たちは、伝承パラッドがさまざま (p. 17 へつづく)

海外における日本人駐在員の 動態と英語ショック

KOIKE IKUO

小池 生夫



1. 本論の目的

国際交流がさかんになるにつれ、海外旅行者とともに海外駐在員や研究員、学生もどんどん増加している。駐在員というや貿易商社、銀行、外交官といったイメージが浮かぶが、なかには、こんな職業の人たちがと思われの人々もいる。現に、Washington, D. C. にも庭師、表具師、自動車修理工、歯科技工師などが職業人として活躍している。国際交流は量ばかりではない。質も多角化しているのである。

外務省や海外子女教育振興財団の調査によると、在外公館に在留届を出した人は約12万人、未届者を含めると20万を越すであろうと推定される。このうち、児童、生徒数は現在約15,000人と考えられており、昨年は約3,800人が帰国した。東京やその周辺部では、大体どこの小学校にも、海外から帰国した子供が何人かはいて、帰国子女対策をどうするかに関係者は頭を悩ませている。また、海外に旅行する人の数は年間200万人を越すという。戦後海外へ何らかの形で出かけた人々は、おそらく国民の1割をはるかに越すだろう。なにせ、お正月の「おせち料理」の材料は、その7割が海外からの輸入である。わが国は、海外諸国との交流なしには生きて行かれないのである。

このような現状にありながら、海外で仕事をする日本人が、異文化に接した時におこすカルチュア・ショックについては、まだまだ知られていないことが多い。戦後、多くの欧米に関する印象記が書かれているが、それは著者たちの強烈な個性を通しての一眼批評であって、複眼によるものではない。しかも、外国語教育に焦点をあてて書いたものは一つもないのである。本論文の基礎になったアンケートによる海外の特定地域での日本人集団の社会調査は、海外の異なる文化に接触して、多くの日本人がおこす、さまざまな文化衝突の一般的行動の型を、主に、言語、教育、生活、価値観の面から捉えようとしたものである。特に価値観は、日本人たちがアメリカ人をどう観察しているかを調べることによって、逆に日本

人が日本や日本人をどう考えるかという面にふれたものである。この調査結果と、私自身の生活体験にもとづく解釈が、只今、この瞬間にも海外に出て行く人々、また国際交流を振興させる上に必要な教育や政治に、いささかなりとも、貢献できれば本望である。アンケートの対象が、アメリカのWashington, D. C. とその周辺地域の日本人たちであるのは、私ども家族がしばらくこの地に住んでいたからである。このような調査は、本来ならば世界各国における多地点掘削方式によるのがより望ましいことは言うまでもないが、一地点を深く掘削することによって、日本人の異文化接触の型と問題点をとらえることも可能であろう。Washington, D. C. に滞在中の数年間に、得た友人たちは貴重な価値を持った人々ばかりで、この人々がこのアンケート調査にも協力をして下さったことを記し、あらためて感謝の意を表したい。

2. Washington, D. C. の日本人たち

今日、アメリカで日本人が多いところは、New York, Chicago, Los Angeles, San Francisco, Houston, Hawaii などである。Washington, D. C. の日本人は、この中にあって、他の日本人集団とは、少し色合いを異にしている様相がある。それは、この都市そのものの性格によるものといえよう。Washington, D. C. は、米國政治、行政の中心であり、世界の政治の中心である。したがって、わが国外交の直接の相手機関が多く、アメリカのみならず国際的規模での外交交渉と取材活動が活潑に行なわれている。一方では、Washington, D. C. は、陸、海、空軍、海兵隊の軍事基地の中心である。また、医学研究所など政府の研究諸機関も多い。大学は、中規模ながら、それぞれ伝統のある大学がいくつもある。人種的には、何といても黒人の街であり、ついで多国籍

* この論文は、1975年9月27日に ELEC 会館で開催された ELEC 同友会例会で口頭発表した「ワシントン, D. C. の日本人たち—その英語教育から見た文化衝突—」にもとづいて書いたものである。あらためて執筆の機会を本誌に与えられたことを感謝する。

人種の街である。このような都市に、駐在する日本人は約1,400である。New York やその他の都市にある日本人会のようなものがないのは、運営の資金源がないからで、日本大使館員、新聞記者団、商工会、国立医学研究所、国際金融機関などのグループにわかれた社会構造になっている。勿論、これは職業に関係してできた社会であり、それぞれの集団はその特色をもっている。このアンケートの対象になったのは、前記5つのグループを中心にした夫婦である。独身者も若干ふくまれている。1975年1月に300世帯に依頼し、無記名92通の返送をいただいた。それでは、この構成はどのようになっているか、この人々の既婚未婚の別、年齢、子供の年齢、居住地域分布、職業、学歴、滞在期間などを一括して示してみよう。なお、以下の表で、数字は回答欄記入者数を示す。

- (1) アンケート回収率：300通のうち92通 (30.7%)
- (2) 回答者：男性80 (52.6%)、女性74 (47.4%)、計154
- (3) 既婚・未婚の別：既婚者137 (90.1%)、未婚者11 (7.2%)、離婚者3 (2%)
- (4) 年齢：

	男性 (%)	女性 (%)	計 (%)
26—30歳	12 (15.0)	20 (27.0)	32 (20.8)
31—35	24 (30.0)	28 (37.8)	52 (33.8)
36—40	25 (31.3)	15 (20.3)	40 (26.0)
41—45	13 (16.3)	3 (4.1)	16 (10.4)
46—60	6 (7.5)	8 (10.8)	14 (9.1)
計	80	74	154

- (5) 子供の年齢：

	男性 (%)	女性 (%)	計 (%)
0—5歳	23 (38.7)	32 (55.2)	55 (47.4)
6—10	21 (36.2)	18 (31.0)	39 (33.6)
11—15	9 (15.5)	5 (8.6)	14 (12.1)
16—30	5 (8.5)	3 (5.1)	8 (6.9)
計	58	58	106

- (6) 居住地域：

	計	内 訳
Washington, D.C.	15 (16.3%)	N. W. 13 (14.1%) その他 2
Maryland 州	44 (47.8%)	Bethesda 11, Rockvill 17 Silver Spring 5, その他 11
Virginia 州	30 (32.6%)	Arlington 9, Alexandria 7 McLean 6, Fairfax 5, その他 3
その他	3 (3.3%)	

- (7) 職業：外交官等19(23.8%)、研究所員18(22.5%)、国際金融機関 14 (17.5%)、新聞記者 10 (12.5%)、大学院生・大学教員3 (3.8%)、その他 2 (2.5%)

- (8) 滞在期間：

	男子 (%)	女子 (%)	計 (%)
0—1年	35 (46.7)	26 (43.9)	61 (47.1)
1—2	16 (21.4)	15 (24.6)	31 (22.8)
2—3	9 (12.0)	8 (13.1)	17 (12.5)
それ以上	15 (20.0)	9 (14.7)	24 (17.6)
計	75	58	133

- (9) 滞在予定期間：

	男子 (%)	女子 (%)	計 (%)
0—1年	22 (38.6)	19 (42.2)	41 (40.2)
1—2	19 (23.4)	14 (31.1)	33 (32.4)
2—3	8 (14.0)	4 (8.9)	12 (9.7)
それ以上	8 (14.0)	8 (17.8)	16 (15.7)
計	57	45	102

以上の概要をまとめてみる。男性では30代の経験豊かなヴェテランで、体力、気力も旺盛な人が多いことは30代が60%を占めていることでもわかる。40代前半は、16%と少ないが、私の現地での観察では各機関の長をやっている人がこの年齢に圧倒的に多い。国内で言えば、企業や行政官庁の課長クラスである。それ以上の年齢では、駐米大使、公使、世界銀行、国際通貨基金等の理事職にあるほんの一握りの人々になる。女性の年齢の集中度は20代に高いのは、結婚による男女の年齢差がほぼ5才ぐらいであることを示している。子供の年齢が、ちょうどこれに相応しており、5才以下が50%近くを占める。ついで、小学校4年生以下が30%と多いが、それ以上は極端に減少する。これは対応する父母の年齢層がうすいことにもよるが、日本語学校の年齢層のうすさを考えてもわかる(私は日本語補習学校の運営委員をやっていた)ように、進学のために帰国させる場合が少なくないことにもよる。表にはあらわれないが、特に、男子においてこの傾向が著しいのである。居住地域から推測できることは、日本人たちが、アメリカの白人社会の中で生活するだけの社会的地位と収入を与えられていることがいえる。今日、Washington Metropolitan Area という首都圏は、人口約300万人以上で、これが Washington, D. C. に100万、Virginia 州と Maryland 州に100万づつにわかれており、白人は D. C. の North West Section と

郊外地区に住みつくとというドーナツ現象を呈しているのは、他のアメリカ大都市と共通現象になっている。D. C. 内部は80%になんなんとする黒人によって占められ、市長も黒人である。さて、日本人は、30歳台では、アパート住いが圧倒的に多いが、40歳台以上では、独立家屋を借りて住むようになってきている。職業は多様ではあるが、やはり Washington, D. C. の特色があらわれ、日本大使館勤務の公務員、国立医学研究所 (N I H) の研究員、新聞記者、銀行、商社員、国際金融機関への出向員が目立つ存在である。New York, その他の大都市に多い、企業からの派遣者という性格が、平均的日本人社会像だとすれば、むしろ特殊社会と言えよう。学歴も、これを反映して高学歴である。東大卒がもっとも多く、20%以上を占め、早稲田、慶応などの私立一流大学の卒業生と他の国立一流大学の卒業生がほとんどである。米国の大学の卒業生も多く、また大学院卒業生も、珍しくない。私が直接受けた印象では、収入面では中流階級であるが、頭脳や覇気において、将来、または現在、日本をリードして行くという自信がある人々が多い。女性は、家庭の主婦が90%で圧倒的に多く、男性ほどの高学歴ではないが、それでも私立大学卒が90%を占めている。滞在期間は、短い人は半年、長い人は13年もいるという具合であるが、平均3年から4年である。すでに滞在した期間が3年というのが83%であり、予定が72%であるので、むしろ、4年間が多いだろう。やはり、腰を落ちつけて一人前の仕事ができるには、この位の年月が必要である。

以上、大変あられずながら、D. C. の日本人社会の鳥瞰図を示した。

3. 日本人たちの英語力

Washington, D. C. にいる日本人たちにとって、最大の問題点は英語力である。人々はこの能力不足が生活をどれほど阻害しているかを骨身にしみて感じている。以下は、人々の英語力の自己評価を示したものである。まず過去の英語歴から見てみよう。

3.1 英語歴

(1) 英語学習歴：

	男性 (%)	女性 (%)	計 (%)
中学・高校まで英語を勉強	8 (13.1)	25 (42.4)	33 (27.5)
大学の一般教養として勉強	45 (73.8)	19 (32.2)	64 (53.3)
英語重視の大学専門課程を終了	8 (13.1)	15 (25.4)	23 (19.2)
計	61	59	120

(2) 授業方式：

	男性 (%)	女性 (%)	計 (%)
訳読中心	53 (84.1)	46 (86.8)	99 (85.3)
訳読の他に Speaking, Hearing もやる	10 (15.9)	7 (13.2)	17 (14.7)
計	63	53	116

(3) 職業との関係：

	男性 (%)	女性 (%)	計 (%)
職業上英語を使うことが多かった	36 (64.3)	13 (50)	49 (59.8)
職場では英語と関係がなかった	20 (35.7)	13 (50)	33 (40.2)
計	56	26	82

この他の調査項目では、学校卒業後特別に英語を勉強した人は男性16人 (20.3%)、女性8人 (9.1%) であり、また1年以上の留学経験者は男性25人 (31.6%)、女性8人 (9.1%)、計33人 (19.8%) である。

さて、以上の英語歴から言えることは、これらの人々が受けた英語教育は、訳読式英語が圧倒的で、日本の英語教育の実態をそのまま反映していることである。Washington, D. C. に行く前に、男性の場合は、英語と関係した職業上の仕事をやったり、自分で英語の勉強をした、留学したという経験者がやはり多いこともいえる。これは、聞いてみると、フルブライト留学生、官費留学生、会社の派遣生などが多く、それ自体、きびしい選択の過程を通過している努力型が多い。Hearing, Speaking 軽視の英語教育の最大の被害者は、家庭の主婦であろう。つまり、夫の任務の関係上、一緒に来たが、英語による伝達ができないために非常な苦勞をしている人々が多い。

3.2 Speaking, Hearing 能力の自己評価

Speaking, Hearing の能力を、第1段階、つまり、買物や旅行ができるレベル、第2段階、一般的なおしゃべりができる、第3段階、専門的な討論ができるという3つのレベルに分けて質問を試みた。第1段階では、もっとも簡単な表現で、what, where, who, などと言うだけでも何とか必要最小限なことは言えるレベルである。このレベルは、むしろ Hearing の方が苦勞するだろう。variation が多いからである。第2段階では、とりとめもない話を交わす過程で、会話が途切れたり、聞き役一方にまわったりするか、しないかが問題点で、これがコミュニケーションを成り立たせる力があるかないかをみる境目になると思われる。第3段階は、職業上、どうしても欠かせられない重要な能力で、これに問題があると、職業人としては役に立たなくなる。さて、このような背景で出された質問項目への反応は次のような結果であった。

(1) 買物、旅行でつかう簡単な表現についての能力
(各項目、上段の数字(および%)は D. C. に行った当初の能力、下段は現在の能力を示す)

Speaking の能力	男性 (%)	女性 (%)
全然できない	0	4 (7.5)→ 0 (0)
単語を断片的に結びあわせて、 かろうじてやれる	6 (10.5)→ 3 (3.7)	18 (33.9)→ 13 (20.3)
簡単な文が言える	13 (22.9)→ 7 (8.6)	8 (15.1)→ 25 (39.0)
一応まとまったことが文連続で 伝えられる	21 (36.8)→ 30 (37.0)	14 (26.4)→ 14 (21.9)
日本語なみにできる	15 (26.3)→ 41 (50.1)	14 (26.4)→ 22 (34.4)
計	55 81	52 64

この表から言えることは、男性も女性も、D. C. 行ってから、英語能力の向上がはっきり示されること、日本語なみに言えるレベルに達する能力は男性において特に著しい。これは、過去の基礎がどれだけのレベルに達していたかに関係があるだろう。女性で能力向上が著しいのは、簡単な文が言えるようになるレベルである。これは、学校時代に英語をやっても、それから数年または10年以上英語から離れた生活をしていたので、ほとんど英語を忘れており、その回復は容易でないことを物語っている。総体的に言って、この程度の英語が不自由では、アメリカ社会に入りこめないことを如実に物語っていることになる。まことに残念ながら、会話能力がつくということは、過去にこの方面の訓練がない場合は、年齢によって差はあるもののあまり見込みがないと思う。

(上段の数字(および%)は D. C. に行った当初の能力、下段は現在の能力を示す)

Hearing の能力	男性 (%)	女性 (%)
相手のいうことが全然わからない	3 (6.0)→ 0	3 (6.0)→ 0
相手のいう英語の中のいくつかの 単語から断片的にわかる。それによって推測する	8 (16.0)→ 2 (2.7)	19 (41.3)→ 18 (25.0)
半分は少なくともわかる	13 (26.0)→ 12 (16.0)	6 (13.0)→ 18 (25.0)
大体わかる	12 (24.0)→ 34 (45.3)	12 (26.1)→ 18 (25.0)
日本語と同じようにわかる	0 → 27 (36.0)	0 → 18 (25.0)
計	50 75	46 72

Hearing の能力も speaking の能力と同じように能力の向上が認められる。女性よりも男性の能力の向上が著しいのは、やはり基礎力が充実していることと、仕事の性質上、どうしても理解できなければならないという切迫感に日々追いかけるからである。女性は、家庭内

にいて、英語にさらされることが少なくともすむと会話にそれほど骨身をけずる思いをしないですむことといえよう。しかし、全般的に能力の向上が Speaking よりあるのは、英語にさらされることが Hearing の方に多いことが理由だろう。さて第2段階はどうであろうか。

(2) 日常のことについて取りとめもない会話を交わしつづけていく能力

Speaking, Hearing の能力	男性 (%)	女性 (%)
挨拶をかわしただけで次の話題につづかない、わからなくなる	1 (1.3)	4 (5.4)
相手のいうことは時々わかる。話題の方向がわからないので受け答えできない	2 (2.6)	16 (21.6)
話題の方向はわかるし、相手のいうことについていける。しかし、うまく話せないので聞き役にまわる。短いことならまともにいえる	22 (28.9)	30 (40.5)
相手のいうことは大体わかる。自分のいたいことも大体いえる。大して不便はない	36 (47.4)	12 (16.2)
アメリカ人並みにやれる	15 (19.7)	12 (16.2)
計	76	74

日常会話では、言葉をつないで会話を成り立たせる能力があるか否かということが、会話能力があるか否かの別れ道であると考えられる。これには、こちらの話に内容がなければならぬことは大事な点だが、相手の話の方向がわかる、あるいは予想がつく能力が必要である。いわゆる伝達言語能力の養成である。表では、大体このレベルに達している人が、男性では約67%、女性では約32%いる。相手の話す方向はわかるが、話せない女性が40%、それ以下が20%である。男性では30%が、話しの方向はわかるが、自分から受け答えできるほどの Speaking 能力は不十分であると答えている。総体的に言って、男女共に、英語による言語伝達能力の乏しさをここでも示している。第3段階ではどうであろうか。

(3) 専門の分野についてアメリカ人と論じあう能力

Speaking, Hearing	男性 (%)	女性 (%)
全然だめ	0	9 (15.8)
相手のいうことを少し理解できるが、自分の意見をいうのに相当苦勞するので、つい聞き役にまわる	6 (7.5)	17 (29.8)
相手のいうことは半分はわかるし、思うことの半分ぐらいは言えるので、討論をつなげることがやっとなできる	17 (21.3)	15 (26.3)
積極的に意見の交換ができる。相手のいうことはほとんどわかるし、自分も思うことをほとんどいえる	42 (52.5)	10 (17.5)
アメリカ人並みにやれる	15 (18.8)	6 (10.5)
計	80	57

この結果でおもしろいことは、専門のことに関する話し合いがかなりできる男性が71.3%あり、一般的な日常会話力を4%上まわっていることである。しかも、これに続く中程度のレベルで何とか少しはできるという人も21%ある。これは、一般会話はできて、専門の討議はかなりむずかしいので、全体のパーセントはおちるだろうという推測の逆を行くものである。しかし、これが実際の姿であることは、ある程度予想がついていた。男性は、専門家として D.C. に来ており、それに要する英語力を見込まれて来ている人が多い。一般的に英語をどんな話題でも縦横にこなすことができる人々は多くないし、また、激務の中ではそれだけの英語力をつける余裕がないのが実情ではなからうか。これにくらべて、女性は、特に専門的な知識や英語力を必要とされるよりも、女性向きの広く浅い知識や英語表現を必要とするのである。実際にホームパーティの時のホステスぶりを見ても、それが必要なのである。したがって、女性の方が、むしろよいことは、数字にもあらわれている。つまり、女性では、専門の話は28%の人々が相当程度できるのであるが、一般のおしゃべりでは32%以上の人々ができるのである。しかし一方、専門の話はできない人々は45%に達するのは、女性間にも、家庭の主婦ながら、語学に秀でた人々と、そうでない人々の2つのグループが、かなりはっきりとできることをあらわしている。また、男性で専門の話ができない人々が7.5%いることは問題であろう。

3.3 Reading と Writing の能力の自己評価

(1) Reading の能力：

	男性 (%)	女性 (%)
全然英語が読めない	0	7 (10.0)
とびとびに単語を拾って読んで内容が少しわかる。辞書を片手に読めば大体わかる	4 (5.3)	30 (42.9)
文のはじめから読み下していった内容が大体わかる。辞書はたしかめる程度に利用する	21 (27.6)	18 (25.7)
辞書はほとんどひらかない。文の頭から読み下して理解できる。スピードは、アメリカ人ほどではないが、かなりある	33 (43.4)	13 (18.6)
アメリカ人並みに読め、スピードもある	18 (23.7)	2 (2.9)
計	76	70

Speaking, Hearing の能力に比べて、Reading の能力は相当あることは、この表からうかがうことができる。ともかく、読み下して理解できる人は男性では95%近くに達しているし、女性も47.2%いる。しかも、辞書はほとんど引く必要がない人が70%近い。これは、当然スピー

ードもあることになる。Reading の能力が、女性は極端に落ちるようであるが、やはり、職業についていないで、出る機会が少ない主婦が多いからであろう。先ほどの専門に関する討論ができるか否かの欄でもふれたが、Reading でも、予備知識があって読む場合と、そうでない場合は、Reading のスピードや理解度に差があり、繰り返して読む必要回数も増えるだろう。

(2) Writing の能力：

	男性 (%)	女性 (%)
ほとんどだめ	1 (1.3)	6 (6.8)
やさしい単語で置き手紙、メモなど簡単な文を多少書くことができるが、用法や文法的にみて、正誤が判断できない。	5 (6.4)	30 (44.1)
自分の意志を簡単にすらすらと書くことができる。スピードはおそい	18 (23.1)	19 (27.9)
一応の文がほぼ完全に見える。スピードもある。しかし、高度の論文はずいぶん骨が折れる	44 (56.4)	12 (17.6)
アメリカ人並み	10 (12.8)	1 (1.3)
計	78	68

Writing も、この傾向はつづく。92%の男性は能力を持っているが、女性は低い。また Reading の能力と Writing の能力はほとんど同じパーセントを示している。いわゆる日本人の英語力が知的能力として、Reading, Writing にすぐれ、Hearing, Speaking で極端に劣っていることは、エリートの集団である D.C. の日本人たちでもかなり明らかな現象であると言えよう。

4. 英語教育への批判と期待

さて、人々は、自らの体験をもとにして、現在の英語教育をどのように評価し、また、何を希望しているだろうか。英語教育をふりかえってみて、次の点に賛成かどうかを問う形式のアンケートに人々はこのような反応を示している。

	男性 (%)	女性 (%)	計 (%)
英語教育はほとんど役に立たなかった	5 (6.3)	13 (18.6)	18 (12.0)
基礎力をつけるのに役立った	28 (35.0)	29 (41.4)	57 (38.0)
読み、書く力は十分ではないが役立った	40 (50.0)	32 (45.7)	72 (48.0)
聞き、話す力はまったくだめだった	36 (45.0)	31 (44.3)	67 (44.7)
アメリカ人、アメリカ文化について教えられた記憶なし	16 (20.0)	10 (14.3)	26 (17.3)
その他	4 (5.0)	2 (2.9)	6 (4.0)
計	80	70	150

それによると、英語教育は役に立たなかったわけでは決してないが、不十分で、特に、聞き話す能力が極端に役立たないという印象を人々は持っている。また、アメリカ文化の面にまで気を配っている英語教育はとても少ないという印象である。読み、書く能力の養成は不十分ながら、多少の支持はあると思われる。中・高時代にHearing, Speakingの機会が少ないのは、その後の英語力の養成に大きなマイナスの影響を及ぼした、とか、授業中に、自由に英語をしゃべる時間を取り入れてはどうかという提案までいただいたし、一部大学の徹底した英語教育に支持が述べられたりした。さて、あるべき英語教育の姿に対して、次のような意見が述べられている。

まず、もっとも大きな批判は、読み、書き中心の英語教育への支持は回答者149名(男性79, 女性70)中わずか3.4%にすぎないことにかがわれる。4技能を平均的に教えよ(61.7%), 西欧文化の教養として、実用面よりも教養面に中心を置くべきであるという意見への支持はわずか4%にすぎなく、教養面と実用面をあわせて教えよ(54.4%), コミュニケーションの道具として役立つように(53%), という意見が大勢を占めているが、読み、書きよりも聞き話す力を重点的にするのは20%にとどまっている。つまり、コミュニケーションとしての英語力の養成に比重がかかっており、それは、4技能を円満に発達させたものがよいという方向になるだろう。いつから英語教育をはじめめるかについては、小学校からやりたい子供にはやらせよというのが女性で58.6%あ

り、男性の38%を20%も上まわっているのが目立つ。中学では必修(54.4%), 高校でも必修(47.7%)という意見が多く、中学から選択で教えよ全員にやらせても効果はうすいとする人々はわずか6.7%である。これは、大学入試から英語をはずし、4つの技能を目的に応じ自由にのぼし、英語をやりたくない学生にはやらせる必要はないとする意見への支持が16.8%であることと通じるところがある。この傾向は、国民教育として青少年に英語を必修として与えるべきであるばかりでなく、小学校からやりたい子供にはやらせよという、英語教育を、今以上に時間数を英語にさき、均斉のとれた英語を与えるべきだという、英語環境にいる親たちの叫びともとれる意見である。個人的な意見を書いてくれた人々はすこぶる多く、紹介しきれないが、その問題点をしばってみると、大学入試英語の弊害、文法と訳ばかりという傾向はぜひ廃止し、ことばはまず話す、聞くところからはじめよ、生徒の自発的な発言力、創造力を身につけさせるために、できるだけ英語でdiscussionをさせよ、高校、大学では、実用面を忘れた英語教育の愚を修正してほしい、基礎力があれば、話すことは割合はよくなる、英語独特の文化、発想法を理解させよ、学校では教養面に重点を置き、実用面は学校外でやらせればよいという意見もある。そして、多かった意見は、教員の話し、聞く能力を抜本的に向上させよ、教員の再訓練が英語教育改革の根本であるということであった。

(慶応義塾大学助教授)

(p. 54 よりつづき)

力の涵養に結びつけていくべきかについて、懇切な説明が付されている。ここには、かつてNHK国際部で自ら海外放送にたずさわり、いまでは有数の英語教育者として令名の高い著者、長谷川潔教授の理論と実際とがほどよくないまぜにされ、単なるハウツーの域を超えた秀れた啓蒙書の姿がある。若い衆にはもとより、彼らを指導する立場にある英語教育者に広く読まれることを期待する。

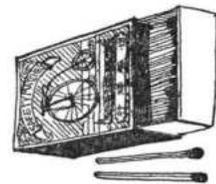
そういう実利的なことをはなれ、ぼくがとくに心惹かれるのは、著者の原体験が主題に則して淡々と語られているからでもある。著者は第二次大戦末期、学徒動員で勤労中に艦

砲射撃に遭逢、右眼失明という重傷を負い、しばらくは目からの勉強を断念されなければならなかった。そのときに耳から英語を学ぶことを懲り、実際の手ほどきをしてくれたのが、終戦時、英語アナウンサーとして活躍、われわれ戦中派には親しい新野寛氏だった、というのである。その悲痛な体験が今日の著者をつくったといっても、決して過言ではない。であるとすれば、本書には著者が若き日の苦悩を昇華して今日に至った、いわば心の遍歴が結晶している、ともいえるであろう。かいなでのハウツーものにもない真摯さが全巻を貫いているのも当然である。利久が茶道の心得を説いて、すきと器用

と功積むの三位一体を推したと述べ、それを英語修業にあてはめておられるのも奥ゆかしい。そういえば著者は、茶道にかかわりの深い華道のたしなみが、尋常一様でないといっている。

(国際コミュニケーションズ刊、新書版、248頁、¥630)

(国際商科大学教授 國弘正雄)





英語の諺(その2)

—女性について—

TODA YUTAKA

戸田 豊

子供についての諺を見てくると、その次に扱うべきものは女性であるような気がする。諺の世界は概して言えば男性上位の世界であり、男性の目を通して見た世界である。いかながら男性優位の世界が長く続いてきた証左とも言えるのである。ウーマン・リップを唱導実践されている女性は柳眉をさかだててお怒りになるかもしれないが、女性は男性とは異なった特性をお持ちのようであり、それが諺に現われていると言える。

Handsome is that handsome does.

まず第一に美について触れなければいけない。Beauty is in the eye of the beholder. (美は見つめる人の目の中にある) は一部の女性をほっとさせてくれる。美はそれ自体で存在するものではなく、それを美しいとみなす人の意識の中に存在するのである。美しさというものは、きわめて主観的判断によってその存在が決定する。美貌は見る者次第と言える。このように美しさも好きずきによって決まるということになると思い起こされるのは「たで食う虫も好きずき」という日本の諺である。英語では、Every man to his taste. (人おのおの好みあり)、There is no accounting for tastes. (人の好き嫌いはわけのわからぬもの)、Tastes differ. (人それぞれに好みが違う) という。Beauty is but skin-deep. (美貌はただ皮一重) は、外面的な美しさよりも内面的な心の美しさを求めよ、外面の美しさよりは人柄を重んじよ、人を外観だけで判断してはいけない、と教えている。天は二物を与えずと言われる。Beauty and folly are often companions. (美と愚は連れ立っていることが多い) は、美人の中には男にちやほやされ過ぎてばかげた振舞いをする者がいることに対する警告である。Beauty and folly go together. (美と愚は相伴う) とか Beauty [Fairness] and chastity seldom accord. (美と操はめったに一致しない) という諺も同じ趣旨を表わしている。前者は1532年、後者は1400年の用例があることから察しても美貌と愚行は古くから人目に強く印象づけられていたものと思われる。A fair face is half a portion. (美貌は持参金の半分に匹敵する)、A fair face is half

a fortune. (器量よしは財産の半分の値打がある)、Her face is her fortune. (美貌があつた女の身上) といった諺を見ると、美しく生まれるということがいかに女性にとって死活の問題であるかがわかるし、Every woman would rather be beautiful than good. (女性はだれしも人柄の良さよりも容貌の美しさをねがう) と言われる女性の気持もわからないわけではない。また、逆に考えると、そのようにしか女性を見れない男性が多いことを女性美貌至上主義を表わすこれらの諺が示してくれていると言える。男性は、A man is as old as he feels, and a woman as old as she looks. (男は気持ちようで年が決まり、女は器量のありようで年が決まる) と言って涼しい顔をしていられる。この諺は、男の年は気持次第、女の年は器量次第、つまり男は丈夫であるかぎり年は問題ではなく、女は容色で判断されがちなので年よりも器量が大事であるということを表わしている。「美貌は果報の基」と日本でも言うが、美に飢えている女性と美を貪欲に追いかける男性が多いことのなせるわざである。

The fairest rose is at last withered. (もっとも美しいばらでもついには衰えしなびる) は「花の色は移りにけりないたずらにわが身世にふるながめせしまに」と詠んだ小野小町の心境を表わし、A fair face foul heart. (美貌には邪心)、Fair without but foul within. (外美しく内汚し) は「顔に似ぬ心」、「外面如菩薩、内心如夜叉」を思い起こさせる。色香はいつしか衰えるし、外見の美は内面の美、清純、正直、貞操とは一致しがたい。とすれば、救いはやはり Handsome is that handsome does. (行いの立派な人が見目もうるわしい) という諺である。Dr. Johnson の手引きで陽の目を見た小説に Oliver Goldsmith (1728-74) の *The Vicar of Wakefield* がある。この作品の第1章にこの諺はでてくる。よくできた娘に恵まれた母親のことばである。“Ay, neighbour,” she would answer, “they are as Heaven made them, handsome enough, if they be good enough; for handsome is that handsome does.” (神様がお創りになったそのままです。心がらさえよければ姿も美しいの

です、「行いよければ姿またうるわし」ですから。) この諺の意味は, Handsome is one who does handsomely. で, 2 番目の handsome は副詞的に用いられて generously, nobly の意味である。「見目より心」の英国版である。しかし, 1796年の用例の中に a proverb frequently cited by ugly women (醜い女がよく引用する諺) という但し書きが見られるのはなんともやりきれない思いがする。

Cherchez la femme.

すでに述べたことであるが, 諺の中で女性に関するものは anti-feminism で貫かれていて, これでもかこれでもかと女性の本態を暴露しようとする。美しくなろうとすればどうしても外を飾って自己満足もし, 異性の気も引こうとする。As good [well] be out of the world as out of the fashion./It is better to be out of the world than out of the fashion./Better be out of the world than out of the fashion./Better be dead as out of fashion. (流行におくれるくらいなら死んだほうがましだ) は見栄を張る女や軽薄なしゃれ男が言ったり, 言われたりする諺である。「犯罪の陰に女あり」に相当することばは Cherchez la femme. (女を探せ) である。これは見てわかるとおりフランス語であるが, このままの形で英語の世界に入っている。Chercher la femme. とも言い, 英語では seek the woman, look for the woman, find the woman にあたる。フランスの小説家, 劇作家 Alexandre Dumas père (1802—70) が *Les Mohicans de Paris* (1864) の中で初めて用いた catchphrase である。事件やミステリーの鍵を握っているのは女だから問題解明にはその女を探し出す必要があるということである。女が男を利用しているのか, 男が女を利用しているのかは事件によって異なるであろうが, いずれにしても女性が世の中の大事件の裏方の役を果たしていることは毎日の三面記事から容易に首肯できる。女性の饒舌は定評があり, 井戸端会議から近くは踊り場会議へと情報交換, 他人批判, 自己宣伝にかしましい。A woman's tongue is the last thing about her that dies. (女の舌はその身につけたものでは最後に息を引き取るものである) はまったく辛辣この上もない諺である。1612年の用例に, When a man dies, the last thing that moves is his heart; in a woman her tongue. (男が死ぬ時に最後に動いているのは心臓である, 女にあってはその舌である) というのがある。かくほどさように饒舌は女性の属性であろうかと思ひ, A woman's work is never done. (女の仕事はいつまでも終わらな

い) という諺を見る。むべなるかな, これまたおしゃべりが災いして仕事はかどらないのだろうと予断を下してしまうといけな。たしかにそういう意味もないわけではないが, この諺の本来の意味は, 男の仕事はふつう日没で終わるが, 女の仕事はどんなに一生懸命やってもこれで終わりということはないということである。このように, いつ果てるともしれない女の仕事のお蔭で男も子供も生きていられる。もって瞑すべし。

A good wife is a good prize.

ここで家庭の中での女性, 夫に対する妻としての女性を眺めてみたい。Men make houses, women make homes. (男は家屋をつくり女は家庭をつくる) という諺は, house と home の根本的な違いを教えてくれる。夫は家を買うなり建てるなりして外形をととのえる。しかしそれが本当に家庭と言えるようにするには妻がそこを明るい居心地のよいものにする必要がある。英文法で no more...than...の構文の用例として, A home without love is no more a home than a body without a sound mind is a man. (健全な精神を持たない身体が人間でないと同じように愛のない家庭は家庭ではない) という文がよく引用される。このように家庭を家庭たらしめ, 家庭を愛情の息づく所にするのが妻である。Home is where the heart is. (家庭とは愛情のあるところ) は, 人にとって家庭とは, 愛しい人のいる所, もっとも幸福感を味わえる所という意味である。A cheerful wife is the joy of life. (明るい妻は人生の喜び) は, 快活な妻が夫や子供たちを明るくさせ一家幸福の元になることを表わしている。夫の不運, 不遇に際会しても, 子供の事故, 病気に会っても, 明るく機敏に振舞い, 苦境を克服できるようにするのは妻である。妻は縁の下の力持ちである。まさに A good wife is a good prize. (良妻はりっぱな宝) である。いかなる高価なものをもってしても代えることのできない存在, それが良き妻である。妻として母としての女性の力は偉大である。The way to a man's [an Englishman's] heart is through his stomach. (男の心に至る道は胃を通っている) という諺がある。これは, 夫は食事に満足していれば常に妻を大事にするものだという妻への忠言である。家庭料理は夫や子供たちを妻や母に引きつけるものである。料理の書物が売れ, 料理学校, 料理講座が繁栄するのも, 近年女性の余暇が増したからなどと皮相的にとらえられるものではない。もっと深い所にある女性本能が夫と子供を満足させようと願っているのである。スープの味は妻であり母である女性の作り出すものである。どの人間も

女性を母としてこの世に生を享ける。そしてこの母に養育されて成人する。The hand that rocks the cradle rules the world./She who rocks the cradle rules the world. (ゆりかごをゆする者が世界を支配する)は、母親の子に与える偉大な影響力を示している。子供の養育にあたる世の母親たちが次の新しい世代の人間をつくらせているのである。母の膝下で学んだことは子にとって未来永劫に忘れ去ることのできないものであろう。

It is a sad house where the hen crows louder than the cock.

夫や子供にとって妻となり母となる女性の力の大きいことを眺めてみたのであるが、その大きな力が批難される方向に発展している場合も公平に見ておく必要がある。女性は良くてあたり前、悪ければ諺によって罵倒されるという気の毒な存在である。

「はじめは処女の如く、終わりは脱兎の如し」ということばが日本にあるが、結婚前の女性は静かで、おっとりとして、素直で従順、物腰やわらかく、しとやかというのがふつうである。Maidens should be meek till they are married. (娘は結婚するまでは従順にしているべきだ)は、その裏側の意味として、おとなしくしているのも嫁ぐまで、どうせ結婚すればもっと勝手気ままに振舞えるから、ということである。結婚して、夫がおとなしい男であれば、The calmest husbands make the stormiest wives. (もっともおとなしい夫がもっとも荒々しい妻をつくる)となるし、夫がきかない男であればそれに比例して妻はきかなくなるのではなからうか。

「似た者夫婦」ということばがある。どちらにしても女性は結婚によって強くなる。The grey mare is the better horse. (灰色の雌馬のほうが役に立つ)は、フランダースの grey mare はイギリスの最良の馬車馬よりもすぐれていると考えられたことに由来する。その意味は、妻が夫を支配する「かかあ天下」のことである。「亭主関白」の諺はないが、「かかあ天下」の表現は多い。亭主を尻に敷く女房のことを、この諺から grey mare と言い、she wears the breeches. (女が半ずぼんをはいている)とも言う。「かかあ天下」のことを petticoat government と言う。女房の尻に敷かれる男は henpecked husband である。Who holds the purse rules the house. (財布を握る者が家を支配する)は、女房にだけあてはまるわけではないが、ここでは財布の主は女で、それが家の主ということになる。It is a sad house where the hen crows louder than the cock. (めんどりがおんどりより音高くときをつくる家は不幸な家であ

る)もまた「かかあ天下」の家庭の不幸を表わし、そういう家では、When the wife commands, thunderbolts fly about the house. (妻が命令する時雷鳴が家のまわりをとびかう)とさえ言われる。漢語の世界にも、「牝鶏(ひんけい)晨(あした)をつくる」ということばがあって、妻が権力をふるうのは災いの基であるということのたとえに用いられる。また、「牝鶏(ひんけい)雄鳴(ゆうめい)すれば主榮えず」というのもあって、婦人が権力を専らにすれば主君は榮えないことを表わしている。要するに、A whistling woman and a crowing hen are neither fit for God nor men. (甲高くわめく女とときをつくるめんどりは神にも男たちにも適わしくない)ということになる。結果的に妻が夫を支配することになって、An obedient wife commands her husband. (従順な妻は夫に命令を下す)ははた目には見苦しくない。この諺の意味は、何事も夫にまかせ、またまかせるように装っている妻は、力づくで夫を支配下におこうとする妻よりもはるかにうまく夫を制御できるし、また自分の思いのままに事がはこべる、ということである。「柔よく剛を制す」というべきか、はたまた陰険というべきか。

A spaniel, a woman, and a walnut-tree, the more they're beaten the better they be.

日本の男性は「悪女の深情」に手こずってきたが、美女の妻の動静に気を配らなければいけないのは英国の諺である。Who has a fair wife needs more than two eyes. (美人の妻を持つ者は目が2つでは足りない)は、美しい妻から目を離せないことを表わしているが、どんなに用心しても、The cuckold is the last that knows of it. (妻の不貞に一番最後に気づくのは当の夫)というていたらくである。He that has a white horse and a fair wife never wants trouble. (白馬と美人の妻を持つ者に悩みはつきない)、A fair wife and a frontier castle breed quarrels. (美しい妻と国境の城には争いがつきない)もまた言えて妙である。妻をいかに手なづけておくかについて、諺は、A spaniel, a woman, and a walnut-tree, the more they're beaten the better they be. (スパニエル犬と女とくるみの木は打てば打つほどよくなる)と教えている。この3者は叩かれるとかえって良くなると言われている。くるみの木は、春にその幹を叩くと実がたくさんなるという迷信がある。犬も叩けば良くなるかもしれない。しかし、女はどうだろうか。シェイクスピアの *A Midsummer Night's Dream*

(p. 26 へつづく)

Challenge & Response



「国際英語」と学校教育の英語（ふたたび）

前号で、中尾清秋先生は日本の英語人口を「英語を使う人」と「英語を教える人」の2種類に分類して、後者の最底の線は near native control にあり、國弘正雄先生の「国際英語」、鈴木孝夫先生の Englic 論を「目標」と「結果」の取り違えであると述べておられます。國弘・鈴木両先生のご意見に強い関心を抱いている者の一人として、「国際英語」を従来の英米志向型の英語教育との関連においてどう考えるべきか、具体的なご意見を是非お伺いしたいと存じます。

（愛媛県宇和島市 井上 良）

「暮しは低く思いは高く」

國弘正雄

前号の私の Response を読みかえし、中尾清秋先生のお説を拜見して、私の発言が若干舌足らずだったという思いもあり、敷えんするようにとの読者からのおすすぬめもありますので、以下、少しく補足させていただきます。

まず、中尾教授のいわれる「目標」と「結果」との混同云々についてですが、実は、中尾説のこの部分に私は賛成なのです。私自身、いままでもワーズワースの詩の一節を引いて「暮しは低く思いは高く」と口にもし筆にもしてきました。つまり、たとえ performance のレベルは低いとしても、goal だけは高くおこななければならないという意味においてです。十ほど望んで一ほどかなうのが人の世の常、という下世話を前号で引きましたのも、このような気持からでした。Performance の低さは、外国人として当たり前なこと、したがってそれは恥としない。しかし、もし到達目標が、ただ日常のあいさつ程度が曲りなりにできればいいや、ということであるなら、これは恥とするに足る、と説きつづけてきました。もっともその際の相手は、英語専修の学生だったり、いわゆる ESS のメンバーだったりですから、一般の学生や社会人にそこまで望むことは無理なのかも知れません。ただ世のいわゆる英語好きの中には、志が低いとでもいうのか、一寸したことがブロークンな英語でいえてもしよ

担当

- 前田 陽一（国際文化会館専務理事）
西山 千（国際コミュニケーター）
太田 朗（東京教育大学教授）
平野 敬一（東京大学教授）
國弘 正雄（国際商科大学教授）
小林 祐子（東京女子大学短大教授）

うものなら、鬼の首でもとったような気になっている連中がいままでは少なくなく、ESSなどにそのたぐいが蝸集しがちだったので、とくに声を励ましてその点を強調してきたのです。もっと志を高くもって欲しい。政治なり経済なり文化なりについて、内容のあることを、できるだけ正確かつ大人の英語で表現できるようになって欲しい、その途はけわしいので、決して安易なものではない、ということを書いて欲しいからです。ですから、「こと」と「ところ」の両面において、より高い目標をもつべきだ、という点において中尾教授のお考えと私との間にはさほどの距離はないと信じます。

ここで話はやや脱線しますが、司馬遼太郎氏はその『手掘り日本史』の中で、幕末の蘭学と英学とを比較し、英学がとかくその志操において低く、豊かな世界像を呈示しえなかった理由の一つに、英語のもつ高度の実用性をおいておられるのは興味深いことです。むろん司馬氏のいう「志操の低さ」が具体的になにを指すかは大いに問題ですし、蘭学自体、かなり「実用性」の高いものであったと想像されるので、にわかには賛成しかねる面もありますが、たとえばフランス語やドイツ語、ないしはいま少し「実用性」の低いアジア諸語などを手がけておられる先生方と比べて、われわれ英語関係者がとかくその「志操」において低いらしいのは、すでに何度も指摘された通りです。福原麟太郎先生がその名著『英語教育法』の中で、戦前の日本に触れ、ナショナルリーダーの巻の五がなんとか和訳できればそれだけで何百円かの月給がもらえる国は日本だけだ、という趣旨を述べておられたことも、あわせ思い出されるのです。

とくに今日のように英語のもつ「実用性」が当時と比べても遙かに高くなり、英語の片言も口にすれば、容易に万金を手にすることができるというご時世では、司馬氏の指摘する危険はさらに現実味を帯びてきますし、英語教育関係者が外界からの姦しい「実用論」についつい引きずられがちということもありましょう。中尾教授のご懸念も一つはこの辺にあるのではないのでしょうか。

話はそれでしたが、要するに私もただ通じればよい式の安手な英語を唱導しているのではなく、そんな薄っぺ

らなものは横町の英語教授ではありえても、正規の学校教育の一環としての英語教育ではありえぬとは、たえず述べてきたところです。こととことばの両面における志操の高さを熱望する点においては、私も他の先生方にひけをとるものではないと秘かに自負しています。

ことばそれ自体についても私は、数年前に出した『英語の話しかた』の中で、「細心に大胆に」という点を強調しました。この2つは一見撞着するようですが、私はいやしくも外国語である以上、その習得には最大の細心さが求められると信じています。冠詞なんてどうでもいいとか、可算名詞も不可算名詞も知ったことでないとか、というような粗放な姿勢では、ついに英語など物になるものではありません。そこには外国語に対する畏れの念などみじんもないからです。畏敬の念を全く欠きながら、こちらの物になってくれるなど英語は甘いものではありません。現に私もテレビの対談番組を数年手がけてきましたが、何れも off-the-cuff の発言だけに、まちがいや不十分な点があつてトランスクリプトされたものを見るたびにいくつも目につき、恥しい思いに捉えられ、テキストでその旨告白し訂正するとともに、及び難きを歎じています。しょせんは子守唄を聞いて育ったことばではない、といえ言訳に聞こえませんが、現にそのようなのです。したがって細心さこそは外国語習得の要諦であるという認識においては、寸毫も譲るものではありません。前号でご紹介した西独のダーレンドルフ博士も、恐らく、その学習過程においては細心の上にも細心の注意を払われたにちがいありません。さもなければあれ程の英文を筆にし口にするには不可能だったにちがいありません。

にもかかわらず私は、大胆さをもいま一つの重要な心構えとして挙げざるを得ないのです。とくに日本人は、さまざまな歴史的、社会学的、人類学的事由から「言挙げする」ことをうとましく思い、寡黙や余白を貴んできました。それだけに強烈な自己表出を美德としてきた欧米語の習得にあたっては、むしろ大胆さの方がより多く求められるのではないかと、思うのです。振子が細心さの方によりすぎていることが学習上の一つの心理的困難を形成していると信じられるからで、この点は本誌の74年冬季号で、同志社女子大の Bedford 博士が cultural constraints として指摘しておられるのと同意見です。とくに日本のいわゆる教室英語が、とかく瑣末主義にかたより、大胆さが全く reward されぬどころか、むしろ punish されていることを思うと、あえて大胆さの方に比重をかけた見解を述べることに一つの意味があるよ

うに思われるのです。現に静岡県のある篤学の高校の先生の追跡調査によりますと、大胆さを豊かにもちあわせている子どもの方が、細心一点ばりの子どもより、長く英語から離れない度合いが高く、長い目で見て英語の総合力において秀れるとのことでした。この種の実証的かつ長期の調査がもっと数多く行なわれれば、一つの有力なデータを提供してくれるのではないのでしょうか。

いま一つ、細心さのみに流れると、英語それ自体が自己目的化して、横文字の羅列自体に興味がいきすぎ、内実にはほとんど無関心という怖れが出てきます。むしろ英語自体が自己目的化することはそれ自身悪いことではありませんし、英語学者や音声学者はそれでなくては困りますが、生徒や学生が全部その道に進むわけではなく、彼らはそれぞれ銀行や航空会社や役所や工場に入っていくわけでしょうから、その点にも問題があるように思えます。世の中の他のことにはこれという関心も知識もなく、語法や文法だけが生き甲斐というのは、すべての若者に求められることではありません。あわせていわゆる世間の目が、とかく英語教育関係者をそういう特異な存在として捉え、その個人的な「傾向」を若い者に押しつけようとしているとみなしている事実は、この正誤は別としても、認識しておくべきだと思われるのです。英学のもつ「志操の低さ」という司馬説も案外このあたりを踏まえてのことかも知れません。中味のあることを何とか伝達しようと思えば、とてもアメリカ人同様に鼻にかかったアメリカ英語を、イギリス人同様わざとどもったイギリス英語——ただし Oxbridge の卒業生——を目標にしている時間的気分的余裕など生まれないのではありますまいか。なお中尾先生の near native control が「英語を教える人」としての最低線である、というお説に対しては現実論としても理想論としても私は多くの留保をもつもので、いずれ稿を改めて書かせていただきたいと思います。

さいごにご質問にあった英米志向型という点についてですが、私自身、たとえば『アメリカ英語の婉曲語法』上、中、下にしても『現代アメリカ英語』1、2にしても、アメリカ英語をその背景において根底的に捉えたい、という意識に促されて勉強してきたことの結果であり、その意味では明らかにアメリカを志向しているわけで、その志向と、英語の脱英米化——『英語の話しかた』で用いた表現——ないしは国際英語との関連づけについては、スペースも尽きたことでもありますので、次の機会までお待ちいただければと存じます。

(国際商科大学教授)

ELEC BULLETIN

「国際舞台に於て、自己を表現できる英語」を「国際英語」とよぶのであれば、大変、結構なものであると考えます。ただし、私はその定義の中に、2つのことを含めております。「自己を表現できる」ことと、「英語である」ことです。そして、「自己を表現できる」ことと、「英語を自己流にする」ことは結びつかないし、かつ、結びつけるべきではないと考えるのです。それどころか、日本人である者が、英語で自己を表現しようとすれば、そこで要求されるものは、near native control+アルファではないかと思えます。

私は英語に習熟することを、ペラペラとかっこよく会話することとも、アメリカ訛で発音することとも考えませんし、日本人が英語を話せば、日本語訛が残るのは、結果的にはほとんど防ぎえないとは思っています。しかし、もっと本質的な所で、英語はやはり英語でなくてはならないと考えるものです。その点について少し述べてみます。

私達は、母国語とよばれる言語の中に、生まれてこの方とっぴりとつかって暮しています。日本人の場合は、大きいえば日本語に代表されるほとんど単一の文化の中で生活し、日本語的思考の中で育ててきています。言語と思考の関連は、言語を思考の鑄型と考える Sapir-Whorf 説をとるにしても、思考を言語で表現すると考える立場をとるとしても、はなはだ密接であることは否定できないでしょう。私達の思考の方法は、日本語と密接に関連するものであります。その私達が、英語で自己を表現するとします。言語を使用する場合には、伝達の目的をもってのわけで、相手があります。相手は、日本人以外の人であるとしましょう。彼らも、自分達の言語と密接な関係を持つ思考の型を持っているわけです。この両者がどう、たがいを理解するかが問題です。ここで英語をコミュニケーションの手段として使用することにきめた以上、私達は、日本語というホームグラウンドを離れて、英語のグラウンドで勝負していることをはっきり認めるべきではないでしょうか。相手が、こちらを「言語と文化、ないし思考の型の相違を背景に、日本語的思考の英語をあやつっている者」と認識してくれる学者とか日本通の人もありましょうが、これは例外です。英語を使う以上、理解される英語を用い、相手のいう事もよく理解しなくては、言語を使う目的を達せられません。さらにひとことつけ加えたいのは、日本語を背景とする私達にとって、この問題は、ヨーロッパの言語を母国語とする人達とは全くちがった深刻さを持っているこ

とです。この点はいくら強調しても足りることはないでしょう。

極端な例を挙げましょう。最近、日本語の「悪運が強い」に対する英語の表現を求めていました。和英辞典は「悪運」に対して the devil's fortune を与えています。英米人に尋ねたところ、一様にしかめつらが返答のかわりに返ってきました。一人だけ、「聞いたことがあるようだが」といった反応でした。日本語でごくあたり前のこの表現を、日本人がいたって無邪気に the devil's fortune を使って自己表現をしたつもりになっていたらどうでしょうか。これは、自己表現ではなくて、ひとりよがりになります。これはたしかに極端な例でありましょう。しかし、千数百年の歴史を持ち、多数の人達により、広範囲に渡って使用されているために、さまざまな形式を持ちながらも、英語文化とよびうるものを形成している英語を、簡単に、無邪気に自分の思考型にあてはめて使えば、上記のようなことは、大なり小なり常に起こりうるものであります。その傾向が進みかた一般化すれば、英語をビジン化することにもなりかねません。伝達の目的のためにビジン英語を習うことは、これは全く、今の問題とはかけ離れたことであります。

「文化、ないし思考の型と言語」の相違に言及しましたが、私は平泉試案にあるような「文化の相違」を教えることに賛成しているではありません。はじめから説明により示された文化の相違などは、一度はなるほどと思うかもしれませんが、それまでのことです。外国語として英語を学ぶこと自体に、自分の母国語とは異なった文化に触れる興味と、それをみずから発見する喜びをもちこみたい。外国語の習得を「機械的な暗記」にとどめることなく、母国語と共通性も差異も持つひとつの文化の重要な部分として、認識できるようにしたいと考えるのです。

いわゆる外国語使用にあたっての identity の問題はもはやそこには存在しないと考えます。最初に near native control+アルファと書きました。near native control は目標としてはどうしても妥協できない線だと考えます。実際にどこまで行くかは、学習者の能力や、おかれた状況にもよりましょう。アルファは、母国語および英語に対する意識的および無意識的な理解であります。無意識的な部分も特に言語運用にあたっては重要な部分です。母国語の型をそのまま移して、自己流の表現を相手に押しつけるのではなく、英語を習得するうちに——その中には、もちろん機械的な暗記も含まれましょうが——英語の思考型、ひるがえって日本語の思考型についての洞察力も養われるわけで、外国語を使っても、

自らの identity が失われることにはならないと考えるわけでありませぬ。Thinking in English も、英語で思考する訓練として、大変効果的であり、英語という脈絡の中に自己を置くことになりませんが、それで、identity が失われるほど、母国語の影響は弱いものでしょうか、その方が疑わしいと思います。

英語を習う以上、それはまともな英語でなくてはなりません。発音や文法形式のみではなく、意味、思考の型に至るまで。結果として、日本語訛が生じるのはやむをえないことは前に記しました。よく非難の対象となる「ペラペラと内容のない英語ばかりしゃべれる人間」の存在は、英語教育とは直接関係がないのではないのでしょうか。彼らの内容のなさまで英語教育が責任をとる必要はないと思います。

「国際英語」が、真に「自己を表現できる英語」であれば、まことに結構であり、そのためには、まさに「英語らしい英語」でなくてはその目的が達せられないと考えます。
(津田塾大学教授)

日本人の英語について

英米人の native English と日本人の「国際英語」をめぐる論争を大変興味深く読ませていただいております。それに関連する質問ですが、一般の日本人の話す英語はもとより、入学試験や教科書の英語にも native speakers に対して誤解や不快感を与える文章、あるいはコッケイな表現が少なくないと聞いておりますが、その点についての実状およびご意見をお伺いしたいと存じます。
(山形市 北村正治)

主観的な「不快感」、滑稽さ

若林俊輔

ことばに関する議論というものは、根本的にむずかしい問題を抱え込んでいると思います。それは、どのレベルを問題にするか、ということです。一流の作家とか、一流の講演者を基準として議論するかどうかということです。もしそうならば、普通の人の書く文章や話は、ことごとくレベル以下となりましょう。あるいは「誤解」をもたらす、あるいは「不快感」を与え、あるいは「コッケイ」(ここで片仮名を使うのは、私にとっては不快であります)でありましょう。私が今書いている文章など、本人はまともなつもりでも、他から見ればレベル以下の駄文にすぎないでしょう。

「誤解」とか「不快感」とか「滑稽さ」とかは、できるだけ相手に与えないほうがよいと思います。しかし、どんなに努力してみたところで、これをゼロにすること

は不可能と思います。あえて言えば、これをゼロにしたら、面白くもおかしくもない、蒸留水のような味も素っ気もない文章になって、結局だれも読んでくれないし、だれも耳を傾けてくれないことになってしまうでしょう。一流の作家とか一流の講演者は、これを巧みに逆手に使っているにすぎません。

まして、英語は外国語です。英語については生活感覚が我々には全くないのです。「誤解」や「不快感」を与えることは少ないほうがいい。これは確かです。しかし、もし「誤解」や「不快感」を恐れていたなら、一生何の発言もできなくなってしまいます。

そもそも、「不快感」とか「滑稽さ」とは何でしょうか。私はこれを全く主観的なものと見ます。A が書いた文はBにとってはしばしば滑稽であります。C の発言はDにとって不快なのです。理由はお互いによくわかりません。

日本人は昔から、外国人の下手な日本語に感心し、日本人の英語をけなすくせがあります。日本人はお互いにたたき合って、英語による発言を封じ合ってきた。そして、日本人は英語が下手だなあ、などとうそぶいている。これでは上手になるはずがありません。片や、日本へ迷い込んできた外国人の日本語は手離してほめるから、彼らはたちまちのうちに上手になってしまう。これでは勝負になりません。

入学試験や教科書の英語も、私の知る限りは、ことごとく native check をやっています。にもかかわらず、他の native speakers は不快だとか滑稽だとか、わからんとか言う。ことばというものは、そういう宿命を負っているとしか言いようがありません。

蛇足ですが、私は、日本の子供たちが書く文章がことごとく気に入りません。私に言わせれば下手の極なのです。日本の国語教育は、文の書き方を全く教えていないし、話し方など話のほかです。アメリカあたりですと、もう少しまじめな国語教育をやっていると聞きます。そこで私の不安ですが、アメリカ人の教養ある人たちの語感というものは、日本人の教養ある人たちの語感よりも、訓練が行き届いているのではないかということです。

「誤解」や「不快」や「滑稽」は、この観点から少々見直さなければならぬかな、という不安です。

私自身、入門期の英語教育を専門とする者ですが、その私の観点からは、当面、「誤解」や「不快」や「滑稽」は問題にたくありません。

最後に、以上の私の文章が、ことによると「誤解」を招くのではないかと恐れていることを申し添えます。

(東京学芸大学助教授)



英語教育界の保守性

海江田 進

(筆者はよくこういう形を使うのですが、この文を教育界外の人と、英語の教師との対話という形で書きます。)

A: 現在の日本の英語教育はいろいろ批判されています…英語が役に立たない、新鮮さがない、英文法の色彩が濃厚すぎる、など。

B: 私は学校の英語教師ですが、教育界外部の方々のご批判・ご意見はよく傾聴しています。改めるべき点はぜひ改めたいと思っています。しかし英語教育界という所は、全体としてなかなか保守的な所で、昔からそう簡単に動かないのです。(それに教育関係の事柄によっては、そう簡単に動かすべきではないという性質のものもあるのです。)

まず、私たちの教える英語が「役に立たない」ということですが、これは一般に学生・生徒が英語会話がサッパリできない、ということを行っているようです。私自身は実は英語の授業の目的はいわゆる英会話ではない、と思っているのですが、それにしてもいまの学生・生徒の英会話の力はあまりにも弱い。英語の力が円満な姿になっていない。何年やっても、たとえば駅的位置を英語で正確に言うことができない、というのではなさない。

A: あなたは教室で英会話の指導をしておられる、と聞きましたが…

B: 正直に言って、私は英会話はあまりうまくありません。英語の発音、英会話のABCからやり直そうと思っているくらいです。ただ、いま言うように、学生たちの英会話の力があまりにも弱いので(学生の中には、いわ

ば超然として、いわゆる英会話のごときものを軽視しているように見える者もあります)私はこれはなんとかしなければならぬと思います、英文解釈や英作文の授業時間中に、たとえば My Daily Life, Last Sunday などという題を出題して、2, 3名指名し、その題で(すぐその場でではなく)翌週準備して来させて、教壇上に立たせ、皆の前で英語で言わせているのです。ペーパーを見ながら言う学生もありますから、まあ、英作文と speaking とをいっしょにしたようなものです。私は英会話そのものを教える自信はありませんが、会話的要素をミックスして教えているわけです。

A: ぶしつけなことを申しませんが、日本の英語の先生自身の英会話の力が弱いではありませんか。

B: イヤ、若い人たちの中には英語の発音もりっぱ、英会話も達者という方がこのごろはたくさんいますよ。それに英語教授の目的は英会話(社交会話)だけではありませんしね。しかし全体として、日本の大学・高等学校・中学校の英語の先生がたは、外国の先生と比べて、あなたの言うように、英会話の力が弱いかもしれません。全体として訳読色が濃いのです。それに英文学・英語学を専攻した人たちは、研究の面が強く、平凡な英語の教師として教壇に立ったときは、スラスラと行かないということもあります。

英語の発音や英会話のABCからやり直す、というのは大変なことです。ふり出しへもどるというのは、私たちにとってむずかしいことです。しかし私たちが研究者であろうと、研究者でなかりうと、英語教師という面を持っており、しかも現在英会話を教えることが外部から要求され、その要求が正しいなら、私たちは英会話を改めてシステムティックに勉強しなければならないのです。あなたの言われた私たちの英語に新鮮さがない、という点も、それと関連した事柄ですね。

A: 日本の英語の先生は英文法ばかり教えている、という点はどうでしょうか。英語を文法的に分析だけして、それをスムーズに使うということをしていない。

B: ああいうことをやっているのは、日本だけかと思っていましたら、実はいまの中国でも同じことをやっているらしい。私は昨日あるところで、いまの中国の英語テキストブック(あるいは参考書?)を10冊ほど見せられましたが、それがやはり日本式に英文法をくわしく取り扱っているのです。もっとも一部の本を見せられただけのこと、それが実際にどんなに使われているのかは、中国に行ってみないとわかりませんが…

さて、日本の「英文法」ですが、現在の日本の教室でのやり方は、おそらく明治大正時代以来の伝統のなごりでしょう。私は古い教師で、もう45年間も学校で英語を教えておりますが、学校でのやり方は昔から大体いまのようなものでした。いわゆる終戦後、英語教育は急に解放され、一時それが新時代にはいるのかと思われたのですが、それもつかのま、いつのまにかいまのような形のものに落ち着いてしまいました。伝統の力というものは恐ろしいものです。拙文に「英語教育界の保守性」という表題を付けた理由なのです。私たち英語教師の頭も伝統の大勢に順応してゆくのです。

それに教室の grammar method は高校・大学の入学試験問題の形式と結びついて、互いに因果関係を形づくり、存続しているのです。受験生たちが英語を十分に勉強し、受験生たちが多数存在して、その人々を少数の試験官が短時間に選別しなければならない場合、試験問題の形式はいきおい現在のような英文法をコンデンスした形のものになるのです。

A: 受験英語をのがれる方法はありませんか。活路はないのでしょうか？

B: ないと思います。これは単純な英語のテクニックだけの問題ではないと思います。つまりいい学校を卒業した者が社会でうまくやれるという condition がなくなれば、また受験生本人や両親たちが根本から考え直さないかぎり、入学試験の末端をいじっても、問題は解決しないでしょう…

しかし学校の英語が入学試験のために存在するのでない以上、これは本末転倒の思想かもしれませんが、学校の英語をりっぱなものにするためには、いまの入学試験問題の形を、できる範囲で改革すべきですね。まず英文法の要素をいまより薄くすること。要旨問題というような英文のポイントをつかませる問題を出題すること、和文英訳から文法色を取り去り、問題をもっとやさしくすること（私個人としては、いわゆる自由英作文を出題するのがよいと思っていますが、これは量が多く採点者の負担が大変なものになります）。会話色の濃い問題をふやすこと。また、どの学校でも hearing や dictation の試験を行なうこと。すでに英検でやっていることですから、学校の入学試験で行なえないはずはありません。

A: 日本の学校の英語が文学色が濃すぎるといえることはありませんか？大学の英語の場合など、たとえばテキストブックのカタログを見ますと、教科書の半分ぐらいが文学教材のようです。

B: 外国の場合はわかりませんが、日本では大学の英文科出身者が中学・高校・大学の英語教師になるケースが多いのです。そういう事情があって（もちろん文学作品の英語が一番美しい英語だということもありますが）、文学の作品がテキストとして取り上げられることが多いのです。私自身は英文科出身者ではありません。また、これはデリケートな問題を含んでいて、私としては言いにくいのですが、あえて申しあげますと、学校の英語の必要性というものを上のほうから見た場合、まったくあなたの言うとおりに、文学の要素が勝ちすぎていると思われるかもしれません。文学英語を全部「実用英語」にかえよ、などというむちゃなことは申しませんが、文学以外に経済・政治・自然科学・一般文化のファクターもあるのですから、それらのものを文学とプロポーションを保つようにあなばいすべきだと思います。

A: あなたは英語教育界（一般に教育界）は保守的な所だ、と言われましたが、改革すべき点があっても急には変えられないのですか。

B: 人々いろいろの思想を持っているでしょう。私自身は古い人間ですから、意識しても、しなくても、考えが古くなっています。私の考えでは、英語教育界の保守性はすぐには直らないと思われまふ。しかしそれは私が改革を止めよ、あきらめよ、と言っているのではなく、急激に変えようとするのをせず、徐々に確実に改革を試みよ、ということをやっているのです。私の経験では、いままで教育界で性急な改革の試みをして、成功したためしがありません。英語を「役に立つ」ものにする、訳読色を抜く、文法英語を生きた形のものにする、入学試験を改革する、みな性急に変わらうとしてはいけません。ゆっくりと確実に変えるのです。そして——ここがかんじんな所なのですが——ほうっておけば英語教育界の悪い所はいつまでも直りませんから、私たち一人一人が自覚して、自分のできる範囲で、少しずつ改革するにすべきなのです。私自身そうしたいと思っています。見当違いのことも言ったかもしれませんが、現在私が考えていることをありのままに述べますと、上の通りです。
昭和51. 1. 25. (明星大学教授)

☆ ☆ ☆ ☆

『新コンサイス和英辞典』

中島文雄編

三省堂刊, ¥2,200

KANeko MINORU

金子 稔

日本で英語を教えている人たち——日本人をはじめネイティブスピーカーを含めて——の中には、和英辞典というものにたいして強い否定的な意見を持っている人が多い。学生にたいしてその使用をすすめないばかりか、時には禁止する。「役に立たない」、「あんなものを使っていては自然な英語は書けない」などというのが言い分である。たしかにそのとおりである。これらのことば自体にはなんら異議を唱える余地はなさそうだ。

しかし私に言わせれば、和英辞典を、英語を書く場合の「開門の呪文」のごときものと考えるところに大きな誤りがあるのである。もしかりに和英辞典一冊だけで通用する英語が書けるのであれば、何十年もかけて英作文の修業に精魂を傾けるなどということは愚の骨頂である。「役に立たない」と不平を言う前に、英語力を磨いて、和英辞典が「役に立つ」ように工夫、活用すべきものである。

英語を書くという作業は、英語を読むという作業とは、その困難さにおいて、根本的に異なるものである。英字新聞の社説を読む場合を想定してみよう。適当な和英辞典を与えれば、大学の4年生であったら、曲がりなりにも大体の意味をつかむことができるだろう。では邦字新聞の社説を英訳する場合はどうか。大辞典を与えたところで満足な英文にできるわけがない。辞典の良否はあまり問題にはならない。どんなにすぐれた辞典を与えても、結果は大同小異である。要するに和英辞典だけでは英語は書けないのである。私が言いたいのは、先にあげた和英辞典否定論者が和英辞典を万能視していることに問題があるということなのである。和英辞典を否定するのではなく、和英辞典の限界を十分に心得た上で、賢明かつ有効に活用すべきものである。利用する側の心構え、実力の不足などを棚に上げて、和英辞典の不備・欠陥だけをあげつらうのは好ましくない態度というほかない。

わが国の英語辞典は最近実に目ざましい進歩をとげた。その中で一番問題が多いのは和英辞典であることは認めないわけには行かない。英和辞典と比較して、多くの不備な点を含んでいる。サミュエル・ジョンソンは「辞書作りは単調な作業だ」というようなことを言ったそうだが、和英辞典の編さんに従事したことのある人は、「辞書作りは絶望的な作業だ」と言いたくなるのではあるまいか。口語、文語といった問題だけをとりあげても、日本人にはわからないことが多い。どんなに努力を重ねても、幾多の誤り、不備は避け難い。これは辞書作り——特に和英辞典——の宿命とも言うべきものだ。

私は和英辞典の限界、不備、欠点を十二分に承知した上で、なおかつ和英辞典の利用をすすめるという立場をとる。利用者は、辞典に使われるのではなく、あらゆる意味で完全に使いこなすことが要求されるのである。このようなことは初学者には無理であるかもしれない。しかし訓練と実行とによって少しでも理想に近づいて行くことは可能なはずだ。はじめから使わせないのである進歩も向上も期待できない。

日本で現在何種類の和英辞典が出版されているか見当もつかないが、ここで取り上げようとする『コンサイス和英』は最もなじみの深いものであろう。最初に『袖珍コンサイス和英辞典』の名のもとに発行されたのが1923年とあるから、今から53年前のことになる。この初版の世話になった往年の中学生もすでに古希に達しようとしていることになる。この半世紀以上にも及ぶ間の日本の変化、世界情勢の変化は驚くべきものがある。その変化にこたえるべく何回もの改訂がなされてきた。戦後だけを数えてみても、今度の新版が5度目の改訂ということだ。

ここで正直に告白しておく、私はこれまで『コンサイス和英辞典』を「愛用」したことがない。今回の改訂版のすぐ前の版である『最新コンサイス和英辞典第8版』も今私の手もとにはない。したがって新旧対照して批評することは不可能であることをおことわりしておく。

もともとこのような小型の辞典だから、語いの点でも用例の点でも制約があることは仕方がない。大型辞典に求めるべきことを「コンサイス」に求めることは間違っている。小型であっても、「古くなった語を削除して新語をできるだけ採用するように心掛けた」という方針は新しい辞典として当然とるべき態度である。実際にあたってみると、その方針が生かされていることがわかる。「植物人間」[a vegetable (man)]/「ノンポリ」[non-political (students)]/「日照権」[the right to sunshine; the right of light]/「建て売り住宅」[a built-for-sale

house]/「発展途上国」[a developing country [nation]]
/「イタイタイ病」[the 'itai-itai' [ouch-ouch] disease]
/「マンション」[a condominium]/「ティーチイン」
[(hold) a teach-in]/「コインロッカー」[a (coin-operated) locker]/「歩行者天国」[a car-free mall; a pedestrian precinct; a pedestrian "paradise"]/「110番に電話する」[dial Emergency at 110]/「オーエル」[an office girl]/「ピーピーエム」[ppm; p.p.m. (parts per million)], etc., etc. といった具合である。辞書の好きな人間にとって、新しい語(句)を求めて、あれやこれやとさがしながら、ページをめくって行くのは大きな楽しみであるが、一応このくらいにとめておく。上にあげた例からもわかるように、新しい時代の到来とともに生まれてきた新しい語についても十分に神経を働かせ、配慮を施したことがうかがえる。

新語の採用という点よりも、実際に英語を運用する場合にこの辞典が役に立つかどうかという点に私の注意が向けられる。私の手もとにある小型の和英辞典で「スポーツ」の項をひいてみるとただ sports; a sport とあるだけで、「スポーツをする」にあたる英語はどうなるかということは教えてくれない。これでは困る。play sports が普通だと思っている学生が多いのも当然である。『コンサイス』を見ると (engage in; pursue) sports とあり、sports にたいしては engage in; pursue が使われることを示しているのはありがたい。私としては pursue より take part in または practice あたりを採用したいところだ。「桜川へ釣りに行った」を I went fishing to the Sakura River. と書く人には、p. 1043 の tsuri 釣の項を参照させるのがよい。go fishing [angling] (in a river) とある。in a river に注目させて、to the Sakura River を in the Sakura River に訂正させることができる。「仕事で疲れている」は I am tired with my work. だと昔は教えられたものだ。この with は現代の英語では普通ではないらしい。この点に考慮を払ったのであろう、p. 1072 には be tired from one's work という例が示されている。日本全国の大学生で「AはBと結婚した」にあたる英語を即座に正しく言えるものが一体何割ぐらいあるものだろうか。私は非常に疑問に思う。p. 447 を調べさせるとよい。marry (a person); be [get] married to とあるから正しい英語が書けないほうがどうかしている。以上の例はごくわずかではあるが、ちょっとした時間をかけることによって、様々な知識が得られるように編み込まれているのはけっこうなことである。問題は利用者の活用の仕方にかかってくるのだ。

次に改良したい点について少し述べておく。p. 888 の shukyu 週休の項をあけてみると、「週休2日制 the system of five-day work week」とあるだけだ。この英語を「うちの会社では2年前から週休2日制をやっています」などという文にどう応用してよいかわからず迷ってしまう。小型の和英辞典でも (go on) a five-day week をあげてあるものがあるが、このほうがずっと親切だ。この例文を利用すれば We went on a five-day week two years ago. と書ける。もう少し実力のある者なら We have been on a five-day week for two years. のような表現にも考え及ぶだろう。「銀行ローン」のところで a bank loan とあるだけなので、「銀行ローンで家を建てた」はどう表現してよいかわからない。参考までに大型和英をあけてみたが解決は与えられなかった。大型にないものを『コンサイス』に求めるのは無理だが、例文がほしいことはたしかだ。現在の『コンサイス』でもこの表現を考えることが不可能なわけではない。「銀行」の項をひいて頭を使えばどうにかなる。要は利用者の頭の使い方である。ほかにもこの種の例はたくさんあげられるが、小型の『コンサイス』にこのようなことを望むのははじめから無理な注文とは思いますが、やはり活用度を高めるという立場から一言申しのべておきたいという気がする。

「学習・実務に十分な6万2千語を収録」ということばから、利用者の対象を学生・生徒と一般実務に携わる人との両方においていることは明らかだ。この両者の要求を満たし、かつ現在のページ数を維持することはかなり困難になりつつある。どっちつかずのものになってしまう恐れが十分にある。学習用として考えると、『コンサイス』は物足りない。もっと徹底した「英作文辞典」にしたほうがよい。

「引きやすさ・見やすさを追求して、レイアウト・造本を改良」とあるが、私としてはこのことばに同意し難い。辞書をひく喜びを感じさせてくれるような重量感といったものに欠けている。

こまかい点で不備な点、訂正したほうがよい点があくわづかながらあるように思われるが、全体としてはよくできている。「小型のわりには密度の高い辞書である」という中島文雄氏のことば(まえがき)は顔面どおりに受け取っておいてよからう。(筑波大学教授)

× × ×

新刊紹介

『変形文法のはなし』

今井邦彦著

ここ数年間随分変形文法の初心者向けの本およびその訳本がたくさん出版されているし、また日本人による部分的な紹介もかなり行なわれているが、考えてみると、日本人の手による変形文法全体を紹介した入門書というのは案外少ないというのが現状である。本書はこのような変形文法の数少ないすぐれた入門書の一つと言える。著者は、具体的で身近な例文（主として英語）やたとえをふんだんに駆使して出来るだけ変形文法をとっつきやすくわかり易いものにしようという配慮をしつつ、変形文法の基本的な考え方や仕組みから、英語の種々の構文と変形規則の具体的な説明、最新の文法理論とその問題点に至るまで、実に無駄なく要所をおさえて紹介している。入門書にありがちな物足りなさや味気なさというものは全くといっていいほど感じられない。それどころか、初学者には、著者が言うようになり「しんどい」と感じられるほど専門的で、理解するのに相当骨の折れる部分も幾箇所もある。

本書は生成意味論寄りの立場で書かれたものであり、ほとんど解釈意味論には触れていない。このことは著者自身もあらかじめ断わっている。しかし読み終わって、正直なところ、やはり少しでも解釈意味論に言及すれば、変形文法の面白さや現在直面する課題といったことが読者により明確になるのではないかという

気がした。

細かいところを言えば、紙面の都合もあったことであろうが、焦点と前提との関係、叙事的述語と非叙事的述語の対比、また、派生名詞表現の派生をめぐる問題（変形論的立場と語彙論的立場の対立）等は、出来ることなら是非触れてほしかった。（大修館書店刊、B6判、xii+384pp.、¥1,800）

（津田塾大学講師 小林礼子）

『アメリカ英語の婉曲語法』下

國弘正雄著

いきなり尾籠な話で恐縮だが、天声人語を書いていた故深代淳郎氏がこの本の著者の國弘氏に「立小便」は英語でなんとというか問い合わせてきたことがある。神戸市がそれを厳禁する市条例を作ったころの話だったと思う。私のささやかな自慢は立小便についての expression で國弘氏の知らないのを一つ知っていたということである。“watering daisy”という。つまり、「ひなげしに水をやる」である。ひなげしという花はいかにも可憐で、そんな強烈なこやしには不似合いな花であるのだが、だからこその表現はおかしみがあるのだという。もちろん外国人の私にはそう説明されないとそんな語感にはわからない。しかし、およそ公言を憚る野蛮な行為にこんなやさしげな表現をあてるのが、まさに婉曲語法であろう。ついでにいえば、トイレという「日本語」もやはり婉曲語法だと思う。それまでこの場所についていわれた日本語にそれこそ臭気のこもった語感が定着したため、人々はこれを上品にいうのに、外来語を借用した。だが、その toilet も本場（少なくとも米国では）での会

話で使われることはまずない。それは日本語の便所に相応するからであろう。人の家についてトイレが必要なら bath room ほどこか、wash hands できるのはどこかとたずねる。婉曲語法について考えることの面白さは、それがこのように人間や社会の動態と密接につながっていて、単なる言語学上の詮索を超えた社会観察、文明批評の手がかりを私たちに提供してくれるからである。トイレなどをその例にあげるのは不謹慎かつ面白いとは思わないとおっしゃるなら、それこそ婉曲語法について、そんな下品な例に頼らず蘊蓄を傾けて語っているのがこの本の楽しさである。この3巻が完成した直後出た米上院調査委のCIA外国要人暗殺計画レポートは、國弘著を下敷にして読むと全巻、婉曲語法の政治的効用のすさまじい用例集だということが解る。これはほんの一例でさまざまな意味で“手がかり”、“下敷”の書として読める著作である。（ELEC 出版部刊、B6判、576 pp.、¥860）
（朝日ジャーナル副編集長 筑紫哲也）

『英語と日本語』

—発想と表現の比較—

最所フミ著

本書は過去10年間に著者が『英語研究』『現代英語教育』『時事英語教育』に発表した約10篇の論文を収録したものである。さまざまな問題について、さまざまな角度から書かれた論文ではあるが、根底において著者の目はつねに日英語間の発想や表現の違いにそそがれており、その意味で一つのまとまりをみせている。

全体は「英語と日本人」「現代英語の表情」「現代英語の語法研究」の3部に分けられている。一部は、主

として日本人が英語を使うときの問題点を扱っており、著者の語学習得に対する厳しい態度が打ち出されているところである。日本語を母国語として育ったからといって、英語の不完全な理解を容認する口実としてはならない。むしろ、英語独自の表現に冴えた眼識をもつという英米人になん利点に育てていくべきかというのが著者の一貫した主張である。英米人と同じ正確な態度で、英文を完全に読みとり、完全に書きこなすのでなければ、「英語を学ぶことは無益であるばかりでなく、有害でさえある」と、読者の心にある「甘え」をはねつけている。これだけ強く言い切れるのも、努力によって「完全理解」の域に達したという自負と実績があるからだだろうが、読者のなかには筆者同様その強い語気に気圧されてしまう人がいるかも知れない。

面白く読めるのはむしろあとの2部で、ここで著者は英米の雑誌から生きた表現を拾いあげ、次々と分析の俎上にのせ、単語の辞書的意味から割り出せない内容をとり出してみせてくれる。著者の幅広い知識やすぐれた語感が発揮されているのもここである。翻訳者泣かせの integrity, identity, commitment などの単語にどんな概念が織りこまれていくのかと、act と action, repress と suppress, substantial と substantive がどういう使いわけ方をされているかなど、次々と問題を提起して、納得のいく説明を与えている。

(研究社刊, 四六判, 253頁, ¥950)
(東京女子大学短大教授 小林祐子)

■『現代アメリカ英語——クニヒロのアメリカーナ』1, 2

國弘正雄著

本書は、著者のまえがきによれば

「次々に英語(アメリカ英語)の単語をとりあげ、そのもつ背景やニュアンスを実例をあげて解説し、その単語の意味のひろがりや示すことによって、正しく理解し運用してもらうための一助に」することを目的とするもので、現代アメリカ語法についての正確な情報を、豊富な用例とともに提供している。また、著者独特のユーモアのある語り口は、本書を読物としても楽しいものになっている。

事項別の分類を採用しているが、語法的には、大別して次の(1), (2)の2種類になるのではなからうかと思われる。すなわち、(1)日本語的発想、とくに学校文法的発想で対処することなく誤解、誤用におちいりやすいような語法について、正しい用法を教えるもの、(2)アメリカの風物誌的知識があってはじめて理解できるような語法について解説するもの、である。(1)の例としては、sincerity, polite, mother-in-law, I told you so, sophisticated, parallel, company house, presently, on time, welfare, sabotage, by foot などが、(2)の例としては、apple pie, progressive education, vice president, cold-water flat, bedroom community, egg and tomato reception, downtown, Joe college などがある。

ここで、ぜひ一言しておきたいことは、著者の解説の懇切であることに加えて、用例の和訳文のみごとさである。たとえば“...is doing what you thought only rabbits did”を「皆さんがウサギの専売特許だと思っていらしたことをやりとげたのが」とし、“Heads-I-Win, Tails-You-Lose tactics”を「丁が出て半が出て俺のもの、という戦術」としており、そのほか、すべ

てこなれた名訳で終始している。

著者があげた項目に関連してとりあげてほしい語法もいくつか考えられるが、それは第3巻以降に期待しよう。

(サイマル出版会刊, B6版, ①—180pp, ②—206pp, 各¥950)

(大阪大学教授 毛利可信)

■『英語がわかる秘訣』

長谷川 潔著

ぼくらの身のまわりの若い衆に、さいきんハムが増えてきている。ハムといっても、むろん大根役者のことではない。アマチュア無線士のことである。海外の同好の士と無線通話をするのが楽しいから、というのがその主たる理由であるようだ。

ハムほど病気の重くない若い衆でも、海外放送に血道をあげている連中はびっくりする程多い。メカに強い昨今の若者だけあって、こっちがオタオタするような摩訶不思議な器材を、みごとに操っては海外放送を直接耳にしている。ちょっぴりうらやましく、大いにたのもし。斬れば血の出るような生まの外国語で、生きた情報をふんだんに手にしている彼らに、こちらもよほどがらばらないと馬鹿にされるだけだろう。外国語教師にとっては、また一つ気の重くなる材料が加わった。

その意味で、この本は若者にはもちろん、外国語教師にとっても大へんにありがたい本である。海外放送の聞き方、というサブタイトルがついているだけあって、微に入り細にわたって、海外からの英語放送の聞き方が説かれている。そして、海外放送への親灸を、どう英語全体の実(p.41 へつづく)

新 刊 案 内

『誰も書かなかったアメリカ——さらば200年の幻想よ』デビッド・クン著 B6判227頁,780円 サンケイ新聞社出版局

アメリカのイメージは画一性と多様性, 平等主義と能力主義, 宗教指向と商業主義, 実用主義とヒッピー流反物質主義, etc., と対立する要素から成り立っているが, それらの矛盾の底流に一つの国民性を浮き彫りにした明快なアメリカ人論。

『地球の家を保つには——エコロジーと精神革命』ゲリー・スナイダー著, 片桐エズル訳 四六判264頁, 1,300円 社会思想社

ながく日本に住み, 仏教に理解が深いことでも知られるアメリカ詩人の自然について, 文明について, 淡々とした筆致でつづった詩的な日記・エッセイ。

『アメリカの大衆文化』本間長世・亀井後介編 四六判353頁, 1,200円 研究社

第2次大戦後, 多数のアメリカの軍人および市民が日本に来るようになり, またアメリカ文明は政治・経済・思想の分野だけでなく日本人の生活と大衆文化にも圧倒的な影響を与えてきた。アカデミックに過ぎるきらいのあった従来のアメリカ研究との短絡を埋めるために, 映画・テレビ・音楽から雑誌・漫画まできわめてアメリカ的であり, 同時に一国のワクを越えて現代文化の大きな流れとなっているアメリカの大衆文化を, それぞれに精通した日米14人の学者・理論家・作家・詩人がとらえたエッセイ・論集。

『西部——アメリカの素顔』青木怜子著 B6判188頁, 600円 鷹書房

東部都市の物質文明に示される“アメリカらしさ”に対して, 案外みのがされてきた西部の実像——広い土地と質実で保守的な人々の生活と意識——をアメリカの歴史と文化の中でとらえた文明論。

『ハंक・ウィリアムズ物語』ロジャー・ウィリアムズ著, 南川貞治・望月雄二訳 四六判412頁, 1,600円

カントリー音楽のスーパー・スターであり, 今なおポップ・ミュージックの分野でも親しまれ続けている優れた歌手—作詞・作曲家ハंक・ウィリアムズのショー・ビジネスにおける成功と伝説的な私生活を1930-40年代アメリカ南部社会のなかで包括的にとらえた伝記。

『スコットランドの民話』三宅忠明著 四六判254頁,

980円 大修館書店

著者自身がスコットランド北端シェトランド諸島で収集したものを含め25篇の興味深い民話を集め, あわせて世界の民話・児童文学との比較と簡潔なスコットランド案内を収めている。

『英詩への旅——人と風土と芸術と』宮下忠二著 B6判245頁, 1,300円 八潮出版社

キーツ研究のためにイギリスに留学した著者が, そこで見出し, 静かな感動をおぼえたイギリス人気質, イギリスの四季, 絵画, スコットランドの旅, ロンドンの街等についてつづった印象記。

『わが落書き帖』朱牟田夏雄著 B6判418頁, 2,000円 吾妻書房

イギリス小説, 『トリストラム・シャンディ』, 大学問題からスポーツ, 「ざれ歌」まで収めた洒落な風格を感じさせる随筆集。

The Simple Pleasures of Japan Jack & Camy Condon 著 B6判148頁, 1,100円 主婦の友社

特別にお金を払わなくても日本で楽しめるちょっとしたことを体験から紹介し, 案外みのがされているささいな“日本人らしさ”をユニークな視点から示した面白く便利なガイドブック。

『なぞなぞで入試英語に強くなる本』C. コンドン監修, 池上新編著 B6判192頁, 580円 主婦の友社

ユーモラスな英語のトンチやシャレに関するなぞなぞを173集めて訳と説明をつけた楽しい読物。

『ペンパル事典』堀内克明・良子編 ポケット判257頁, 800円 ジャパンタイムズ

「お礼」, 「家族」, 「公害」, 「宗教」, 「ステレオ」, 「留学」, 「料理」等様々なテーマの中項目を集め, それぞれについて基本的で使い易い表現を収めた便利な和英例文集。

『旺文社英和中辞典』高橋源次他監修 B6変型判2,110頁, 2,000円 旺文社

現代アメリカ英語〔つづり・発音〕を主としてイギリス英語を併記し, 重要語には重点的に文型・語法などを詳説し, 文化的背景も簡潔に記述して事典的要素も加味した使い易く内容豊かな学習辞典。

『英語のイントネーション——研究と指導』奥田夏子著 B5変型判93頁, ソノシート2枚付, 900円 英和出版(東京都練馬区関町1-163)

英語発音の不可欠な要素である音調(強勢, 抑揚, リズム, ポーズ, リンキング等)のパターンを要領よくまとめ, 教室での指導のための例文と解説を収めた実際のテキスト。



展望 通信

◆1976年 ELEC 夏期英語教育研修会

夏期英語教育研修会は、中・高英語科教員を対象にして、文部省の後援のもとつぎの要領で実施される。

A. 前期 ELEC 会場 (通学制)

会期：昭和51年7月26日から8月7日まで

会場：東京都千代田区神田神保町3の8 ELEC 会館

募集人員：180名

特色：外国人講師による英語通用能力の養成，日本人講師による授業実習 (Practice Teaching) をとおして how to teach の基礎的な技術を養う一方，専門分野に関する講演も予定している。

B. 後期八王子会場 (合宿制)

会期：昭和51年8月10日から16日まで

会場：東京都八王子市下抽木大学セミナーハウス

募集人員：80名

特色：外国人講師による英語運用能力の養成，日本人講師による専門分野に関する講演があり，自然の森に囲まれたセミナーハウスで，外国人講師と起居をともにして生きた英語を学ぶことができる。

◆第15回 ICU 夏季言語学研究会

本年度のICU夏季言語学研究会は次の通り開催される。

会期：1976年8月30日(月)，31日(火)

会場：国際基督教大学理学館

なお，研究発表(各25分以内，別に質疑応答10分)を募集しているので，詳細については，国際基督教大学語学科(〒181 東京都三鷹市大沢3の10の2)あて問い合わせられたい。

◆ELEC 協同研究グループ発足

ELEC では4月からつぎの研究グループが発足する。

1. 教材・教授法研究
2. テスト・入試問題研究
3. 情報・資料の収集および分析研究

◆ELEC 海外英語研修

1976年度海外英語研修旅行は次の通り実施される。

A. ミシガン州立大学英語研修旅行

旅行期間：Aコース——7月26日(月)から8月24日(火)まで

Bコース——Aコースに同じ。ただし8月16日から20日までは自由行動とする。

英語研修：ミシガン州立大学英語研修センターで7月28日から8月15日まで

旅行費用：Aコース——585,000円

Bコース——515,000円

募集人員：40名

対象：教員，一般社会人および学生

申込：「募集要項」および「申込書」は，東京都新宿区西新宿1の18の8日本交通公社海外旅行新宿支店 ELEC 英語研修旅行係あて請求する。

B. ヨーロッパ語学研修旅行

旅行期間：7月24日(土)から8月22日(日)まで

旅行経路：東京～ロンドン(5日間：語学研修)～パリ～ジュネーブ～ミュンヘン～ザルツブルグ～ウィーン～ヴェニス～フロレンス～ローマ～アテネ(エーゲ海クルーズ)～東京

旅行費用：589,000円

募集人員：30名

対象：教員，一般社会人および学生

申込：「募集要項」および「申込書」は，東京都文京区後楽1の3後楽園トラベルサービス ELEC ヨーロッパ語学研修旅行係あて請求する。

英語展望 (ELEC Bulletin) 第53号

定価 480円 (送料120円)

昭和51年4月1日 発行

◎編集人 中島文雄

発行人 酒井杏之助

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 ELEC 出版部 (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8
電話 (265) 8911~8916
振替・東京 3-11798

ELEEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC